

---

# ボスフリーッシュ

椿山 昇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボスフリーリッシュ

### 【Nコード】

N5675J

### 【作者名】

椿山 昇

### 【あらすじ】

身体能力を高める有人ロボットに乗り込み、オリンピックならぬマシリンピック。そこで行われる競技の一番人気のある競技でタイトルを総なめにしてた人物がいた。だが、それは昔の話。とある事件をきっかけに、この国でマシリンピックと言う単語を聞く事も有人ロボットを乗り回す人も少なくなった。

そんな中、とある事件をきっかけにある異名を手にする事となった、少々身長にコンプレックスを抱く少女が、有人ロボットと出会い、その魅力に引き込まれていく。・私は、カイボーなんて・

## プロローグ

『さあ今回もやってまいりました。ロボットと人間の複合競技。舞台は、なんと4年ぶり、カイボー発祥の地、ここ日本。ローマのコロッセウムをイメージして造られた円形劇場の観客席には、多くの人で賑わいを見せております。その中を颯爽と入ってくる各国の代表選手達です。紹介していきましょう。まず、最初の登場は、アメリカの・・・』

壁に掛けられた薄っぺらいテレビの向こうでは、会場を上空から撮影した映像とその熱気をどう伝えようかと模索するアナウンサーの声が、薄いテレビの向こう側を小さな部屋にいる幼い私を会場にいるかのように、見せてくる。

『そして、最後に入ってきますのは、日本代表、昨年マシリンピック優勝者、金城 正志。後に続いて出てくる彼の右腕と言っても過言ではないでしょう。彼の吹き鳴らす南風を勢いづける炎、原田・

』

日本代表のチームが入場すると会場は一気に盛り上がり、入場してくる日本代表は、それに応える。

『各チームが、今メンテナンスルームにそれぞれの観客に応えながら入っていきます。これより最終メンテナンスが行われる間に、これまでのカイボーの歴史に遡って行きましょう』

生中継の画面が、切り替わり編集された映像が、テレビに映し出される。

日本で少子高齢化社会が社会問題となる中、介護用として生まれた。有人介護用ロボット、通称『カイボー』。製作者側は現在でも

『ケアリングロボット』と言っておりますが、新聞一面に出された『カイボー』という言葉が、市民に定着しカイボーは、介護施設や自宅介護の老夫婦で現在でも活躍しております。

『像に踏まれても、逆に持ち上げます』

そんな歌い文句で、発売されたカイボーは、某テレビ番組のある企画で、新たな道を作り出すことになりました。それは、本当に像に踏まれても問題がないのか実験するという企画でした。

像を実際に使用するのではなく、一般人がカイボーを装着し、どれほど無難な問題を解決していけるかという、明らかに悪質な嫌がらせのようなこの企画ですが、お馬鹿タレント三人組『劣等感』人気アイドル下地、鷺野、山久保が三人とも、100m走で世界新記録を一秒以上も、上回る記録を打ち出し、リトルリーグ『パワフルカブス』対Q.L学院の試合では、なんとQ.L学院の完封負け、ノーヒットノーランを達成し、15対0のまさかの敗北。

さらなる追い打ちは、一般の奥さんを募集し、集まったママさん達が、本場のアメフト選手を第1Qで、本国へ帰らせる事態となり、このテレビ企画は終了しますが、ネットで話題となり、介護以外の目的で購入する事態が起き、目をつぶっていた製作者側も、その対応に追われる事態となり、アウトドアスポーツとして新商品を発売。手ごろな価格と言う事で若者たちの中で、広まりストリートから始まったこの競技は、国内、国際的な物になるのも時間の問題でした。競技の種類は、いくつにもなり、力・技・速といった三種類に分ける事が出来ます。ですが、今行われる競技は、世界で最も注目度、人気度があり、力・技・速が組み込まれたスポーツ。一体誰が命名したんでしょう。『何でもあり徒競走』です。

『さあ、歴史を振り返っているうちに、各選手がスタートラインにつきました』

画面は再びLIVE映像に切り替わり、選手一人一人を映し出し、各国の特徴あるカイボーが現れる。体全体を鉄の塊で隠された選手の表情を窺う事は出来ないが、アナウンサーは、とても集中しているようにこちらには伝わってきますなど、訳のわからない事を言うてくる。

最後に映し出された日本代表のカイボーを映し出すと、画面は再び全体を映し出した。

『ここからは実況の歯取に伝えていただきます』

『ハイ、お伝えします』

実況の行われる部屋を映し出し、画面の半分以上に、ほとんどの歯が溶けた男の人が現れた。

『お勤め後の初の仕事です』

そんな言葉に、横にいる解説者も苦笑いをし、テレビ画面に映る人を見ておそらく、テレビを見ている誰もが表情を強張らせ、今頃ネットでは、大荒らしが起きているのだろう。ノートパソコンを取り出し、固定カメラに見せてくる。

『ハイ、今ネットで「帰れ!」とか、歯の事について書き込んでいる人・・・オジサン怒るよ・・・えっ?なんで、クビにならないかって?それはね、じ・つ・りよ・く!』

右腕の袖をまくり、腕を見せつけるアナウンサーに、スイッチが入り、先ほどのアナウンサーとは、まるで違う表現の仕方画面に映る映像を語り始める。

『さあ、今回は一体どんなエクセレントな、ビックイベントが起きるのか、楽しみであります。そして、今スタートのホイッスルが吹かれる!』

## 第一章　く月から舞い降りた何か

小説や漫画など月から降ってくるのは、大体、白馬に乗った王子様、もしくは月からの使いの者。もしくは男好きの使徒だと勝手に肯定していた私の頭上に向かって、音を立てながら落ちてきた物は、皇子でもカエル君でもなく人の形をした鉄の塊だった。

（え？降ってくる？なんなのあれ？）

見上げるほどの高さのビルが連なる街中で、一人さみしく帰路についていた私に起きた突然の出来事。そのあまりの突然さに、動く事も出来ず、無駄に思考だけがフル回転する。

（こんな夜遅くに帰ってくる私にお父さんはなんというか、そんな怒り狂う父親に「うるさい、たまには自分で料理作れ！」と、言い返そうとしていたのに、それも叶わない夢なの？こんな事なら、夜遅くまで友達と遊んでるんじゃないかった。無駄に1年前の修学旅行の話で盛り上がるんじゃないかった！）

お得意の現実逃避をしようと、上から降ってくる物は、消える事もなく次第に足の裏までもはつきりと見てくる頃、彼女はついに悲鳴を上げた。

彼女の悲鳴をかき消すような音で、彼女の目の前に墜落した鉄の塊は、地面のコンクリートを蜘蛛の巣状に破壊し、土埃を舞わせた。

「いつてえー・・・ああ・・・やっぱり痛くないかも・・・でもやっぱり痛いって」

土埃が舞う中、声のこもった鉄の塊は、自分の旋毛らへんを指で掻きながら立ち上がり、辺りを見渡し、立ったまま硬直する学生服の女性がいる事に気がついた。

気付かれた事に気づく彼女も、逃げようにも足がすくんで動く事

が出来ず、周りから見てかなり大きい自分を、なんとか縮こませる事しかできなかった。怯え震える女性に鉄の塊は、一礼すると大きな音を立てながら、飛び上がりビルの隙間に手をかけたりして、上手に屋上へ登り、月夜に姿を消した。

大きな音を聞きつけ、先ほど分かれた友達が私の事を心配して「美弥！」なんて曲がり角から声を掛けてくれた。その言葉で金縛りが解けた田村 美弥は、友達にしがみ付き「怖かった〜」そう言いながら、友達を振り回した。

数分後、打身になった友達は、首をしっかりと固定され、救急車で運ばれて行く所を、田村は見送り、警察に事情を説明しようとしている間に、父親が現れた。娘さんがちょっとパニック状態にありまして、事情を聴こうにもよく理解できない、という警察官の主張に、いえ、いつもこんな感じだと父親は、警察に伝え「白い奴」とか「モデルスーツみたいな奴が空から」とか、思った事を全て口から吐き出してくる娘の言葉を理解し、警察に翻訳した状態で伝える事、数十分。保留処置と言う事で解放され、家に帰った後、父親にがつつりと怒られて、次の日、学校で私はある異名を手にする事になった。

季節は春だというのに桜は咲かず、いまだに雪が薄らと残り、外を歩けば白い息が、口から吐き出される。そんな中、ここ弄月高校では、新たな開拓地を見出そうとやってきた新入生達によって、期待という花が咲き乱れていた。

「北船中学校出身の田村 美弥です。ちょっと身長が、高いと言うコンプレックスを・・・か、かか抱えていますか・・・ええっと、よろしくおみゃーします」

高校の入学式も無事に終え、自己紹介で完全に上がり頭が真っ白

になったロングヘアの美弥は、言いたい事も言えずに無駄な事を言って着席すると、周りからは小さな笑い声が、聞こえてくる。一人の少女の期待という花は、夏を待たずに、一気に枯れ果てた。

「・・・ちよつとじゃなくて、かなりじゃない？」

「たしかに」

そんな小声が、美弥の胸に深く突き刺さった。中学の知り合いが、誰もいない高校に入学した美弥は、この弄月高校の校門を、期待と一抹の不安を抱えながら入ったが、一抹の不安は、一抹ではなくなり、他の人の自己紹介が耳に入る事がないくらい落ち込みながら、一日目を終了した。

放課後、新しくできた友達や、中学からの友達と楽しそうに会話する人達を羨ましそうに自分の席に座りながら眺める中、後ろから背中を指で突かれた。

「ねえ、美弥さん」

（神様だあ！）

この際、指で背中を突かれようが、後頭部をいきなり叩かれようが、喜んで振りかえろう！希望に満ちた表情で振り返れば、後ろの座席で、机に頭を乗せて美弥の背中を指していた手をヒラつかせる小さな女性が座っていた。

「私、津村 翠。<sup>みどり</sup>よろしくね」

髪を上でまとめ上げ、ちょんまげ姿の津村は、にこやかに話しかけてきた。

何と呼べばいいか、戸惑う田村に「翠でいい」と言い、田村の中で津村のいい人ボルテージのゲージが急上昇する。

（この人絶対にいい人だあ！）

心の中で浮かれる美弥に津村は早速、質問をしてきた。

「中学の時に、何かスポーツとかしてた？」

「それが、まったく」

「ええ、もったいない」

（もったいない？もったいないとは・・・）



答えは知っている。この体格である・・・小学校の時は、男子からメスゴリラと呼ばれ、中学の最初の時は、まさかのカイボーと一部の男子からは、言われていたと風の伝で聞いた。体を動かす事は好きだが、あだ名が怖くて部活と言う縛られたスポーツをした事がなかった。中学の初めは、体験入部を繰り返すうちに、部活潰しなんて呼ばれる事もあった。一番ひどかったのが、体育館にやってきた瞬間、先輩の一人が「出た。部活潰し」と声を出した事だ。

津村の熱弁も自分の過去を振り返っているうちに、終了していた。  
「それで・・・」

「えっ？どこのそれで？」

現実に戻された美弥を見て首をかしげる津村。

「・・・話聞いてた？」

「ちよつと上の空でした」

「まあいいや。今から部活見学に行かない？」

「どこ？」

「柔道部」

（JUDO?）

ごつい体の男達が、上半身の道着を脱ぎ「ソオイヤ！」という掛け声とともに、肉体美を見せつける前を太った男が一人通り過ぎていくイメージが、美弥の頭の中に出てくる。

ところが、そんなイメージの中の、背の小さな津村が入った瞬間、上腕二頭筋を見せつけながら迫ってくる男達は、大きな音を立てながら砕け散った。

「柔道？」

「そう柔道」

返答に戸惑う中、津村は美弥の腕を掴み「さあいざ逝かん！」出口を指さしながら、戸惑う美弥を引きずって行こうとする。なんとか抵抗を見せる美弥だが、津村の握力と力に圧倒され、入り口まで、本当に引きずられていった。

「待って、待って」

抵抗を続ける美弥は、入り口から突然現れた男子生徒にぶつかつた。

バランスを崩す事無く立っている美弥と逆に、男子生徒がバランスを崩し倒れた。

「ごめんなさい、大丈夫ですか？」

「え、女子？・・・ってデカっ！」

デカイと言う単語をいい残し、男子生徒は教室へと入って行った。美弥は、その言葉の意味を別の物に例えようとする。

（でかい？はて、一体何の事？・・・まさか、胸か？胸の事か！）

教室へ入って行く男子生徒を見送る津村の持っている物と見比べ、（ごめんなさい）と心の中で呟き、胸の事ではないとショックを受けた。

一方、津村は通り過ぎて行った男子生徒を見て「狐だ。」なんて呟く。

「狐？」

確かに言われてみれば、短く切った坊ちゃんヘアに、折れ曲がった背中、つり上がった目つきと言い、下に伸びた鼻と言い、第一印象は、狐に見えなくもない。

「でも、狐って・・・知らない人に対して、動物扱いは可哀想じゃない？」

「違う、違う。うちの中学校で、狐って名前が、結構有名だったのよ。名前なんだっけかな・・・忘れたけど、虎の威を借る狐って知ってる？」

美弥の頭の中では、子供のころ見ていたテレビアニメの『ブチえもん』の登場キャラ『スネ毛君』が、主人公がジョイアンに檻裡雑巾にされ、泣いているのを見て、ずる賢そうに笑っているシーンが蘇ってくる。

「ああ・・・『ブチえもん』で言ったら、スネ毛君のポジション的な感じのあれ？」

「そうそう。でも、スネ毛君が可愛く見えちゃうほど、重症らしい

けど。鞍替えが激しいっていうか、ジョイアンよりも強い奴を見つけたら、そっちに行っちゃう感じ」

「うわっ、かなりの浮気性ね。・・・確かに狐かも」

狐と呼ばれる男子生徒は、教室に入ると誰かを探しているのか、辺りを見渡し、窓際の方へと歩いて行く。

「しかも、かなりの情報通らしいよ・・・実際、この教室まで来ちゃってる訳だしね」

ため息交じりに、津村が呟き、美弥は首をかしげる。

「この教室って？」

「狐のお目当ての人達が、この教室にいるって事」

「嘘！そんな人がいるの？」

狐が、向かう先を見つめると、黒ぶちの眼鏡を掛けたデカイ男が、だらしなく小さな椅子に座り、それほど大きくない男子が彼の机の上に腰を下ろし、楽しそうに会話をしていた。

「うわっ、何あの凸凹コンビ」

最初のクラス全員、自己紹介が全く項を奏する事がなかった事を自覚しながら、彼ら二人を指さす。

「ちよつと、二人とも結構気にしてるんだから、そんなこと言わないの」

指をさす美弥の腕を、津村は無理やり下ろす。むしろ周りから見れば、美弥と津村も十分凸凹コンビである。

「最悪・・・不良的な人と同じクラスだなんて、そんな人いない所を求めてこの学校に来たのに」

落ち込み、肩を落とす美弥を「まあまあ」なんて言いながら津村は、肩を叩き励ます。

「大丈夫、全然不良とかじゃないから」

「だって、あのでかい方とか、絶対態度デカイって。体と一緒に・・・」

背の高い方に再び指を指すが、その指を素早く津村に降ろされた。短髪のデカイ方は、自分にあった制服がなかったのか、小さな制服

をボタン全開で羽織り、制服の中に着た黒いシャツが、ごつつい肉体を見せつけていた。

「違う違う。あのかい方は特に問題ないよ。むしろ問題のある方は、あのちっちゃい方」

ちっちゃい方、そう言われ全く見向きもしなかった小さな方に視線をやると、大声で笑う彼の口だが、犬歯が妙に特徴的に見え隠れし、その笑い方も品がなく、地面に足が届かないのか、足をばたつかせながら笑っている。

「なんか、凄いのが二人揃っちゃってるね」

二人を見比べて、あまりの存在感に感心しながら、呟いた美弥に對し「そうでしょ」と返していたその時、狐が彼ら二人に話しかけようと手を挙げた途端、小さな方が狐に気付き、ばたつかせていた足で、狐の顎を蹴り上げ、見事に宙に浮いた狐は、のけ反りながら先ほどまで座っていた田村の机を半壊させ、地面に倒れた。

突然の出来事に口を閉じる事を忘れる美弥と、またやったと言わんばかりに自分の頭を手でたたきながら、ため息を漏らす津村。そして、この状況を説明するためには、すこし時間を戻し見る目線を変えなくてはいけない。

机も自分が座っている椅子のサイズがどうもしっくりこない。それは中学の時からそうで、毎回、どうしてもデカイ人用の机や椅子がないんだと頭を悩ませている。

「何、机いじってんだよ。いじったって、でかくなる訳ねえだろ」

「いや、膝が入らなくて・・・」

「それより、机を揺らすな。俺が座ってたんだろ」

机に腰掛け足を左右交互に揺らしながら、原田 正義まさよしが文句を垂れてくるが、何より机に座ること自体間違ってるだろ。毎回指摘しても返ってくる言葉は決まって、「お前より目線が高くないと嫌だ」

と言ってくる。案の定、今回も指摘してみたが、全くその通り帰ってきた。

「・・・にしても、狐がこの学校に入学してたなんて、ヒ口は知ってた？」

「いや、まったく。入学式そうそう声掛けられるとは思わなかった」ため息を洩らしながら、体育館で狐に声をかけられた事を思い出し、軽く鬱になる藤田 浩。膝を机に収める事を諦め、厄介事は勘弁だと思いながら、またため息を吐く。そんな藤田を見て「ため息を漏らすと幸せが逃げちまうぞ」と正義は指摘する。

「・・・って、デカっ！」

そんな声を聞き、二人は入り口の方を見た。正義は、津村とあまりにも大きな女性を見て驚き、口を開いた。

「おい、ヒ口。津村の横に、お前といい勝負の女がいる」

「いやいや、俺の方がかいから。確か・・・ええっと、田村だっけ？」

「知ってる女か？」

「知ってるも何も、覚えてないのかよ。自己紹介の時、テンパってた奴」

『よろしくおみゃーします』

顔を真っ赤にし、着席する女性を思い出し正義は大爆笑し始める。足を更にはたつかせ、藤田の机を軋ませる。

「そうだ。確かに、いたなそんな奴が！」

「おい、机が壊れるって・・・足を地面につけなさい」

「うつせえ、ボケ！」

地に足をつける事が、出来ない事を指摘される中、片手をあげ、笑顔の狐がタイミングよくやってきた。

「ねえ、アクセルとブレーキ・・・」

「うつせえ、ボケ！」

狐が、全てお言い終える前に、ばたつかせていた足をそのまま宙に上げ、狐の顎を蹴り上げた。入り口の方では、凸凹コンビのデカ

イ方は、口をあんぐりと開け、小さい方は、やれやれと飽きられた感じに、手で頭を叩きながらため息を漏らす。

一方、狐を蹴り上げた正義は、蹴り上げた足をそのまま上に持ち上げて、見事に机の上に着地をしてポーズを決め、藤田は席に座ったまま宙に浮く狐の行く末を見守っていた。

狐は、机を一つ壊しながら地面に叩きつけられ、顎を押さえ「何をするんだ」と言いながら上体を起した。

「うつせえ、しつこいんだよ。先輩に挨拶回りとか、勝手に一人でやつてろよ」

「お、俺は、君たちの事を思ってたな。・・・大体、二人が弄月高校に入学したのだって、ここのチームに入るためだろ。だったら、先輩達に挨拶するのが常識だろ」

二人を力強く指さしながら、正論を言っているようになっていた狐だが「はあ？何言ってるんだ？」と正義が首を傾げ、素頓狂な声で言った事に対し、ピンと伸びていた指も力を無くし、曲がってしまった。

「な、何言ってるんだ。なら君達は、一体何のためにこの高校に入学したって言うんだ！」

一人でテンションを上げる狐に対し、乗る気でもない二人は顔を見合わせ、一人ずつ手を挙げて、正義は「近いから」そして、藤田は「仕事の関係で融通が利くから」と答えた。二人の答えを聞き「そんな馬鹿なああ・・・」と狐は、頭を抱えて嘆き始めた。

「ねえ、じゃあさ・・・お願いだから挨拶だけ、それだけでいいから」狐は、二人の前に正座し、拝むかのように頭を下げてくる。だが、狐のお願いも通じず正義は両手をクロスしバツ印を作って無言で答えた。

「どうせ、その先輩達に、アクセルとブレーキも後で連れてきます。とか、口走ったんだろ」

藤田の呟きに狐は、頭をあげて「どうして、それを」と口走り思わず両手で口を押さえた。その言葉に正義は怒り、藤田はため息を

ついた。

「だあ！もう、てめえの噂ってのは、どうやら全部本物みたいだな！勝手に人を巻き込んで、自分の顔に泥を塗らない程度に逃げて、後は知らんぷりってか？お前の頭ん中、マジでどうかしてんぞ」

言い訳をし始める狐を見て、正義は机の上から飛び出し、襲いかかるうとするが、藤田がようやく席から立ち上がり、正義を止めた。  
「マサ、落ち着け」

止めに入った藤田は、それでも襲いかかるうとする正義を肩に担ぎ、先ほどまで座っていた自分の席に座らせた。

椅子の背もたれを前にして座った正義は、まるで檻に閉じ込められた猿が、柵にしがみ付き見学する客を威嚇するかのようになり、妙にとがった犬歯をむき出し、狐を睨みつけていた。

威嚇する正義とそれを見て怯える狐を見て、旋毛部分を人さしで掻きながら藤田は、思い悩んだ。

そして、その行動を見て一人の大きな少女は、開いた口を更に大きく開き「あつ」と声を出していた。そんな事には気づかず、藤田は、床に腰をついたままの狐にゆっくりとした歩調で歩み寄り、その場にしゃがみ込んだ。

「鼻血」

そう言いながら狐の鼻を指し、自分の鼻から血が出ている事に気づき、袖で拭こうとする狐に、ポケットティッシュを手渡した。狐は、礼も言わずに原田から貰うと手際よく鼻に詰め込んだ。

「その状態で、先輩達に挨拶に行けばいい。そんな怪我してたら、先輩達だってお前の努力ぐらいは、認めてくれるさ」

藤田の助言と自分の身の安全を天秤にかけ、思い悩む狐。そんな中、津村の呼びかけにも応じず、藤田と狐の前に背の高い方がやってきた。

背の小さい方が、狐に向かって両手で作ったバツ印を見せつけながら、何やら喚く狐を、入り口で眺めながら、津村が口を開いた。

「あの二人、アクセルとブレーキって呼ばれてて、由来は・・・まあ、見てたら大体分かるか」

口を開ける状況ではない美弥は、二人に釘付けになる中、大きな方が椅子からゆっくりと立ち上がり、彼のでかさは、自分ですら敵わないほど大きい事を認識した。

旋毛部分を掻く行動を見て、中学時代の彼女のトラウマを思い出させ、開いたまま動かなかった口が動きだし「あっ」と、声が出た。「どうかした？」

（どうかしたかって？そりゃ、大有りですよ！忘れもしない、あの鉄の塊・・・あのお陰で私は・・・）

大きな地鳴りとともに大腿で美弥は、でっかい方へと近づき、背中の方では津村が声をかけているようだが、まったく耳に届かず、下に蹲る狐とティッシュを手渡す藤田を上から見下ろした。

大きな影が、狐と藤田を覆い隠し、藤田は顔をあげて美弥の存在によつやく気がついた。胸を大きく張り（ない物を張ったってどうしようもないけど・・・）机の脚が見事に折れている席を指さす。

「そこ・・・私の席なんだけど」

「ん？ああ、ごめんね。明日までには、ちゃんと直すから。それで許してくれ」

「・・・もし、それで許さないって言ったらどうする？」

彼女の発言に、クラス全体がざわつき出し、怒りに燃えあがっていた正義は、この展開を面白がり椅子をガタガタと揺らし始め、後ろの方では津村が「美弥、いい子だから戻っておいで」と呼びかける。

「じゃあ、どうしたら許してくれるかな？」

少々悩んだ末、藤田は立ち上がり美弥の前に立ち、少し見上げるほどの巨体が立ちあがるが、一歩も動じない彼女に狐も驚き、二



人の展開を下から見上げていた。

「そうね・・・なら、今から私がする事を許してくれるならいいけど？」

「よし、それでいこう」

何の躊躇もなく藤田がそう言った途端、美弥は大きな彼の顔を思いつきりビンタした。

パンと大きな音が、教室を木霊し、藤田の掛けていた眼鏡が宙を飛び、巨体が地面になぎ倒された。

その光景を見た正義は、大爆笑して椅子から転げ落ち、倒れる際に後頭部を机の角に強打し「いつてえ！」とうめき声を上げながら、木製のタイルが敷き詰められた床で、のた打ち回った。

放課後に残っていたクラスの間々が、口を開いたまま動けない状況で、下でこの光景を目の当たりにしていた狐が唯一、動きを見せた。

「黒い髪を靡かせ・・・見上げるほどの身丈を持つ女・・・破壊神だ・・・」

狐が、そう呟くと、金縛りにあっていた人たちは、動き出し「破壊神」という単語を文脈の最初につけてざわつき始め、その単語が狐から飛び出した時によやく我を取り戻した美弥は、やってしまった事を激しく後悔したが、すでに遅かった。

なんとか、その単語を落ち着かせようと言い訳を考えるが「あの」「その・・・」といった単語しか、出てこないまま、狐が美弥を指さして叫んでしまった。

「破壊神・美弥だ！」

## 第一章　く月から舞い降りた何か（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

まあ面白いのかどうか、書いておきながら正直わかりません。

更新を早くやりたいと思います。目指せ一日、一話！

ですので、最後までお付き合いして下さいれば幸いです。

御意見やご感想があれば、お待ちしております。

く破壊神・美野く

初めての高校生活で、さっそくやってしまった高校デビュー。望んでもいなかった事が起き、教室では、昨日の出来事が話題となっていた。そして、極めつけは津村が、持ってきた高校新聞だった。

『破壊神・美弥！粋な高校デビュー！』

まさしく粋なタイトルと、地面に倒れる男子二人と、その横で胸を張った女子の写真が、新聞の一面をデカデカと飾り、美弥は、本当に直っていた自分の机に突っ伏したまま、深いため息を連発していた。

「ああ・・・まさか、この名前が高校にもついて回る事になるなんて・・・」

「美弥が、あの破壊神だったとはね。・・・こっちでも、その名前は結構有名だったよ」

「嘘！そうだったの？」

美弥の大声に教室は、一瞬静まり返り、高校新聞を広げ美弥の前の席に座っていた津村は、大声に驚きながら小さく頷き、再び美弥は顔を机に突っ伏し始めた。

「あんな噂、全部嘘なんだから・・・」

「だよ。友人の首の骨を折ったなんて信じられないしね・・・」

「あつ、それは、本当」

「えっ・・・」

一歩引くような津村の行動に気付き、訂正を入れようと説明下手な美弥の口が開いた。

「ち、違うの。別に、ボキッて訳じゃなくて、その・・・ちよつ、ちよつとコキッとしただけ。いや別に・・・折ろうとしてた訳じゃなくて、打ち身程度だと思ってたんだけど・・・私もその訳わかんない

くなつてとにかく必死に・・・あつ、藁をも掴むって感じ?」

「・・・それで、友人の首を掴んだって言うの?」

身振り手振りで状況を説明する事、楽しい学園生活の二日目を終了させるような勢いの凸凹コンビだが、窓際に座る凸凹コンビもまた、破壊神の話題で持ちきりだった。

机の中に足を納める事を諦め、両サイドに足を出す藤田と、その机の上に腰を下ろす正義。

「ヒロ、お前よくあんな事されて、怒らないよな」

「別に怒る気はないけど・・・よくよく考えりゃ、あれ壊したのって明らかにマサだろ」

「お前には、きっとマゾっ気があるんだな。俺だったら、きっと大激怒だね」

「人の話聞いてる?」

「・・・にしても、破壊神が弄月に来るとは思わなかったな」

急な話題転換に、自分の主張を通そうとする気は失せて、ため息を漏らす藤田。そして、ため息をそう何度もするなと正義に指摘される。

「大体、破壊神ってなんだよ。おれ知らないよ。なんでマサは知ってるんだよ」

「あれ?知らないのかよ。結構有名だぜ、破壊神・美弥。生身の拳でコンクリートを破壊して、破壊神の名前欲しさに挑んできた挑戦者を悉く粉碎する」

ないない、そんな挑戦者とかいなかったから。向こうの凸凹コンビは、津村の質問に手を横に振り、藤田は正義の説明に首を傾げる。  
「拳でコンクリートを破壊って・・・あり得ないだろ。カイボーじやあるまいし」

「まあ、そうなんだけどよ・・・一応、噂だから・・・」

出来る訳ないでしょ。自分で言うのもなんだけど一応、女の子ですからね。空からカイボーが降ってきたって言うても誰も信じてくれなかったし、結構大変だったのよ。

「噂の事、考えるとよく無事だったよな。破壊神が攻撃したら、そこには隕石が落下したような跡しか残らないらしいからな」

「そりゃまた酷い噂だな。・・・凄いな、破壊神って名前考えた人」  
もう大迷惑。お陰様でこっちは残りの中学校生活は、肩身の狭い思いで通って、仲の良かった友達すらちよつと距離を置かれた感じだったし・・・ああ、破壊神って名前から逃げようと思って弄月高校に入学したのに、なんでこうなるの。

そんな会話が繰り広げられる中、二日目も何事もなく終了し、放課後を迎えていた。

「美弥、今度こそ、部活見学に行こう」

「え、まだ諦めてなかったの？」

津村のそんな一言で始まり、強引なお誘いに圧倒され、玄関まで引きずられていった時によく「見学だけなら」と承諾した。

校舎の裏には各部活の専用スペースが広がり、道場へと案内される中、美弥は驚きの連続だった。

「すごい、テニスコートが4面もある！・・・うわっ、プール長つ！・・・あれ何？アメフト？」

部活に力を入れる弄月高校に興奮鳴りやまない美弥はテニスコートを見て、未だに雪が残る季節だというのにユニフォームを身に纏った女子を指さし「あっ、パンチラ」と声に出すほど気分は高ぶっていた。

細い道を進む二人だが、両側に広がる部活動に目を輝かせる美弥は、横に嫌な顔一つせず歩く津村がいることをすっかり忘れていた。いまだに辿りつかない道場を探して歩き続け、美弥は、ようやく落ち着きを、取り戻し始めていた。

「ねえ、まだ道場には辿りつかないの？」

そんな、美弥の質問に、一年生全員に渡された部活案内を眺める津村は「一番奥にあるみたい」と答え、かなり歩き続けている二人は、この校舎の広さに驚いていた。

「あのさ、柔道部ってどんな感じなの？なんか色々と厳しいとか、そういうの勘弁だからね」

「大丈夫、適当な部活らしいから」

「それに、破壊神が柔道部に入部！とか、新聞に書かれたりしたら大変なんじゃない？」

「それもまた大丈夫、なんか本当に適当な部活らしくて、道場のお邪魔虫ってレッテル貼られてるらしいから。どん底に落ちてる部活に破壊神って名前が書かれても、これ以上落ちないから」

「お邪魔虫って、なんでそんな部活に入部しようと思うの？」

「ん、私は別に大会に出場できれば、それでいいの。練習とかは、他の道場でやるから」

「えっそうなの？じゃあ私を呼んだ理由は？」

野球部のランニングとすれ違いになりながら津村は「一人じゃさみしいから」と答え、美弥は、柔道部に入部しなくて済むという安心感とそれだけの為に拉致られたのか？と残念といった複雑な気持ちで、校舎の片隅にある道場を発見した。

やけに立派な道場からは、竹刀のぶつかり合う音が外からも聞こえ、入り口から、道場の中を覗きこむと、フローリングが敷き詰められた場所で、剣道の道着を着た人達が、竹刀を振るい、肝心の柔道部は見当たらず、畳は壁の隅に上げられていた。

その光景を見た二人は、黙って顔を下ろし、その場に腰をおろして、今、見た物を思い出しながら美弥が先に口を開いた。

「い、今のどういう事かな・・・」

「さあ・・・お邪魔虫だから、本当に駆除されたとか？」

「うわぁ・・・入る気なかったけど、なんか可哀想」

「いいんじゃない。なんか月見て楽しんでもよくな部活らしいから道場からは剣道部の掛け声が響き、道場の前に目的も失い立つ二人は向かいにある錆びついた倉庫を見つけた。「なんだろう？」と呟き、津村は部活案内の紙を覗いた。

「カイボー部だってさ」

「嘘、カイボ―部なんてまだあったの？」

錆びついた倉庫の入り口の横には傷んだ木の板に薄らと『カイボ―部』と書かれてあった。そして、その錆びついた倉庫の中から、大きな足音がこちらに近づいてくる。

足音が近付くにつれて、機械の関節部分が稼働している音が聞こえてくる。道場の前で見つめる二人の前で、錆びついたシャッターの下から機械の手が出てきて、閉まっていたシャッターを持ち上げた。

大きな音を立てながら、シャッターは上に勢い良く上がり、丸みの帯びたピンク色の鉄の塊が、茫然と立ち尽くす二人の前に現れた。  
「・・・お前ら、入部希望者か？」

鉄の塊は、二人に気付き声をかけ、美弥は「えっと、その」と上手く断る言葉を探せず混乱し、津村は顔と手を勢いよく横に振っていた。

その二人の反応に入部希望者ではないとわかり、残念そうに肩を下ろす鉄の塊は「そこ、危ないからどける」と二人に指示し、素直に従った。

素直によけた二人だが、一体何が危ないのか？と美弥が尋ねる前に、道場の屋根を何かが滑る音が聞こえてくる。二人は、その大きな音に気付き見上げると、道場の屋根から人が、飛び出し、先ほど二人が立っていた場所に着地した。

飛び降りてきた人は、勢いを殺すために足に装着したローラースケートのような物で土埃を立てながら、急停止した。

「桜田さん、出張サービスは料金高いって何度言ったらわかるんですか？」

土埃が舞う中、ゴーグルを外し、ポケットから眼鏡を取り出し、聞き覚えのある声の人が、眼鏡を掛けながら、倉庫の前に立つ鉄の塊に声をかける。そして、鉄の塊を改め、桜田と呼ばれた人は「行くのが面倒だ」と答えた。

「まあ、こっちは金さえ払っていただければ別にいいですけど・・・」

次第に土埃も晴れ始め、その中から現れた緑色の作業着を着た男は、ピンク色の鉄の塊から、片足を取り外し、淡々と分解していく。帽子を深くかぶった男の背中には『金城カイボー専門店』と黒い文字で書かれ、傷んだ部品を見て「うわっ、アキレス腱の筋が最悪だ」などとぶつくさ呟いている。

「ちよつと、桜田さん。また、砂浜とか走ったんじゃないですか？」  
「ん？それ以外の故障で浩を呼ぶ訳ないだろ」

（浩？）

聞き覚えのある声と桜田が言った名前を、どこかで聞いた気がすると思ひ悩む美弥だが「いいですか、この機体は砂浜に適してないって何度言ったらわかるんですか！」と、ピンク色のカイボーに説教をし始め、立ちあがる男は、大きなカイボーとほぼ同じ身長で、美弥はようやく大男の正体がわかった。

「あつ、ブレーキだ！」

作業着を着た藤田を指さし、声を出すのが全く気付かない藤田にカイボーが先ほどから佇む二人を指さし、藤田に気付かせた。

「あれ？翠と・・・田村だっけ？なんでこんな所にいるんだ？」

深くかぶっていた帽子を取り、帽子の下から現れた藤田の顔を見て本人だと、美弥は再確認する。

「それは、こつちのセリフだ！何その作業着？」

「何って・・・俺の仕事着だけど？」

まだ口から大量の質問が飛び出してきそうな美弥の口を津村が塞ぎ「何でもないから、作業続けて」と藤田に促した。津村の助け舟を貰い、作業に取り掛かる藤田。足の筋肉に似た形の部品を水に満たされたタライの中に入れ、洗い始めた。

「あれ？浩、今から仕事してるってことは、もう柔道はやらないの？」

「まあな。高校にも行かせてもらってるのに、少しでも返していかないとな」

「ふーん、そうなんだ」



二人のやり取りに、ようやく落ち着きを取り戻す美弥は、津村の手を外し、さつきから立ったまま動かないカイボーをマジマジと眺め、それに気付いた桜田という人は「な、何？」と少々、後ろに下がる。

「翠は、まだ続けるのか？」

「ん、どうだろ。さつき酷い光景見ちゃったし・・・ちよつと迷ってるかな？」

二人のやり取りと藤田の作業はしばらく続き、美弥は物珍しそうにカイボーを眺めていると、後ろに下がり始める桜田に話しかけていた。

「あの、白いカイボーってここにありますか？」

「あのな。この部活にカイボーを二体も変えるほど、財力があると思うか？この機体一つだけだよ。それに、白いカイボーなんて誰も乗らないさ」

「えっ？でも、日本代表のカイボーって白色だったじゃないですか」「だからだよ。誰も好き好んで白い機体には乗らないさ。それに、白色は、こいつ等のシンボルマークだ」

こいつ等と言って指を差された藤田は、津村との会話と作業がちょうど終了し、組立作業に入っていた。

「別に白がシンボルマークじゃなくって、塗装するのが面倒なだけですよ」

「その割には、シールとか上から貼ってるじゃないか」

「塗装よりも安く済みますから」

藤田は、組み立て終えた部品を、ピンクのカイボーに装着しようとカイボーに近づいていく。

「けど、お前ら、まさかカイボー部に入部する気じゃないだろうなやめた方がいいぞ。今は人気もないし、先輩方おっかないし」

その言葉に、カイボーは装着させようとする藤田を邪魔し、膝を動かし始める。小さな抵抗に、手こずる藤田は「料金高く請求しますよ」と釘をさしこんだ。いつも二人でいるのが当たり前のような

イメージだったアクセルとブレーキだが、その一人が、校舎裏で仕事をしている姿を妙に感じながら、美弥は「アクセルは？」と尋ねた。

「さぁ・・・家にはいなかったし、どこかに出かけてるんじゃないかな？・・・あつ、そうだ」

藤田は、ポケットから一枚の紙を取り出すとピンク色のカイボ―に手渡した。

「今度の会場の場所です。一応、報告を・・・」

「はい、どうも・・・うわっ、またパイプかよ」

「ご愁傷様です」

桜田の反応に藤田は、手を合わせて憐れみ、美弥は、何の話をしているのかわからなかった。

「もしかして、デビュー戦？」

津村の問いかけに、藤田は首を横に振った。

「いや、人数が足りないから、今回は無理だな。いつも通り、白薔薇のチームで出ると思う」

「ねえ、何の話？」

話についていけない美弥が、三人に聞くが「何でもない」と藤田に言われた。

「それより、なんでブレーキは仕事してんの？」

美弥の何気ない一言に、その場の空気は一気に凍りつき、津村に聞きては、頭を抱え込む始末だった。

「えっ、何？聞いちゃいけない事だった？」

「いや、別に問題ねえよ。・・・俺、親が二人とも死んじまっっていないんだよ。んで、餓鬼の頃から原田の家に厄介になってるから、少しでも返そうと思って、中学の頃から手伝ってるの」

藤田の背中に書かれた『金田』のロゴを見て、首を傾げる。

「あれ？アクセルの名字って、金田だっけ？」

「金田ってのは、俺の親父の名前だ」

「それ、何？」

美弥の口からは次から次へと質問が飛び出す。質問攻めになりながらも嫌な顔せず藤田は、美弥の指さす、藤田の靴について話し始めた。

「これは、カイボ―の足のパーツだ。バランス制御も勝手にしてくれるから、案外、フル装備じゃなくても便利なんだよ」

片足を上げて、自分の履いた靴について事細かに説明をし始める。「まず、足首部分に貼付した電極によって体内から出る微弱電流を読み取り、それに対して、人工筋肉が反応して、動いてくれる。まあ脚力増強シューズって感じかな？」

藤田の足元では、靴が、音を立てながら、前後に揺れ、バランスを取り続けていた。

「へえ、そんなのあるんだ」

感心する美弥の隙をつき、藤田は「お代は後で」と桜田に言い残し、ゴーグルを付け、少し膝を曲げたかと思うと、土埃を立てながら、飛び上がり、道場の屋根に飛び移り、屋根の上を滑って行った。

手を振って見送るピンク色のカイボ―と、大きな風がスカートをめくり上げるのを防ぐ二人。そんな事には全く気付かない藤田は、所々に生えた電柱をうまく具合に足場にして飛んで行った。

「ねえ、カイボ―って公道走っちゃ駄目なんじゃないっけ？」

美弥の質問に「車の数少ないし別にいいだろ」と答える津村は「ああ、それから」と話を続けた。

「浩に、カイボ―の事そんなに聞かない方がいいかもしれない」

津村の言葉に「その通りだ」とピンクのカイボ―も答えながら、倉庫の中へと戻り、錆びついたシャッターを降ろした。

「えっ？なんで」

「なんでって、私の口から言うのもなんだけど・・・」

津村は、少々困りながらも美弥に藤田の父親が死んだ理由を伝えた。その時、春の冷たい風が、二人を通り過ぎて行った。

老人介護施設のカイボアの定期点検を終え、小さな商店街を滑る藤田は、頭の旋毛部分を掻きながら、悩み事をしていた。商店街を歩けば、周りの人達が声を掛けてくる。そんな人達に軽く挨拶しながら、カイボアについて、質問しまくる美弥の顔を思い浮かべていた。

「あいつ、どこかで見た事あるな・・・」

かなり昔に、一度会った気がする藤田は、昔の出来事を思い出す。うとするが、思い悩む藤田の後ろから、商店街の店の人から貰った串焼きを口に銜えた正義が、走り寄ってタイミングを見計らい、両足を地面から放し、ため息をつく藤田の背中を両足で蹴り飛ばした。「ため息は、幸せが逃げるって何度言ったら、わかるんだ！」

バランスが崩れた藤田を救おうと、靴が急停止し、逆にバランスを崩して倒れてしまった。

早速、正義が災いを起こし、藤田は、背中をさすりながら口を開いた。

「マサ・・・お前は、後ろからドロップキックを食らわせるなど何度言ったらわかるんだ・・・」

「うつせえ、ボケ！」

正義は、立ち上がろうとする藤田の口に、手に持っていた袋から串焼きを取り出して無理くり突っ込んだ。

「へへっ、やっぱ焼き豚は、ここが一番だぜ」

夕焼けに赤く染まる顔は、いたずらに笑い、その笑いを見ると思わずこっちの不満が吹き飛ぶような気になり、自然とこっちも笑みがこぼれる。藤田が小さく笑う所を見ると、正義は、駆け足で木造の小さな店に「ただいま」と叫びながら入って行った。

串焼きを口に銜えながら藤田も立ち上がり、店に入るとそこには、

薄暗い部屋に何台ものカイボーが並べられ、壁にはカイボーの年代別の写真や新聞の切り抜きが飾られていた。

写真には、紙吹雪が舞い優勝カップを手にする男達の写真が入った額が、いくつも飾られ、店の奥に進むにつれて、喜び合う人数も増えて行った。

最後の一枚には、白黒の新聞の切り抜きが額に納められ、山に囲まれたトンネルから黒煙が上がっている写真に藤田は目を取られていた。

「おう、浩。おかえり、ご苦労さん」

木造の階段を軋ませながら、降りてきた人に気づき藤田は慌てて写真から目を放した。

「ただいま・・・オジサン」

『浩のお父さん。世界大会の決勝戦で亡くなったの』

津村に言われた言葉が、美弥の頭の中に残り、ボケーと呆けたまま列車に揺られていた。

海の色が夕日に赤く染まり、いつも通りの風景を眺めながら、国民の五人に一人が見ていたと言われる決勝戦の事を思い出していた。

有名実況者の齒取が、実況を務め、握った手に力がこもる中、圧倒的な差を作り出した日本代表のカイボーが長いトンネルに差し掛かり、数十秒後、黒い黒煙がトンネルの両出入り口から立ち昇り始め、後からやってきた後続者は、その異様な光景に立ち止まり、それと同時に、黒煙が赤い炎へと変わった。

一瞬、大きな音が鳴り響き、映像が乱れたかと思うと、すぐに立ち直り、齒取が絶叫をしながら、状況を伝え続けていた。

「信じられねえぜ！」

列車に同乗していた男子高校生が、叫んだ言葉に美弥は我に返った。

どうやら彼等は、今日あった出来事を面白おかしく話していたらしいが、齒取と同じセリフを言われた美弥にとっては、不愉快極まりない物だった。

破壊神の睨みに気がついた彼等は、大人しくなり、美弥は再び赤く染まる海を眺め続けた。

## く桜田湊、登場く

次の日の高校新聞の一面を飾った物は、今や時の人『破壊神・美弥』だった。

『破壊神・美弥！道場のお邪魔虫、柔道部を駆除！』

昨日限りで、お月見、兼、柔道部は廃部となり、その日、道場付近で破壊神を見たという目撃情報が多発し、やる気のない部活を見た破壊神が、畳を全て燃やしたと記事には面白おかしく書かれていた。

そんな在りもしないデタラメ記事には、破壊神の横を付いて歩く津村の事も書かれ、二人を合わせて『w・<sup>ダブル</sup>村長』と呼ばれるようになった。

「あちやく、ついに私も高校デビューか・・・」

記事に頭を悩ませる津村と、昨日の出来事について頭を悩ませる美弥は、自分の席で机に突っ伏していた。

「ああ・・・やっぱり、謝った方がいいのかな」

「ええ？・・・別にいいんじゃない？浩、気にしない質だし・・・」  
力なく受け答えを繰り返すw・村長。正体を掴めない新聞部に恨み辛みを飛ばす津村と、謝るべきか？謝らないべきか？を、窓際に座る藤田を睨みつけながら、悩む美弥。

そんな殺気を感じ取る藤田は、体を震わせていた。

「なんだか、さっきから、殺気が感じられる」

「山田君。座布団二枚取りなさい」

親父ギャクに体を震わせる正義は、赤い着物を着た男に指示するかのようなセリフを吐くが、「違う、違う」と藤田は、手を横に振った。

「何かわからないけど、悪寒がするんだよ・・・。特に破壊神から」

藤田の言葉に、机に座っていた正義は、向こうの凸凹コンビを見ると、二人から発せられる黒い負のオーラを目にした。

「うわっ、なんだありゃ……。おい、ヒロ……。あの二人に何したんだよ」

「何もしてないよ……。お前じゃ、あるまいし……」

「うわっ、その発言は、俺が傷付いた。謝罪を要求する」

「日ごろの行いが悪いからな……」

「謝罪を要求する」

「この間、夕食当番を俺に押し付けた」

「謝罪を要求する」

「お得意さんの娘さんを泣かせた」

「じゃ、謝罪を……」

「発注した品の桁を間違えて、なんで左手の人工筋肉だけ50個も仕入れるんだよ。まあ、数を疑問に思った向こうが電話をしてくれたからいいものの……。まだ言うか？」

「いえ、……。もういいです」

俺から意味もなく謝罪を要求するには後二年くらい足りないね。

と、案外現実的な年数を藤田は口にしながら胸を張る。

そんな中、危険な臭いを嗅ぎつけ鼻を動かす正義は、ざわつき出す廊下に目をやった。低い声で唸りだす正義に気付き、藤田も教室の出入り口に目をやった。

廊下では、新入生を脇に追い込みながら真ん中を堂々と歩く集団が、一年B組の入り口で止まり、勢いよく扉を開いた。

ホームルーム

まだ朝のHRすら始まっていない教室に突然の来訪者に全員が目をやり、入り口に立つ、こんな時代遅れの恰好をした人達が、まだいたのかと思えるような、長ランを着て、頭に立派な剃り込みを入れ、髪をピシッと後ろに揃えた男の集団に、教室にいる生徒達は体を強張らせていた。

「わあっ、凄い。時代遅れの風物ブツ!……」

目を輝かせ、周りの反応とは違う美弥を、津村は、机に抑えつけ、



何事も無かったかのように、入り口に立つ人達に愛想笑いをして見せた。

「何でもないです。先輩」

女子の凸凹コンビから目を放し、窓際でバリバリ戦闘態勢の凸凹コンビを見つけて、ズカズカと教室に入り込む先輩達の後ろには狐の姿もあった。

戦闘態勢の正義を抑え込む藤田は、唸り声を上げる正義に「口を開くなよ」と念を押し、やってくる先輩方を待ち構えた。

「よお、アクセルとブレーキ。あまりに遅いから、迎えに来てやったぜ」

低い声で席に着く二人を睨みつけながら言ってくる先輩に、何か言い放とうとする正義の口を、藤田は手で押さえた。

「だから、ちゃんと桜田さんに伝えたはずだ。俺達は、あんた等とは走らない」

「その桜田からお前達を連れてくるように、俺達は言われたんだよ」  
「嘘つけっ！桜田が・・・」

正義の口を再び抑えつける藤田。

「俺も嘘だと思っね。昨日、桜田先輩と会った時は、そんな素振りを見せてなかった。もし、本当だというなら、直に来いって伝える。・・・それに」

藤田は席から、大きな体を持ち上げ前に立つ先輩方を見降ろした。  
「あんた等じゃ、役者不足だ」

眼鏡の中から先輩達を睨みつけ、圧倒感を見せつける藤田。その藤田の言葉に、時代遅れの先輩方は「わかった」と言い残し、教室から出て行き、後ろについて歩く狐に気が付いた正義は「狐え！めえ、覚えてろよ」と大声で叫んでいた。

嵐が過ぎ去り、静けさを取り戻した教室では危険を回避した藤田と津村が胸を撫で下ろしながら、先輩方を携帯の写真に収めようと暴れる美弥と、狐を追いかけようと暴れる正義を取り押さえていた。

落ち着きを取り戻した美弥は、再び謝るべきかを悩み始め、正義は、さっきまでのイライラを藤田の机にぶつけていた。

「なあ、マサ。もう止めとけて、周りに迷惑だ」

藤田の机をバンバンと蹴り、机が痛いと言を出していた。

「うつせえ、ボケ！大体、さっきお前が止めてなけりや、こんな事にはならなかつたんだ」

「だからって、教室で乱闘騒ぎを、黙って見過ごす訳ないだろ」

「さっきは、見過ごすが正解だ」

「残念ながら、不正解だ」

藤田の言葉にさらに蹴りを強く入れ、机は助けると悲鳴を上げ始める。そんな中、頭を抱えて悩む美弥にとってその不協和音が、イライラへと変貌するのは時間の問題だった。

「ああ！もうさっきからうるさい！」

机に両手を思いっきり叩きつけながら、謝るところか美弥は立ち上がり、音の出る方を見ながら怒鳴りつけてしまった。

突然の出来事に目を丸くするアクセルとブレーキは「ごめんなさい」と自然と口から出て、その出来事が、次の日の高校新聞に載る羽目になった。

タイトルは『破壊神、アクセルとブレーキを飼いならす！』死にたいと思った……。

『ついに悪名高いアクセルとブレーキを飼いならした破壊神・美弥。今後、新聞部は彼女の活躍をしっかりと追って行こうと思う』

新聞の最後の一文には、そんな事を書かれ、これは所謂、公開イジメなのでは？と思い始める美弥。

そんな美弥と津村の前に先ほど、突如藤田が現れ、意味もなく頭を下げてきたのだ。

正確に言つと、昨日から放たれる殺気は、おそらく彼女等は、カイボー部に入部しようとしていたのに、突然の藤田登場＋入部やめとけ宣言。

それに怒つた二人は、殺気を放っているに違いないと、読んだ正義に、とにかく謝つておけと促され、藤田が謝りに来たのだ。

「いや、入部したいなら俺の紹介してやってもいいからさ・・・そんな時は、声を掛けてくれ」

何を素つ頓狂な事を言っているんだ？と無表情で見つめる二人に、首を傾げながら藤田は自分の席に戻り「なんか違うみたいだ」と机の上に座る正義に声を掛けてみるが「やっぱりな」と頷いていた。

「ねえ、あの二人つて一体どう接すればいいの？」

窓際で騒ぐ二人を見ながら、美弥は付き合いのある津村に尋ねるが未だにわからない津村は、お手上げ状態だと言わんばかりに両手を上げて「わからない」と答えた。

「あつ、そうだ」

何かを思いついた藤田が、再び席から立ち上がると、机に顔を突っ伏す二人の所に再び、やってきた。

「今日、カイボーの賭け試合があるんだけど、そこにカイボー部の先輩も来るはずだから、お前等も来るか？」

「行かない」

撃沈した藤田は、自分の席で落ち込み、さらに正義に慰められる始末に、さらに落ち込んだ。

「よしつ、やっぱり謝るべきだ！」

「えっ？まだ、悩んでたの」

昼休み中に机を合わせて昼食タイムを取っていたw・村長。悩みに悩んだ結果、すでに忘れていそうな出来事を、掘り返して謝ろう

とする美弥を止めようとする津村だが、肝心の藤田の姿が、見当たらなかった。

「あれ？」

美弥が首を傾げる中、津村は正義に声をかけた。

「ねえ、浩は？」

「ああ？仕事・・・出かけたよ」

正義は大きなパンを口に放り込みながら答えていた。

「嘘、じゃあ今日は帰ってこないの？」

美弥の反応に首を傾げながら、正義は放課後に戻ってくると伝えた。

「じゃあ、本当に桜田さんの指示じゃないんですね？」

薄暗い倉庫で、ピンクカイボアの最終調整をする藤田は、パイプ椅子に座る人に話しかけていた。

「ああ、俺じゃない。あいつ等が、勝手にぼざいてるだけだろ」

「しっかりと手綱を掴んでて下さいよ。こっちに火の粉が飛んできちゃ、そっちだって困りまるでしょ」

陰で顔がハッキリと映らない桜田に、調整代を請求しながら言い「はいよ」と二つの意味を込めて桜田は、藤田の手に金を渡した。

「じゃ、失礼します」

「おいおい、ゆっくりしてもいいんじゃないか？今は、俺以外、誰もいないんだぜ？」

「そもも行かないです。俺はpink pantherの専門スタッフじゃないですからね。これから、狛犬さんの所も行かなきゃいけないんです」

「狛犬って・・・隣の奴じゃないか、放つとけよ」

不満をタラタラと垂れる桜田は、パイプ椅子の上で足をばたつかせる。

「金田専門店は、お客様を選びません」

藤田は丁寧にお辞儀をして、そう言い残し、倉庫から出て行った。

放課後、本当に鞆を取りに戻ってきた藤田は、風のように現れ、風のように教室から正義を連れて去って行った。

声をかけようとしていた美弥の手は、虚しく途中で止まり、慰めようとする津村がその手を優しく包み込んだ。

「あれ？原田と浩、知らない？」

津村の大きな胸で、虚しく泣く美弥に声をかけて来たのは、小麦色に焼けた肌が印象的で、短い髪を金色に染めた女性だった。

突然、見ず知らずの女性に話しかけられる二人は、その見ず知らずの女性をジロジロと見つめ、その視線を感じた女性は「な、なんだよ」と思わず後ろに下がり始める。

身長は高くも無く低くもないが、なんとも幼い顔で同い年だと思うが、年下だと思えてしまうこの子に、二人は、深くため息をついた。

「なんだよ。お前等、その反応は！」

小麦色の頬を膨らませ、噛みついてくる子供に、二人は、また更にため息をついた。

「あのね。破壊神とか呼ばれてる私が、言つのもなんだけど、あの二人には、近づかない方がいいかな？」

命名・小麦ちゃんの身長に合わせ、かがみ込みながら、美弥は金髪の頭を撫で回す。

「や、やめろよ！」

嫌がる素振りも、また愛くるしく、目に涙を浮かべる小麦ちゃんだが、美弥のビジョンには、背景に花が咲いていた。

「いや、なまら、可愛い……」

（いや、なまら、めんこいっしょ）

声と思っている事がシンクロし、また更に強く頭を搔きまわす美弥を見て、笑いだす津村。

「お、お前等！いい加減にしとけよ。先輩に向かって何たる態度を

取ってるんだ！」

小麦ちゃんは、そんな嘘を付きながら美弥の攻撃から逃れるが、目が光る美弥は「逃がすかあ！」と声を上げながら、悲鳴を上げて縮こまる小麦ちゃんに飛びついた。

一通り、小麦ちゃん楽しんで美弥は、顔を輝かせ満足げに席に座り、涙ぐむ小麦ちゃんは津村に案内されて、教室の中央へと誘われた。

「だ、だから、俺はアクセルとブレーキがここにいるか、聞きに來ただけだ。それなのに、お前等が、邪魔しやがって・・・」

「ね、ねえ翠、聞いたあ？あの子、自分の一人称、俺だつてさ」

「うん、聞いた聞いた。可愛いい」

話を通じず、甲高い声を上げる二人に、頭を悩ませる小麦ちゃん。

「お前等、もしかして俺の事、覚えてないのか？」

「覚えるも何も、今、隅々まで調べたから、何でも思い出せるよ」

目を光らせ、両手の指をいやらしく動かす美弥に、思わず体を守ろうと両手を胸の前でクロスさせる。

だが、その反応が再び、美弥の心に火を付けた。

「又オオオオー、お持ち帰りいい！」

再び、目を光らせ、襲いかかろうとする美弥に、小麦ちゃんは、その炎を沈下させようと、空飛ぶ城で主人公達が、最後の呪文を言い放つ並みの言葉を、力強く両目を閉じ、言い放った。

「俺は、桜田 みなと 湊！三年のカイボー部、部長だ」

目を潰された敵は、明言を吐いてそこら辺をふら付くはずだが、呪文を食らった二人は、その呪文の効果が、うまく発動されず、硬直していた。

呪文が、うまく効いたと勘違いする小麦ちゃんは、胸を張って見せるが、その態度に二人の呪文は不発に終わってしまった。

「あのね、小麦ちゃんが桜田先輩な訳ないでしょ。私のイメージでは、もつとこう・・・ヤンキーっス！みたいな感じだから」

美弥の脳内妄想では、口にマスクを付けサングラスをかけた男の子が「何見てんだコノヤロー」と言いながらコンビ二の前に腰を浮かせて座り、立派なリーゼントが風に吹かれて上下に揺れている映像が、映し出された。

「そうそう、大体、浩に小麦ちゃんみたいなの、可愛い子は似合わないよ」

二人は、顔を赤くさせる小麦ちゃんの頭を撫でまくり、怒りに震えだす小麦ちゃんは、お奉行様が紋所の刻まれた薬箱を取り出すが如く、生徒手帳を取り出した。

写真付きの生徒手帳には、小麦ちゃんの顔と、桜田湊と書かれた文字が、浮かびあがり、それを承認する校長のハンコがしっかりと押されていた。

ピンクのカイボーに乗っていたのが、桜田先輩のはず。そして、目の前にある生徒手帳には、桜田湊と書かれ、二人の脳内では、カイボーに装着される小麦ちゃんが連想され、見事にマッチした。

呪文の効果が表れた美弥は「目がああ、目がああ」と目を抑えながら苦しみだし、紋所を出された津村は、頭が高いと思い、急ぎ小麦ちゃんの足元で土下座をした。続いて、美弥も津村の横に正座し、頭を下げようとすると、二人の顔の前に白紙の入部届けが突き出された。

「フッフッフッフ、貴様等の入部届けだ。有り難く受け取れ」

さっきまでの辱めをここで返さんとはかりに、笑って見せる小麦ちゃん。嫌とも言えずに受け取る美弥だが、その入部届けの枚数が、二枚、多い事に気がついた。

く人違いく

「あら、翠ちゃん。久しぶりねえ」

小さな商店街を歩く凸凹コンビの片方、津村に気が付き、商店街の人達は彼女に声をかけ、それに応えるように、津村は手を振る。一方、美弥は片手に入部届けを握りしめ、その人情味溢れる商店街をフラフラと歩いていた。

「ああ・・・なんでこうなる訳？」

「と、とにかく、浩と正義に事情を説明して、カイボー部に入部してもらおう」

「無理だよ。絶対、あの二人聞き入れてくれないよ・・・」

『お前等、明日までにアクセルとブレーキをカイボー部に入部させる事が出来なけりや、この入部届けは、俺が受理する』

二人の名前が書かれた入部届けは、小麦ちゃんが扇子のように仰ぎながら、正座する二人の前から消えた。

時代遅れのあの先輩達に囲まれる小麦ちゃんを想像しながら、似合わないと頭を横に振ってその想像物をかき消す美弥。

津村の案内で、赤く染まる商店街を案内され、金城カイボー専門店と書かれた看板のある店を発見した。木製の扉は、立てつけが悪く、うまく横に引く事が出来ず、困っていると後ろから、大きな声で話しかけられた。

「ヘイ、ラッシャイ！つと言いたいとこだけど、今日は、もう店じまいなんだ！・・・てー、あれ？翠ちゃんじゃねえか」

驚きのあまり、扉ごと倒れてしまった美弥ではなく、その横で驚きのあまり、毛を逆立てる津村に気付き、頭に白いタオルを巻いたオジサンは、声をかけた。

「久しぶり、オジサン。浩いる？」



「ん、浩かあ？今、反応するかな・・・ちよつと待つてろ」

壊れた扉と美弥を飛び越えてオジサンは、店の奥へと入り、大きな声で浩を呼ぶが、代わりに降りて来たのは、正義の方だった。

「何だよ。親父い、あいつ作業中だから、耳に届きやしねえよ」

店の奥にある階段から降りて来た正義は、オジサンが客だと指さした方向にいる二人を見て、驚き、階段を上がって行った。

「ヒロつ、大変だ。破壊神が殴りこみに来やがった！」

「ちよつと、変な事言っなあ！」

美弥の叫びも空しく、正義は二階へと消え、取り残された二人とオジサン。

「ところで、今日は何の用だ？」

「はあ？殴り込み？」

作業着を着て、油まみれの藤田は、作業ゴーグルを外して、車の下から現れた。

「おうよ。しかも、ご丁寧に、扉まで破壊して登場しやがった」

「ああ・・・あの扉、立てつけ悪いからな・・・兄さん、俺ちよつと様子見てきます」

車の下で一緒に作業をしていた人にそう伝えたと、声の代わりに鉄を二回たたく音が返ってきた。

「この作業終わったら、積み込み開始するから、それまでには帰って来いよ」

「わかりました」

顔に付いた油をタオルで拭いながら、階段を下りると、原田家の父親と居間で、お茶を飲む二人が待っていた。

「おい、マサ。殴りこみに来た奴が、お茶飲んで和んできるか？」

「あれ？おかしいな・・・」

首を傾げる正義に、原田家の父親が仲介役を務めた。

「この子達は、パンサーの嬢ちゃんに、無理くり入部させられそうなんだと。しかも、交換条件が、お前等がパンサーの傘下に下る事らしい」

わかりやすいご説明に首を縦に振る美弥と津村。そして、藤田と正義は、奴ならやりそうだと、思いながら、首を縦に振った。

「首振り人形？」

四人が首を振る居間を見て、感想を述べながら、油まみれの男が新たに登場した。

「ああ、こいつ、俺の兄貴な」

正義が、新たな登場人物に混乱する美弥に気付き、説明し「たishよう原田大正です」と手をふる大正。頭を掻きながら悩む藤田は、正義の兄貴に声をかけた。

「兄さん、今日、こいつ等も連れてっていい？」

「ん？別にいいけど、どうした？」

「ちよつと、桜田さんと揉め事」

「そつか、まあとりあえずシャワー入ってくる」

油まみれの大正は、そう言いながら部屋の奥へと消えて行った。

「と、言う訳で、お前等、今から出発する支度しろ」

居間に放置されていた美弥と津村に指さしながら、藤田はそう言い、自分もシャワーに入ってくると言い残し、居間から姿を消し、何の事やらさっぱりわからない二人は、知らない間に荷物と一緒に、軽トラの荷台へと押し込まれ、扉を閉じられてからようやく美弥が声を発した。

「えっ？行くってどこに？」

頭の混乱する美弥は、店の前で手を振るオジサンに見送られながら、走りだす軽トラの中で「嘘でしょ！」と喚いた。

「おい、うるさいぞ。ちよつと静かにしてる」

助手席に座る正義が、後ろの覗き窓から喚く美弥に、声をかけるが、それによって美弥の喚くゲージは更に高まった。

「ねえ、どこに向かっているの？なんで私達も連れてかれるの？」

覗き窓に顔をくっ付けて付けて尋ねる美弥を見て車を運転する大正が笑いながら、答えた。

「これから、桜田に会いに行くんだよ。・ハハッ、どうせ、めんこいだとか言つて、顔じゅう舐め回つたんだろ」

大正の言葉に、正義は笑いながら「それは無い」と断言するが、後ろがやけに大人しくなっている事に、気がつかなかった。

（やった。・・しかも、可愛いとか言つて耳を甘噛みした）

嫌がる小麦ちゃんを捕まえて、噛みつく映像を思い出しながら、津村は大人しく荷台に蹲り、覗き窓から前の席を窺う美弥は、藤田がいない事に気がついた。

「あれ？ブレーキが、いないんだけど？」

「大丈夫だ。そろそろ、追いつくから」

正義は、軽トラに付いたサイドミラーを窺いながらそう言つと、荷台の後ろで何やら物音がしたと思い、後ろを振り返ると、走っている軽トラの荷台の布が捲られ、藤田が荷台に飛び乗ってきた。

突然の藤田登場に、二人は悲鳴を上げ、その悲鳴に気がついた藤田は、顔を上げた。

「なんだ。お前等、前の席に座らなかつたのか？」

藤田は、ローラーの付いた靴を脱ぎ、荷台に布が被せられた荷物の布を取り、作業を開始しようとするが、布の下から現れた物を見て、美弥は思わず息をのんだ。

布の下に隠れていたのは、二台のカイボ―だった。真っ白なフレームの両肩に一輪の白いバラがデザインされ、目の部分は淡い青色のレンズが二枚付けられ、白のフレームの下には黒い関節部分が見えていた。

「マミ、最終メンテナンスだ。調子の悪い所はないか？」

藤田の言葉に、カイボ―の一台が目を光らせ、質問に答えた。

「はい、マスター。全て問題ありません」

「人工筋肉の部位で一カ月以上使用している部位は？」

「棘腕筋が、二か月前。大腿筋は、一カ月と十五日前。その他は、全で一か月前です」

「二号機は？」

「全て同様です」

「わかった。向こうについてから、棘腕筋と大腿筋は取り替える」

「わかりました」

マミと呼ばれるカイボーは、青く光っていた目の光が消えて、藤田は再びカイボーに布を被せた。

「さてと・・・連れて来たのは、いいけど、どおしうか？」

白いカイボーを久しぶりに見て、呆氣にとられていた美弥は「へっ？」なんて変な声を出し、津村は、そんな感じだろうと予想していたのか、頭を抱えて、ため息を漏らす。

藤田は、二人と向かい合うように座り、美弥がまず手を上げた。

「はい、質問。どこに向かつてるんですか？」

「東山つて言う、小さな山の頂上」

「そこで何をするんですか？」

「頂上から、下の湖の途中まで続く、水道管を滑り台のように下って行きます」

「カイボーで？」

「そう、カイボーで」

何の躊躇もなく『カイボー』と言う単語を言い放つ藤田に、何故だろう。特に理由もないが、無性に腹が立った。だらしなく壁に寄りかかり座る藤田に腹が立つ、自分の親を失ったというのに、そのカイボーを続けているという事実、腹が立つ、黙りこむ美弥を見てせせら笑うかのような表情に何故か腹が立つ。

こんな奴の父親に私の母親は、連れてかれたのかと思うと腹が立つ。

「ねえ・・・」

「なんだ？」

「・・・なんで、カイボーを続けてるの？」

美弥の問いかけに、藤田は眉を潜ませ、その場にいる誰もが、その美弥の問いかけに耳を澄ませながら、表情を固めた。止めに入ろうとする津村に「黙ってて」と美弥は釘を打った。

そんな美弥の態度に藤田は、少々迷いながら答えた。

「そうだな・・・なんでだろうな。面白い・・・からかな？」

「なんで？・・・だって、ブレーキは、お父さんを亡くしてるんでしょ？それなのになんで？」

なんで？と言う単語を繰り返し言い続ける美弥の頭の中には、子供の頃、印象的だった新聞の見出しが蘇る。『日本の恥さらし！』『世界の頂点を極め続けた男の汚点』『詐欺師野郎<sup>ペテン</sup>』良いように新聞の見出しを飾っていた彼が死んだ後に、見つかった汚点を新聞雑誌で取り上げ、誰も彼の死を労わろうとはしなかった。

それは、もちろん小さかった頃の美弥だってそうだった。

「・・・田村は、カイボーが嫌いかな？」

藤田の問いかけに、美弥は一度躊躇し、喉の奥が詰まる思いをするが、それはすぐに解消された。

「嫌い・・・大っ嫌い！死ぬほど嫌い。カイボーって単語が、出てくるだけで吐き気がする。それに・・・」

日本中から毛嫌いされた彼の親族が、同じ思いだと思っていた親族の一人が、未だにカイボーを続けている事に腹が立つ。

「そんなブレーキが、カイボーって単語を普通に発して、しかもそれを生業にしてるなんて、考えられない」

思わず「美弥！」と大きな声で叫ぶ津村だが、それを止める藤田。

「翠、いいんだ。止めるな」

「でもっ・・・」

「事実だ。全て事実なんだ・・・確かに、俺の親父、金城正志は、やってはいけない事をしていたんだ」

藤田の言葉に、軽トラの運転席の方から壁を思いつき叩く音が、荷台の方へと聞こえてくる。

「おい、ヒロ・・・発言には、気を付けろ。それはつまり、俺の親

父が、お前の父親を殺した事になるんだが？」

覗き窓から顔が少し見える正義の目には、怒りがこもっていた。

「違う、そうじゃない・・・こいつ等が知っている事実では、それが真実だ。俺が言いたいのは、そういう事だ」

正義は、再び窓から姿を消し、藤田は深くため息をついた。

「田村、俺だって、嫌いだ。」

「・・・だ、だったら」

「けど、嫌いなのは、カイボーじゃない。そうやって失った物の原因を、何か適当に、理由をこじつけようとする奴が嫌いだ」

その言葉を、まるで美弥で表すかのように言い聞かせる藤田に、思わずカッとなる美弥は、思わず立ち上がるが、走り続ける軽トラにバランスを崩して倒れた。

「当たり前だな」

まるで図星を言い当てたかのような藤田の発言に、反論しようとするが、確かに自分の逆恨みは、ただのこじつけだという事に歯を食いしぼる。親しくもない人に、心を見透かされているようで、心地の良い物ではなかった。

「あんた、何様のつもりよ！」

「だったら、お前は何様だ。俺の過去を知っているから、何だと言うんだ？俺の親父が死んだのを知っているからなんだと言うんだ？それは、お前にとって優位な事なのか？俺にはなんの得もない。むしろ損をしている気分だ。・・・惨めな奴を見て、俺は、まだ大丈夫。こいつに比べれば俺は、まだマシな方だ。そうやって思いたかったのか？変な同情を、しようとしてたのか？」

「違う。私は・・・」

（同じ苦しみを分かち合いたかった・・・）

けど、それは無理のようだ。

そうとわかると、頭に上っていた血も下がり始め、美弥は立ち上がり制服に付いた汚れを払う。

「もういい。なんでこんな事に、ムキになったのかわからないもん」  
美弥の言葉にその場にいた美弥と藤田以外の全員が、解放感に満たされ胸を撫で下ろす。

「そっか・・・なら、それでいい。・・・じゃあ俺から逆に質問」

「どうぞ！今の私だったら、なんでも答えてやれる気分だからっ！」  
胸を張って何でも来いと待ち構える美弥。

「なんで破壊神なんて呼ばれてるの？」

「へっ・・・？」

素っ頓狂な声を出す美弥に、質問をした藤田は首を傾げながら答えを待っていた。

破壊神と言う名前を作った本人が、首を傾げて待つのに対し、思わず口元が痙攣する。

「何？覚えてないの、言っておくけどブレーキのせいなんだから」

藤田に指をさし、そう言い放ち、予想外の返答に「はあ？」と指を差された本人は声を出した。

「私達、一度会った事あるでしょうが！」

「あつ、やっぱりあるよな！どこで会ったかは、覚えてないけど、田村の顔どつかで見た事あると思ってたんだよ」

胸の奥でモヤモヤしていた思いが晴れ、顔を輝かせる藤田。そして「そうそう」と相槌を打ちながら、美弥は月から舞い降りたカイボーについて語り、その答えを聞いた藤田の表情は、完全に死んでいた。

「あの・・・ごめん。それ、俺じゃないよ」

「えっ、だって、こうやって頭てっぺんの天辺を掻いてさ、癖だって合ってるでしょ」

頭の天辺を掻く真似をする美弥を見て、頭てっぺんの天辺を掻く藤田を、覗き窓から見ていた正義が、腹を抱えて笑い始める。

「ハハハハッ、けっ傑作だ！癖一つで犯人に仕立て上げられて、入学早々、ピンタを食らうとは」

大声で笑う正義の声を聞き、美弥は本当に違うのかと思い始め、

自分の顔が一気に熱くなるのを感じた。

「いや、田村。俺は、完全に癖だけど、カイボーって慣れない間は、天辺が蒸れてな。たまに装備の上から掻く奴とかいるんだよ」

「そうそう、ヘルメットしてるから、上から掻こうが、意味ないのにな！」

藤田の回答に相槌を打ちながら、大笑いする正義。そんな二人になんとか、藤田を犯人に仕立てようと美弥は必死になった。

「でも、だって、……だって、ブレーキはカイボーに乗らなくても頭の天辺掻いてるじゃない！それを、証拠と呼ばないでなんて言うのよ。カイボーだって白かったし……」

なんとか笑いを堪えようとする藤田の体は、よじれながら震え、決定的な証言を言い放った。

「だってな、田村。俺、カイボーに乗らないから」

「へっ……？」

再び上げる素っ頓狂な声に正義は、足をばたつかせ大笑いし、運転席に座る大正も、声を上げて笑いだした。

「俺がやるのは、調整だけだ。カイボーには乗らない」

「嘘！だって、……そしたら、私は……えっ？」

混乱する美弥を横に、運転席に座る大正が荷台で盛り上がる人達に声をかけた。

「盛り上がっている所、申し訳ないが、そろそろ会場に到着するぞ」  
「おっ、マジか……今年は、結構盛り上がってるかな？」

藤田は、壁に付いた布を一部、剥がして、外の風景が見えるようにした。

辺りは一面、街灯もない山道だが、道路の横に並ぶ木々の奥に何やら、明かりが灯っているように見える。曲がりくねった道を抜けると、木々の奥で光っていた物が、美弥と津村の目に飛び込んできた。

木々の奥で光っていた正体は、車のライトや設置された屋台の光だった。まるでお祭りのような熱気に、重低音の音楽が周りから腹



の底に響いてくる。

「うわゝ、なにこれゝ」

お祭り気分に誘われ、美弥は布から顔を出し思わず声を出す。

「何って東山の頂上だよ」

お祭り気分の会場には、警備の人達がいて、彼等の誘導に従い軽トラは指定された駐車場に、車を停車した。

『レディイイス、エゝンド、ジエントルメエン！今年もカイボーファンの馬鹿騒ぎ、もしくは、空騒ぎのお時間がやってまいりましたゝ』

荷台から降り立つと早速、周りに設置されたスピーカーから聞いた事のある声が聞こえてくる。

「ねえ、この声、聞いたことあるんだけど・・・」

「もしかして、歯取？」

荷台から荷物を降ろし始める三人に放置された美弥と津村は、スピーカーから聞こえる声の主を当てようとするが、スピーカーから早速『私、歯取でございます』と歯取が答えてしまった。

『さあて、今年一発目の試合と言う事で、会場は盛り上がりゝ、こんなに馬鹿騒ぎをしていると言うのに、警察の野郎は、どこで点数稼いでんだろうねゝ？police report（警察予報）は、本日は快晴のパターン青でございます』

「ええっ！嘘、なんで歯取がここにいるの」

頭を抱えて、テレビの人間がこんな田舎町にいる事に、興奮する美弥に、歯取が、ここにいるのが当たり前だと言わんばかりに、荷物を降ろしながら「少し、落ちつけよ」と一言言われたくない正義が言ってきた。

「あいつ、カイボーの試合がある所には、すぐに駆けつけて、実況するんだよ。神出鬼没ってやつだよ」

「でも、でも、全国区の間が、こんな北の小さな村にさ・・・」

「だったら、周りの人間の多さにも驚けよ。町中歩く人間よりもきつと多いぜ」

『さあて、盛り上がってきた所で、今回の試合ルートをご説明しましょう！21年前、東山の急激な落差を利用した水力発電で電力を供給していましたが、水素発電が主流になる時代の波にのまれ、今や取り壊しを待つばかりの水道管を、どっかの馬鹿共が、カイボーで滑り出し、今やカイボーの会場として、生まれ変わった。一直線だった水道管も、毛細血管のように曲がりくねり、全長28、5Kにも及ぶ、このパイプを滑り切るとパイプの天辺にゴールを示すベルを鳴らした者が、今年最初の勝者となる』

スピーカーの下に設置された簡易な立体映像に、曲がりくねるパイプの全貌やゴールを示すベルが映し出され、二人は、その映像に見入っていた。そんな二人の後ろでは、藤田がカイボーの最終調整を行い、人工筋肉が密閉された袋から取り出され、白いカイボーに取り付けを行っていた。

「マミ、今の所、異常はないか？」

「異常は発見されません。全て順調です」

「順調なんて言葉を気安く使うな」

「はい、マスター」

「左足を上げる。大腿筋を取り替える」

命令通り、カイボーは左足を上げ、藤田は白いフレームを外し、中にある薄い緑色の液体が入った人工筋肉を取り外し、新しい物と取り替えを開始した。

「そんなに、とつかえひつかえ繰り返さなくてもいいと思うけどね」  
黒いゴム製の服に着替えた正義が荷台から降りてきて、言うてくるが「そんな訳にはいかない」と藤田は否定した。

「万が一の事があれば、お前達を守ってくれるのは、こいつだからな。全て問題なくしないとな……。よし、ちよつと慣らしてくれ」  
「はいよ」

「マミ、腹を開け」

「はい、マスター」

カイボーは、胴体部分を左右に開き、一人分のスペースが設けられ、その中に正義は入った。カイボーの中に正義が入った事を確認すると、勝手に胴体部分を閉じ、正義の顔をカイボーのマスクが上から降りてきて隠した。

「どお？違和感はあるか」

藤田の問いかけに、カイボーは指の関節を開いたり閉じたりを繰り返して、横を向いて握った拳を突き出し、回し蹴りなどの素振りを見せ「問題なし」と親指を立てて答えた。

「後は、兄貴とマミでどうにかする」

「わかった。なんかあったら連絡してくれ、俺は桜田さんを探してくる」

藤田は、立体映像に釘づけになる二人を現実に戻し、桜田を探しに出かけて行った。

お祭り騒ぎの会場から一歩離れた静かな場所に、ピンク色のカイボーの肩に腰をおろし、欠けた月を見つめる桜田がいた。

「いたっ、小麦ちゃん！」

美弥は桜田を指さしながらそう叫び、藤田は「小麦ちゃん？」と首を傾げる。

「うわゝ、何、そのプラグスーツ。超エロいんですけど」

自分の入部届けが、人質になっている事を忘れ、美弥は「エヴァだ。エヴァンガリオンだ」とピンクのゴム製の服を着た桜田に指をさし続け、津村がその指を降ろした。

同じ女性同士だと言うのに、よだれを垂らし、目を輝かせる美弥に、桜田は思わず身構えた。

「うるさい！見るな」

桜田は、カイボーの肩の上で、そう言いながら腕で体を隠した。

「それと、俺のコンプレックスで、あだ名を作るのはやめろ！」

「ええゝ、いいじゃないですか」。小麦色で可愛いよ」

「くわあ、くわあいいい・・・？」

言われ慣れていない単語を言われ、思わず体と口が硬直する。そんな中、話を進めようと、藤田は桜田に近づいて行った。

「桜田さん、今のカイボー部をどうにかしようとする、部長の気持ちばかりですけど、さすがに強引すぎますよ」

固まっていた桜田は、藤田の言葉にようやく目的を思い出し、カイボーの肩から飛び降りて来た。

「浩、入部届けは持ってきたか？」

「持ってきてないです」

「そっか、ならあの二人を貰うだけだ」

「それは、駄目です」

「じゃあ、どうする気だよ」

口を尖らす桜田。それを見て、目をぎらつかせる美弥を津村は、地面に抑え込み、そんなやり取りを後ろで行われている事に気付かず、藤田は口を開いた。

「わかってるでしょ。俺達は、賭博人だ。欲しい物があれば、それを勝ち取るのが流儀」

「へえ・・・いいのか？お前達は、まだ独立したチームじゃない。」

「大丈夫です。白薔薇は、突き付けられた勝負から逃げるほど、落ちぶれちゃいない」

「よし、なら商談だ」

桜田は、握った拳を突き出し、藤田は突き出された拳に自分の拳をぶつけた。

「俺が勝ったら、問答無用でアクセルとブレーキ、そして、破壊神及び、柔道全国クラスの翠を貰う」

津村が全国クラスの柔道だったとは知らなかった美弥は抑え込む津村に目をやると、津村は、ピースサインをして自慢して見せる。「俺達が勝ったら、二人の入部届けを即刻破棄、そして、桜田さん、白薔薇から俺達が独立した際に、あんたを貰う」

自分が商談の話に出て来た事に少々驚くが、桜田は「いいだろう」

と呟き、藤田の拳に拳をぶつけた。

「今日が、俺の最後の試合だ。優勝は、出来ないかもしれないが、負ける気はない」

「引退した時は、俺が貰ってあげますよ」

笑いながら軽い、嫁に來い宣言に、桜田は「バカッ」と捨て台詞を投げつけながら、ピンクのカイボーに乗り込み、土埃を巻き上げながら、その場から去って行った。

「はい、質問！」

桜田が立ち去ってから勢いよく手を上げる美弥が、藤田に質問しようとして口を開いた。

「小麦ちゃん、最後の試合って、どういう事ですか？」

「弄月高校カイボー部の伝統だよ。年初めの最初の大会で三年生は引退して、二年生が主体となって、部活動をするんだ」

「じゃあ、引退するってわかってて、なんで小麦ちゃんは、二人をカイボー部に引き込もうとするの？」

「そりゃ、見ただろ？教室にやってきた時代遅れのヤンキー達をさ。・あいつ等は、カイボーなんてやる気はない。ただ、あの大きな倉庫を自由に使いたいだけなんだよ。今日を境にカイボー部は、活動を休止するってことさ」

確かに、桜田は見た限り、いつも一人だった。入部する気は全くなかったが、それはそれで桜田が可哀想に思えてくる。

「カイボー部は、そういう伝統だからな。仕方ないんだよ。マサの兄さんが、カイボー部に所属していた時もそうだった。兄さん達が引退した途端、二年生は自由気ままに倉庫を使いまくった。その名残が、カイボー部の看板の文字が薄くなってるの見ただろ？兄さんが、作った看板を削ったんだよ」

「そんな、いくらなんでも・・・」

「伝統行事なんだよ。三年生は引退したら、何も手が出せなくなるのさ。自分達も似たような事を繰り返していたからな」

そんな話をしていると、上空に何かが音を立てながら、上がって

行くのが見えた。

「始まったな」

藤田が、嬉しそうにそう呟くと、上空に上がった火薬が大きな音を立てながら、空に見事な花を作り上げた。

「おおおお！」

地面に抑え込まれていた美弥と抑え込んでいた津村は、季節外れの花火に唸り声を上げ、スピーカーからは齒取の声が聞こえ始める。『さあ、始まりの合図だ。際は投げられた！今年もいっちょ楽しもうじゃないか！』

齒取の言葉に、会場は更に盛り上がりを見せ、花火は更に空を飾った。

## く走り出した運命く

桜田との商談を終え、原田達が待つ所へ戻ってくると、そこには知らない人が増えていた。

「どうも、白薔薇のメンバー、原田大正のメンテナンス兼、ガールフレンドをしております。森谷 和実です」

軽いノリで、敬礼のような動作をして見せる、カラフルな色の服を着た女性が「てへっ」なんてブリっ子のような感じで、美弥と津村に挨拶し、そんな森谷を見て、正義はわざとらしくため息を漏らした。

「無茶すんなって、どんなにキャラ作ろうが、年増が高校生に勝てる訳ないだろ」

「あつ、酷い。私だって、まだまだイケイケです！セーフです！」

「イケイケとか言ってる時点で、もうアウトなんだよ！」

「ウーーン、ヒロく、正義がイジメてくるよく」

そう言って駆け寄ってくる森谷から本気で逃げる藤田。

「勘弁して下さい。俺もちょっと、無理です」

「なんでよく」

「わかんないですけど、なんとなくく」

追いかけて回される藤田と追いかけて回す森谷。そんな中、メンバー登録を済ましてきた大正が戻ってきた。

「おゝい、全員集まれく」

大正の登場に、何故か藤田が大正の背中に回り込み、追いつめたと云わんばかりに「フッフ」と笑いながら、森谷がジリジリと歩み寄り、大正が暴走する「いい加減にきなさい」と森谷を止めた。

全員が揃い、落ち着きを取り戻してようやく、今回、桜田と商談をした事を藤田が伝えた。

「だから、今回 pink panther に負けたら、俺とマサ、横に座っている二人が、カイボーに入部しちゃいます」

「別にいいじゃない。一年間、我慢してたら、あの倉庫が手に入るのよ」

口を尖らせ、元カイボー部の森谷が言うが、正義が断固拒否した。「冗談じゃない。なんで、俺があんなリーゼント野郎しもべの下部にならにや、いけないんだよ！」

「あんたも、少しは使われる立場の考えを理解しろってことよ」

睨みつけてくる正義のデコを、指で弾く森谷。睨み合う二人を落ち着かせようと、大正は「とにかく！」と声を張り上げた。

「俺達は、勝負を挑まれたんだ。それに、そんな事とは関係なく、俺達は、負ける訳にはいかない。白薔薇の名を汚すような事は、したくないしな。・・・今回、俺達は、勝ちに来たんだ。どんな勝負を挑まれようが関係ない。勝たなきゃ意味がない。勝てば物を得る。負ければ何かを失う。ただそれだけだ。ようするに簡単な話だ。・・・勝てばいいんだ」

座っていた大正は、演説を始め、立ち上がり、勝つという単語を正義と藤田、森谷に刷り込み始める。

「よし、今年の一発目だしな。テンション上げて行くためにも、

『あれ』やりますか」

大正はそう言って、人差し指を出して、上に上げた。

「おお！さすが兄貴、いいねえ、久しぶりだ」

正義は、勢いよく立ちあがり大正のまねをするように、人差し指を上へに上げ、後から続いて藤田と森谷も立ち上がり、人差し指を上へげた。

「おい、何やってんだ？早くしろ」

藤田は、下に蹲って成り行きを見守っていた二人に声をかける。

「えっ？私達もやるの？」

「当たり前だろ。どんな成り行きがあろうと、今、俺達とお前等は、運命共同体になったんだ」

美弥の言葉に、そう言いながら無理やり輪に混ざる藤田。渋々、みんなのまねをして、二人は人差し指を立てた。



「でも、やり方、分かんないし・・・」

「簡単だ。ただ4を英語で叫べばいいだけだ」

訳のわからない説明に、戸惑う美弥と津村を横に、大正が声を張り上げた。

「every rose has its thorn . on  
e two three!!」

訳のわからない単語を並べられ、唯一わかった数を数える言葉すら速いテンポで、パニックになる二人は、置いてきぼりを食らい、残りの三人が低い声で「four」と叫び、遅れて二人が「フォー」と叫ぶが、完全に出遅れていた。

「ヨッシャーア！ Godie go!!」

テンションが上がった状態で、正義はカイボーに乗り込み、遅れて大正も、もう一台のカイボーに乗り込んだ。

「じゃ、行ってくる」

カイボーに乗り込んだ大正は、手を上げて、暴れる弟の背中を押しながら、会場へと向かって行った。

こんな馬鹿な事をしているのは、ここだけだろうと思いつながら、周りを見てみると案外、他のカイボーを着た人達も、それぞれの掛け声を叫び、男性特有の声を張り上げるチームもあれば、なにやら殴り合いをするチームまでいた。

「ねえ、今のどういう意味？」

取り残された藤田に、美弥は、さっきの言葉の意味を尋ねるが「わからん」と肩を竦められた。

「最初の言葉は、兄さんが適当に考えてくるんだ。唯一、共通しているのが、最後に数を数えるってだけ」

「そうなの？」

「そうなの。でも、テンションあがっただろ？」

言われてみれば、確かに上がった気もするが、全くテンションが上がったように見えない藤田に言われても、説得力がなかった。

『excellent and Beautiful!! それぞ  
れの胸の響きが、こつちにまで伝わってくるぜヨ! こりゃ、俺っ  
ちも、どけんかせんといかんやろ』。張り切って行こうぜ』

スピーカーの下に設置された画面には、大きなパイプの中に数台  
のカイボーが、スタートラインの前に集まりだす所が映し出されて  
いた。

藤田と森谷は、ポケットから小さな機械を取り出し、地面に落し  
た。下に落ちた機械は、二人の前にいくつもの映像を映し出した。

「contact・マサ、聞こえるか?」

「おう、バツチリ。視界も良好、そっちの映像は乱れてないか?」

「問題ない。今回は、お前が守護者だ。しっかりと兄さんを守れよ」  
「了解」

藤田の前には、正義の視界と、カイボーの損傷個所を示す映像が  
映り、藤田は忙しそうに、その画面をいくつもタッチして操作をし  
ていた。横で森谷も同様、大正と通信を開始し、何故か、今度のデ  
ートの約束をしていた。

「じゃあ、今度は、温泉に行きたいな」

「ああ、仕事の休みが合ったらな」

「はいはい、フリーターの私は、特に問題ありません」

森谷も、そう言いながら、映し出された画面を操作し始める。

「田村、翠。悪いけど、今は、お前等の相手出来ないから」

「そうそう、あれ何?とか、これ何?とか質問して、ヒ口を困らせ  
るなよ」

藤田の悪びれる言葉に、画面から相槌を打ちながら正義の声が、  
聞こえてくる。もちろん、忙しそうだという事は、重々承知してい  
る。だが、正義に言われると、なんだか腹が立つ。

「まあ、軽トラの荷台に、椅子があると思うから、そこから座って  
見てなさい」

森谷にそう促され、二人は軽トラから丸椅子を取り出し、画面を

操作し続ける二人の邪魔をしないように、座っていた。

『さあて、今回の注目株は、何といっても隣町からわざわざ、この会場に殴り込みに来た、狛犬。モデルCAN。そして、今回で見納めのpink pantherモデルPAN。そして、去年創生された白薔薇モデルは、何とJAP。超レアな機体を2体も揃えての登場』

「まあ、レアって言うよりは、好き好んで使う人が、いないってだけだね」

熱のこもる齒取の実況に、森谷は冷静に訂正を入れた。

「ねえ、モデルって何だっけ？」

横に座る津村に仕方なく質問をする美弥だが、津村も知らないと肩をすくめる。

「モデルってのは、作られた場所や動物の頭文字を付けてるだけだ。例えば、桜田さんは、豹をモデルに作られてる。Pantherの頭文字3つを取ってPAN。俺達は、日本製をメインに謳っているからJAPだ。」

「お前等、そんな事も知らないのか！」

藤田の前にある映像からは、正義の激が飛んでくるが「集中しろ」と藤田に喝を入れた。

「桜田さんのカイボーは、スピード重視。だから、足も細くてすばしっこい、攻撃性は低いが、逆に、狛犬は攻撃重視、全体的に太く作られてる。その分、スピードが落ちるが、防御性がある」

映像には、狛犬のチームで三体のカイボーが映し出され、全体を黒と赤茶色で染められ、顔には、二本の牙がデザインされている。

「それで、俺達は、その中間をとった物だ。オールラウンドって言えばいいのかな？モデルは人間だ」

映像には、ピンク色のカイボーが映り、周りには色々なカイボーが仲間同士で蠢く中、ピンク色のカイボーは、一体しかいなかった。何でもあり徒競走では、attackerやdefenderそ

してrunnerと役割分担し、ゴールを目指すのが主流で、二人しかない原田兄弟も珍しいが、一人しかない桜田は、映像から孤独感のような物が伝わってくるようだった。

『さあ、カウントダウンもそろそろ、十秒を切るぜえ〜・・・』

十秒前になった途端、齒取はカウントダウンを開始し、映像を見つめる二人も息を潜めた。

『Get set! GOOOO!』

齒取の掛け声と、大きな電子音によって、スタートの合図が切れ、スタートラインに立っていたカイボーは一斉に走り出した。

『走者一斉にスタートを切り、どこへ行く？向かう先は、ただ一つ。天に浮く女神の鐘よ！早速、集団グループから抜け出したのはパンサーだ。それに続いて、原田兄弟。黒の三連星、狛犬はさっそく、カイボーを一台、撃破して後に続く!』

スタート早々、狛犬は、前を走っていたチームに食らいつき、活動を停止したカイボーは、体をジェル状の液体で包み込み、中にいる人を保護した。

『人工筋肉は、本人の危険を察知すると、破裂し中の人を守るように出来ています。そして更に、衝撃吸収を備えるべく、液体で包み込むだけでなく楕円形の球体となって、その場に留まります』

一体、誰に説明しているのか、わからないが歯取は、カイボアの仕組みを説明しながら、実況に専念した。

「マサ、左辺後方、カイボアが近づいてる。モデルBIS」  
「確認した！」

大正の背中を付いて走る正義は、ローラーを走らせながら後ろを振り向き、牛のような形をしたカイボアの両肩に飛び乗り、カイボアの首元に付く本人とカイボアを繋ぐ、電極を人差し指で千切った。すると、電極を失ったカイボアは、体からジェルを吹き出し、正義は素早く、飛び退き、大正の後ろに付いた。

『エクセレント！一撃必殺。原田兄弟の弟アクセルが、一体のバイソンの首を切り沈めた。さすがはモデルJAP。金城を思い出させる動きだ！そして、先頭集団は、パンサー、白薔薇、狛犬、バイソン、そして・おおと残念、スパイダーも先頭集団に噛みついてしたが、狛犬に撃破されてしまった。先頭集団はこの4チームに絞られ、優勝争いは、このグループに絞られていくでしょう』

しばらく直線が続いていたパイプだが、次第にカーブが始める。丸いパイプの中を走るカイボアは、壁があればどこでも走れるように、横だろうが天井だろうが、無重力空間を思わせるような滑りで、中継画面を見る二人は歯取の実況と映像に釘づけになった。

そんな二人は「危ない」とか「いてっ」とか短い単語しか呟かず、藤田と森谷は、原田兄弟に指示を出していた。

「大正、右からバイソンのランナーが来るよ」  
「マサ、ディフェンダーの実力、見せてやれ」

二人の指示通りに動きを見せる原田兄弟は、兄弟ならではの動きを見せ、接触すれすれの動きに、歯取や客を魅了していた。

「マサ！狛犬だ。後方からアタッカー」  
「大正、マサの動きに合わせて、上に飛んで！」

「了解」

呼吸を合わせた二人は、後ろから突撃してくる狒犬を上に乗って飛んで交わし、その後ろを走るランナーを正義が蹴り飛ばした。

「グアア！」

狒犬と一瞬接触した際に、ランナーの声が無線を通して聞こえてくる。ランナーを失った狒犬は、一度、原田兄弟から離れ、体制を整えた。

「大正、パンサーから離れてるよ」

「問題ない。すぐに追いつく！」

「マサ、左足のフレームにひびが入った、支障はないか？」

「無い。くそつ、やっぱ狒犬のフレームは堅いな」

正義の攻撃で、先頭集団から置いてかれた狒犬のランナーは、後に続いていたバイソン二体に、サンドイッチにされ、一瞬にしてジェルになっていた。

『おうおうおう、かなりエグイシーンを見ちまったぜ。でも、そんな問題ナッシング！世界一安全なスポーツなんだからね。これぐらい過激さがないと物足りないって言うんだよ。さあ、そうしてる間に、もう終盤戦だ。3つのチームが、優勝を争い、競い合う。三つ巴の頂上決戦！先頭を走るのは、ピンク色が超プリティ、ピンクパンサー。その後追うのは、触ると棘のある白薔薇、原田兄弟。そして、バリバリの戦闘集団、狒犬。その後を追いかけるのは、こちらモエグイ戦闘集団、バイソン。三つ巴で、やられた選手は、間違いなくバイソンで、お陀仏だ。・・・おおっとあ？先頭グループが走る先に、機影が一体、反応したぞ？故障か？』

歯取の謎の言葉に、藤田もモニターでチェックをする。すると、先頭グループを待ち構えるように、一体に機影が確かに、存在していた。

「まさか・・・」

『おいおい、まさか、これはひょっとして・・・』

「マサ！まずい、前方にゴースト！」

『ゴーストだああ！モデルJAP、機体番号001。今年は、ハッピ―な年になりそうだ。今年一番の試合でゴーストをお目にかかれるとは！』

桜田を先頭に走り続ける集団は、進むべき道の先に、一体の真っ黒なカイボーを発見した。

正義は、前を走る桜田に向けて一本のワイヤーを手首から飛ばし、桜田のカイボーにくっ付け、桜田のカイボーに直接無線をリンクさせ、叫んだ。

「桜田！避ける、ゴーストだ！」

「ゴーストっ！」

ワイヤーが外れると同時に、原田兄弟と桜田は、左右に飛び退き、逃げ遅れた狛犬とバイソンは、ゴーストと呼ばれるカイボーに向かって行ってしまう。黒いカイボーは、腰に付けた銃を取り出し、向かってくるカイボーに向けて引き金を引いた。

狛犬とバイソンのディフェンダーが面に立ち、両手を前に広げてシールドを展開するが、ゴーストのエネルギー弾の威力に押し負け、シールドは音を立てながら壊れ、後ろにいた仲間を巻き込みながら、体から血のようにジェルを吹き出し倒れた。

銃を連射するゴーストの隙を突き、横を通り過ぎる桜田と原田兄弟。そして、突然の乱入騒ぎに、兄弟は回線を繋いで会話をしていた。

「なんで、ゴーストがここにいるんだよ」

「俺が知るか！マサ、次に奴がこっちに来たら、俺が引きつける。その隙に」

「黙れ、馬鹿兄貴。今回は、俺がディフェンダーだ。奴を倒すのは俺だ！」

どっちが犠牲になるかで言い争いを続ける原田兄弟。

「そんな下らない事で、一々喧嘩なんてしてんじゃないわよ！馬鹿兄弟」

「ああ、その通りだ。それに今回のディフェンダーは、マサだ。マニユアル通りに行こう」

「その通りだ。ざまあ見る、馬鹿兄貴」

大正の視界に移る、正義の顔は、憎たらしい顔をして見せて、反論の出来ない大正も負けじと、変な顔をやり返し、その馬鹿兄弟のやり取りを見て、森谷は大爆笑していた。

「おい、そんな事してる場合じゃないぞ、ゴーストが、動き出した。接触まで、およそ20秒。相変わらず、早いな・・・」

モニターには、原田兄弟を示す二つの点と、その横を走る桜田の点を追いかけてくるゴーストの点が次第に三人との距離を縮めてきていた。

「頼むぜ、兄貴、桜田に負けたら、俺達は、ピンクパンサーの仲間入りだ。そんなの絶対にやだからな」

「任せとけ、俺は絶対に負けない」

走り続ける大正の肩を軽く叩くと、正義はスピードを緩め、完全に停止し向かってくるゴーストを待ち構えた。

ゴーストが曲がり角を曲がると白いカイボアが、待ち構えている事に気付き、急停止し、銃を構え、正義はシールドを展開し、腰に付けてあったサーベルを手につった。

「前回は、不意打ち兼、5秒でジェルにされたからな。今回はそうはいかないぞ」

ゴーストは、銃の引き金を引き、攻撃に対しシールドを使って避けながら、正義はサーベルを手にも、ゴーストに襲いかかった。

『さて、まさかのゴースト登場で試合は狂いに狂ったが、試合を放棄したアクセルが、ゴーストとの戦闘を開始している間に、ピンクパンサーと原田兄弟の長男、お山の大将が一騎打ちという展開になった。ゴーストとアクセルの戦闘も目が離せないが、こつちも目が離せない。残りは、太いパイプの一直線のみ、速さを誇るモデル



PANが有利か？・・・と、言いたいところだが、どうやらそうでもないみたいだ。みるみる距離を締め迫ってくる、お山の大將。これは、一体どういう事だ？」

「当り前だ。オールグランドを舐めんなよ」

正義が、ゴーストとの戦闘に破れ、目の前に映し出された映像が消えて、暇になった、藤田がそう呟く。

『疲弊？・・・そうか、遂に人工筋肉が、悲鳴を上げ出した！速さを追求するモデルPANは、人工筋肉はもちろん、乗っている本人にもかなりの負担が、押し掛かる。自分の足には、乳酸が溜まり始め、人工筋肉は、疲弊をし始めた。それに引き換え、モデルJAPは、飛び出た特徴は無いが、唯一あると言ったら持久力。おお、シット！これまで実況をしていた俺がこんな所で学ばせられるとは・・・奥が深いぜ、カイボー君！』

息が乱れ始める桜田の目には、向こう先に見える天井から下がった鐘だけが、その桜田の横に、大正が遂に並び歯を食いしばりながら、スパートのタイミングを測っていた。

『並んだああ！遂にお山の大將がパンサーと並んだ！直径20mのパイプで、二人が遂に並び、パイプの天辺からぶら下がる優勝の鐘を目指して走り続ける。そして、アクセルの大健闘によって、ゴーストは姿を消し、アクセルは楕円形のジェルに身を包まれている。こっちの映像も見えたかったが、今はそれどころじゃない！』

頭一つ分、前に出て来た大正に気付き、さらにスピードを上げようとする桜田だが、体とカイボーが悲鳴を上げ始め、悔しそうに小さく声を洩らす。

「けど・・・負ける訳には、いかないんだよ！浩と原田は俺の物だああ！」

気迫で、桜田は大正のペースに合わせ、距離を締め始める。大正も、距離を締め始めた桜田に気付き、ラストスパートを入れた。

「元カイボー部だから、どうにかしようと、する気はわかんなくてもない。けどな、カイボー部のOBとして、後輩に負ける訳には、い

かないんだよ！ボケっ」

桜田は、金色に輝く鐘を目指し、大きくジャンプし、大正は、パイプの反りたった壁に登り始める。

あと少しで優勝の鐘が手に届くと、手を伸ばす桜田。だが、壁を登ってきた大正が、その鐘を目指し、桜田の横から奪い取ろうと手を伸ばす。

勝利の鐘を手にしたのは、大正だった。大正の手に鐘が掴まれた瞬間、ゴールの鐘の音がパイプと、観客のいる会場に鳴り響き、齒取の絶叫する声が、鐘の音に負けじと聞こえてくる。

鐘を目指して飛び出した大正と桜田は、空中でぶつかり合い、二人のカイボーから、ジェルが飛び出し、地面に叩きつけられる前に、丸い球体となって地面に落ちた。

『ブラボウ！エキセントリック！鐘を手にしたのは、白薔薇、原田兄弟の長男、お山の大将！そして、大健闘、ピンクパンサーのパンサー。今年一番の試合としては、上々の出来だぜコノヤロー。鳥肌もののいい物を見せて貰ったぜヨ！』と言う訳で、歌います』

会場からは、バラード調の齒取の歌が聞こえ、会場から離れた軽トラの前には、正座をさせられる原田兄弟と、その前に立ちほだかる電卓を手にする藤田と胸を大きく張る森谷がいた。

「人工筋肉を全部おじゃんにして、その上、兄さんはフレームも取り替えが必要な部分が数枚、マサに関しちゃ、ゴーストにボコボコにされて、無事なフレームを探す方が難しい……。こりゃ、優勝賞金も全部パーだ。むしろ、赤字」

ため息をつく藤田に、申し訳なさそうに肩を落とす原田兄弟。

「正義、あんたはなんで、試合放棄してまでゴーストと戦おうとしてんのよ。もしかしたら、ゴーストは、パンサーの方に行くかもしれないじゃない」

藤田は、森谷の指摘に対し「俺は一応、止めたんだけどね」と釘を打ち込み、正義は「いや・その」と曖昧な言葉しか出す事が出来なかった。

「大正、横で弟がやられてるからって、笑ってるけど、あんたもそうよ。なんで、パンサーを倒さなかったのよ。確実に倒しておけば、あんたはジェルにならなかったのよ」

「いや、さすがに女性に手を上げると言うのは、いささか男としてのプライドをだな・・・」

「ちなみに、狛犬のメンバーは三人中、二人が女性です」

レース中に「死ね」とか暴言を吐きながら、狛犬と戦っていた大正は、藤田の指摘に反論できずに肩を落とす。

「ようするに、自分の感情を抑えきれなかったのが、今回の敗因ね。この馬鹿兄弟！」

「まあ、今回は今年初めての大会だから、仕方ないけど、毎回、大会でこんなにカイボーを滅茶苦茶にされたら、正直に俺、泣くからな」

まあ、泣くくらいなら別にいいよなと、心で会話する原田兄弟だが「メンテナンスを二人にやらせる」と藤田が言った途端、二人は頭を下げて「それだけは勘弁して下さい」と言ってきた。

反省会を無事に終え、正座をし続ける二人をそのままに、藤田は荷台の中へと入って行くと、簡易な布団の上に気を失った桜田を寝かせ、それを看病するw・村長がいた。

「まだ寝てんのか、桜田さんは」

藤田の問いかけに二人は、軽くうなずき、看病する二人の横で荷物をあさり始め、紙を数枚手にする藤田に、それは一体何の紙かと、

質問好きな美弥は問いかけた。

「何それ？」

「何って、注文書・・・風が吹けば桶屋が儲かるって奴だよ」

藤田はそう言い残し、外に出ると正座する二人とその二人を叱咤する森谷に「営業行ってきます」と言い残し、賑やかな会場の方へと向かって行った。

会場には、いくつものチームテントが並べられ、その中をカイボ―専門店の藤田が歩けば、優勝おめでとうと言いながら、客が寄ってくる。そんな中、チームテントの一つから、藤田を呼ぶ声が聞こえ、そのチームテントの中に入って行った。

テントの中には大きなソファ―が置かれ、中央に黒いランニングシャツを着て、そのランニングシャツの下には大量の傷を作り、髪の毛を真っ赤に染めた男が座り、その両サイドには、長い髪を腰まで伸ばした双子の女性が座っていた。

「よお、ブレイキ。優勝しやがってコンチクショウ。俺がバイソンにサンドイッチにされたの見たかよ」

「そんなの見てられるほど、暇じゃなかったですからね・・・ご愁傷様です。狛犬さん」

「ゴースト登場のお陰で、こいつ等のカイボ―まで、ぶっ壊れちまった」

両サイドに座る双子の肩に手を回しながら、狛犬はそう言い、藤田は申込用紙を取り出すが、狛犬は首を横に振った。

「ブレイキ、白薔薇から独立するんだったら、俺の所に来いよ。こいつ等だって喜ぶ」

無表情の双子が首を縦に振りながら、親指を立てて藤田に突き出すが、藤田が首を横に振ると双子は、その親指を下に勢いよく下ろ

した。

「俺とマサを取り込む事は、出来ませんよ。狒犬」

「俺の誘いを断るのか、ブレーキ？」

「俺達は、楽しく走れりゃそれでいい、マサはどうか知らないけど、俺はそう思ってる」

藤田はそう言い残し、テントから出ようとすると、狒犬から「待て！」と叫ばれた。

「待て、注文書を置いてけ、後で郵送する」

「毎度、ありがとうございます」

狒犬に注文書を渡すと、藤田はテントから出てきて、営業を再開した。

「あつ、気がついた」

そんな声が聞こえ、目を開くと視界には、真っ暗な天井と心配そうに窺う津村と、目を輝かせる美弥が映った。

「あれ？・俺、負けたんだっけ？」

「ここは、白薔薇の荷台の中です。桜田先輩、大丈夫ですか？」

本当に心配そうに聞いてくる津村。そして、目を輝かせていた美弥は、何を血迷ったか、変な発言をしてきた。

「小麦ちゃん、体動かないよね。そのプラグスーツ私が脱がして上げましょうか？」

「な、何言ってやがる！それにこれは、エヴァのプラグスーツじゃない！パワードスーツって名前があるんだよ」

「まあまあ、そんなにテンパらないで、女の子同士じゃないですか」

「よだれを垂らしながら近寄ってくるお前を、同じ女とは思えない！」

言っ事を聞かない身体を動かし、荷台の隅に逃げ込む桜田。そして、追いつめた獲物に目を光らせる破壊神。

「俺とか言ってる小麦ちゃんも、十分、男の子っぽいですよ」

美弥は両手を高々と上げて桜田に近寄る。そして、その上唇を舐めながら近寄ってくる破壊神に、涙を浮かべ、首を横に振る桜田。そんな元気のある桜田を見て、まあ問題ないだろうとため息をつく津村を横に、可愛い動作をした桜田を見て、スイッチの入った美弥は、縮こまる桜田に襲いかかった。

「いやはや、ゴーストの登場で、こっちはウハウハだよ」

大量の申込書を手に、満面の笑みを浮かべながら荷台に入ってきた藤田は、目の前にある光景に驚き、手に持った申込書を地面に落してしまった。

ピンク色のパワードスーツが、桜田の両肩から脱がされ、きわどいラインで美弥の腕がとある部分をちゃんと隠し、突然の訪問者に目を丸くして固まる三人と、この状況を危険と判断した藤田は、一礼して荷台から逃げるように出て行った。

固まっていた桜田は、藤田が出て行った途端、悲鳴を上げ「浩の馬鹿」と叫びながら破壊神の胸に飛び込みながら、破壊神を叩き叩かれる本人は、ちよつとやり過ぎたと深く後悔をしていた。

一方、外で蹲る藤田に、正義が大爆笑しながら近寄ってきた。

「お前、女性の免疫力、無さ過ぎ」

蹲る藤田の肩を慰めるように叩きながら、またしても正義に慰められてしまった事に更に落ち込んだ。

く走り出した運命く（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

第一章がここで終わりです。いかがでしたでしょうか？

あらすじで有人ロボット（カイボー）の事が書かれていると言いつのに、ロクに登場しない結果となりました。

いや・・・本当に申し訳ないです。

御意見やご感想があれば是非お書き下さい。お待ちしております。

## 第二章 発足 ーどうだっていいじゃんー

金城正志。今から5年前まで時の人として、熱く語られ、世界的にも名を馳せた男。カイボーの『何でもあり徒競走』の世界タイトルを総なめにし、数多くの大会で連勝記録と世界記録は未だに破られていない。そんなカリスマ性と明るい性格から、ちよくちよくテレビにも出演し、多くのファンが魅了されていた。

だが、世界マシリンピックの決勝戦で、ある事故が起きた。トンネル内で突如、彼の乗ったカイボーが爆発。事後調査の結果、国際規定の安全レベルよりも著しく低下したカイボーに乗っていたことが判明。国際競技連盟は、彼の死を労わりながらも遺憾の意を表明し、日本もそれに応えた。日本カイボー競技連盟は、彼の国際ライセンスを剥奪し、彼のチームを迫害した。

数年間の国際競技への出場を停止され、解禁となった今でも、日本から出場するカイボーの選手は一人もいなかった。

『月から舞い降りたから、アンビリカルケーブルが無いつて？僕には、ちゃんと付いてるよ。下の方に・・・』

『あ、あんた、バカあ？』

深夜に再放送しているエヴァンガリオンというアニメで、男好きの使途が半裸状態で、ツンデレヒロインに対し下ネタを言い放ち、思いつきりぐりで殴られるシーンを、風呂上りに歯を磨き、父親が独自に調査したマシリンピックの報告書をチラチラと見ながら美弥は、目にして苦笑いをしていた。

（子供の頃、こんな物をよくわからないで、夕方に見て喜んでたの



か、私・・・)

そう思いながら、美弥は硬直し口からは、齒磨き粉が垂れていた。『き、君は、何か誤解をしているようだ。・・・僕は、掘るよりも硯君に掘られる方が・・・』

グーで殴られた鼻を抑えながら、白銀の髪を靡かせる使徒は、赤茶色い髪を靡かせるツンデレに今度は無言で蹴り飛ばされた。

夕方に過激な暴力シーンが多い事で問題となり、最終話はまさかの放送延期、楽しみに待っていた人達の前に出て来たのは、湖に浮かぶ船と優雅に流れるBGMは、今でも鮮明に思い出せる。

濡れた髪を後ろでまとめ上げた美弥は、式号機に乗り込んだツンデレが、ヤンデレへと変貌し、自殺願望を匂わせる第17使徒の力アル君を握りつぶそうとするシーンの前にテレビの電源を落とした。自分以外に誰もいない居間で、深夜の時間帯をさす時計を見て「寝よ」と呟き、居間に、父親のまとめた報告書を散らかしたまま、自分の部屋へと向かった。

とある大家族では、津村と愉快的な兄弟達が、朝から大はしゃぎになっていた。

「ねえ、私の下着、無いんだけど!」

長女の翠が次女にそう叫び、次女は自分が履いている下着を確認し、間違えていた事に気付き、愛想笑いをして見せ、長女は仕方なく、次女の箆笥を引つかき回し、長男に朝飯をパスすると報告して、泣き出す六女をちょっとだけあやして、家を飛び出した。

一方、寝坊で思うように頭が働かない正義の口に食パンを押し込み、立てつけの悪い扉を蹴破り、学校へと向かい飛び出す藤田と正義。

「マサ! さつさとしろ、遅刻するぞ」

「何だよ・・・今日は日曜日だぜ」

「今日は月曜だ！」

一両編成の電車に揺られ、青い海を眺めながら高校生が、押し込められた電車の中で席に座り、欠伸をかく美弥は、寝不足の体を思いつきり伸ばし、両サイドに座る男子生徒の顔を思いっきり叩いてしまった。

「あつ・・・ごめんなさい」

「いえいえいえ、俺等がこんな所に座ってるから悪いんです。どうも、すみませんでした！」

高校新聞のお陰で、かなりの有名人になってしまった事にため息を漏らす美弥に、両サイドに座る男子生徒は、完全に強張っている事に、また更にため息を漏らした。

弄月高校に入学して早々、破壊神と言う名が知れ渡り、カイボ一部に無理やり入部させられそうになり、小さな村の小さな山で、とあるイベントに参加してから、土日挟んで月曜日がやってきた。

チャイムが鳴るギリギリに滑り込んできた正義と藤田の手には、高校新聞が握られ、その内容をすでに知ってしまった美弥は、机に突っ伏したまま動かず、そんな美弥を津村が励ましていた。

「私・・・違うもん、こんなんじゃないし・・・」

「だ、大丈夫だつて、美弥・・・こんなの全部出まかせなんだから」  
w・村長の態度に、二人は新聞を広げると、そこには涙を流す桜田に噛みつく美弥の写真が大きく掲載されていた。

『破壊神、まさかの百合疑惑？』

大きな見出しに正義は吹き出して大爆笑する。

「じゃあ、じゃあ、翠は、私がちゃんと男の方に興味あるって信じてくれる？」

「そ、それは・・・」

桜田に対する相次ぐ美弥の暴走に、素直に信じられず目を合わせ

られない。そんな正直な津村にショックを受けた美弥は、また更に机に顔を擦りつける。

「ウワーン、翠の馬鹿」

そんな、美弥の態度に指をさしながら笑い声を大きくする正義。

「ハツハハハ、馬鹿だ。馬鹿がいるぞ！」

正義の笑い声が、教室中に響く中、小麦色の肌をした女子高生が、新聞を手にして一年生の教室が並ぶ廊下を走っていた。

笑い声がする教室の扉を勢いよく開くと、教室の中央で、机に顔を突っ伏して動かない美弥を発見して、口を開いた。

「おい、破壊神！こりゃ、一体どういう事だ！命名・小麦ちゃんって・・・という事だ！」

自分が、美弥に噛みつかれる写真が、大きく掲載された新聞を手には、三年の桜田が教室へやってきた。

やってきた桜田に気付き、美弥は目に涙を浮かべながら、近寄ってくる桜田に抱きついた。

「小麦ちゃん。翠が、翠が、私の事、信用してくれないの！小麦ちゃんは、信じてくれるよね」

「な・・・や、止める、離れる、くっ付くな！」

「イヤ、そんなこと言わないで！」

訳のわからない状況に、抱きついてくる美弥を振りほどこうとするが、どんなに振り落とそうとしても、頑として離れようとしない。

「やべーよ、なまら面白いつてこれ！なあ、ヒロ」

ヒロと言う単語に気付き、桜田は、黒板の近くで中央の暴れる光景を苦笑いで見守る藤田に気付き、小麦色の肌を赤く染め上げて叫んだ。

「ダアアア・・・こっちを見るな！浩の馬鹿野郎！」

桜田は、しがみ付いた美弥を引きずりながら、教室から飛び出して、美弥は教室の出口にぶつかり、地面に倒れ、解放された桜田は、廊下を走り去って行った。

そんな新聞部による公開イジメも、時が経つにつれて大人しくなり始め、今は、隣町にある女子高のマドンナ的な存在の女性と正義が付き合い始めたという話題が新聞の一面を飾り、これまでの馬鹿にされ続けた恨みを晴らすと、美弥が馬鹿にして見せるが、新聞に載ったにも関わらず、ドンと構える正義によって、美弥の計画は空振りに終わった。

「フン、破壊神なんか馬鹿にされるほど、俺は軟弱じゃないんだよ」

「って言うか、どこに離れたお嬢様学校と、あんたが、接点あるのよ」

「どこって、カイボーに決まってんだろ。この前の大会で知り合った」

藤田が、営業で外回りに必死になる中、正義は片づけを大正と森谷に任せ、会場にいた女性に片っ端から声をかけていたらしい。

「うわっ、最っ低だ！」

「どこが最低だ。紳士と呼べ！」

「どう見たら紳士になるのよ！」

睨み合う二人に、ため息を漏らす藤田と津村。そして、一時限目から体育なので、さっさと行こうと藤田が口を開いた。

「おい、凸凹コンビ。もう、みんな移動しちまってるぜ」

そういう二人も十分な凸凹コンビに「どっちが凸凹コンビだ！」

と同時に声を張り上げられ、美弥はそれにプラス「ノッポ野郎」と自分事を棚に上げて藤田に言った。

一時限目の体育では、体力テストが行われ、スポーツに力を入れる弄月高校では、そんな体力テストにかなり気合を入れる生徒達に先生も圧倒されていた。青いジャージが本校指定のジャージなのだ

が、部活で製作されたジャージに身を包む生徒達の方が多く、むしろ青いジャージを着ている人の方が珍しかった。

青Ⅱ文化系もしくは帰宅部

我が校の常識に乗っ取り、今の所、どの部にも所属していない凸凹コンビ二組は、青いジャージに身を包むが、サイズが規格外の藤田は、自前の黒いジャージを着て、かなり浮いた存在になっていた。「くそつ、ただでさえ目立つ体格だと言うのに、青三人に黒一人つて、かなり恥ずかしいな・・・」

「ああ、ブレーキってそういう自覚あったんだ・・・」

女子の中では頭一つ分飛び出るが、男子の中に紛れば、それほど目立つ事のない美弥が、感心したように声を出し、当たり前事を聞かれ、藤田はため息を漏らす。

まずは男子から短距離のタイムを計るらしく、女子は小さな草むらで待機させられ、出席番号順に二組ずつ走らされる男子を見守っていた。そんな中、深いため息をつく美弥に、津村が気付き、誰かさんのマネをしながら声をかけた。

「ため息ついたら幸せが逃げるって何度言ったらわかるんだ！」

指をさし、必死にマネたつもりだが、それほど似てなかったからか、それとも気付かなかったからなのか、美弥は再び、ため息をついた。

「えっ？何、そんなに似てなかった？」

「違うよ。この後、身体測定じゃん・・・」

「ああ・・・そういえばそうだったね」

向こうでは、自己タイムを更新したかなんかで陸上部の白いジャージを着た男子がガッツポーズを決め喜びの声を出していた。

「ああ・・・ヤダな」

「何、そんなに体重が気になるの？」

「違うよ。身長の方よ・・・また伸びてたらどうしよう・・・」

「ああ・・・」

身長が低い人にとって、それはどんなに羨ましい悩み事かと思うのと同じで、背の高い人にとっては、背が低い人を羨ましがするのも同じ事である。

アメフト部対ラグビー部の短距離走の勝敗はアメフト部が勝ち「トウス！」なんて一時期、流行った芸人ネタをアメフト部の男子がやっていた。

「まあ結局は、無い物ねだりだよね・・・」

津村のそんな言葉に、美弥は自分の胸部と横に座る津村の胸部を見比べながら「そうだね」と呟き、嫌な視線を感じた津村は、思わず身構えた。

一方、出席番号の都合上、最後の組は三組で走る事となり、陸上部の期待の新星と青いジャージの正義。黒いジャージの藤田がスタートラインに立った。

結果は、黒、青、白の順でゴールし、全く相手にされてなかった白は、その場で落ち込み、帰宅部二人組は、どうやら賭け勝負をしていたらしく、負けた青は腕立て伏せをやっていた。

「あいつ等って馬鹿なんじゃないの？」

「まあ、馬鹿だから、あんな事、やってるんですよ」

男子と女子の場所が入れ替わり、女子が短距離、男子は見学と言った感じで、正義は未だに終わらない罰ゲームをし続けていた。

「よおし、次はスクワット！」

「サボるなよ」

「了解」

草むらの脇でまだ体力測定があると言うのに、体を痛め続ける正義を無視して藤田は、青いジャージを着た写真部の夏樹と言う男に声を掛けられていた。

「ねえ、どうやってw・村長と仲良くなったんだ？」

「別に・知らない間にこうなつてた感じだな」

「いいよな」w・村長。今度、写真のモデル頼みたいんだけど、どうやって頼めばいいかな？」

目を輝かせる夏樹に「いるよな、こう言う奴クラスに必ず一人は」と罰ゲームを中断して、やってくる正義に「続き」と釘を刺し、渋々、スクワットを続けた。

「時の人だつてもあるけど、かなりあの二人は、人気あるんだぜ。でも、破壊神だし、声を掛け辛いんだよね・・・」

「盗撮でいいんじゃないか？」

「それは、駄目だ。確かに自然な表情は、盗撮に限るが、俺は、そういうのは好まない！あの二人、絶対にスク水や露出度の控えめな服とか似合うって！あの体格なのに貧相な胸を恥ずかしそうな表情で、腕を使って包み隠す田村と、それとは、逆に背の小ささとは逆に大きな胸を田村と言う大きな壁を使って隠れ、そんなある意味、凸凹コンビならぬ山壁コンビ！」

夏樹の体内妄想は、一気に膨れ上がり、そんな噂をされている凸凹コンビは、小さなくしゃみをし、吹きつける風に体を震わせていた。

「そう！寒がる二人は、互いに身を寄せ合い、互いの体温で体を温め合う。そんな二人の表情は、和らぎ、互いに見つめ合うその表情には、必ず萌えがある！萌えと言う万国共通の用語は世界を救うんだ！」

急に立ち上がり、拳を握りしめる熱く語り始める夏樹に正義と藤田は「こいつ、どっか病気だな」とアイコンタクトと心の中で会話をしていた。

だが、向こうの二人は体を温めようとシャドーボクシング的な事をし始め、美弥に関しては『かまはめ波』に似た動作をしていた。

「うわっ、今、ビーム的な物、出なかったか？」

「出てねーよ・・・」

「いや、俺には見えた！彼女の気の強さを目にした！スカウターで

も測りきれない彼女の強さを目にした！」

「変な趣味をお持ちで・・・」

「違う、マニアックと呼んでくれ」

その後も、ボールの遠投や垂直飛び、反復横飛びなど体力テストが続けられ、色々な種類の体力テストが行われる度に、帰宅部に相手にされない白いジャージを着た男子生徒のプライドをスタスタに引き裂き、正義はテストの度に罰ゲームが増やされていった。

午後から行われた身体測定では、正義は遂に165cmに到達した事を喜び、身長が中学から伸びない津村は、いつも通りの150後半の身長に納得し、遂に190の大台に達してしまった藤田と、後1センチで180に達してしまうと言う事が判明した美弥は、止まらない第二成長期に頭を抱えていた。

「遂に来てしまった190・・・」

「別にいいじゃない、私、女子のくせに180だよ・・・」

（この成長がどうして、胸に行かないのか・・・）

互いに成長の記録に、ため息を洩らし、次の日、高校新聞には、そんな二人のため息を漏らし、頂垂れた表情が印象的な写真が掲載され『ツインタワー』と命名されてしまった。

カイボーの大会が終了してから数日、発注の仕事に振り回される大正と藤田を横目に、何故か、店には美弥と津村が屯するようになっていた。

「お前、カイボー嫌いなんじゃなかったのか？」

「うるさい、今でも嫌いだけど、ただの偶然で起きた出来事に無理やり理由をこじつけるのをやめただけよ」

藤田の質問にそう反論し、店の壁に飾られる写真を眺めていた。そんな中、額に納められた色褪せた一枚の写真に目が止まった。

「あれ？」



その写真には、大きな倉庫を後ろに、何人かの高校生と、二体のカイボーが映り込んでいた。

「これは、俺が高校生の頃の写真だよ」

お茶を美弥と津村に渡しながらオジサンが答えた。

「中央で肩を組んでる二人が、俺と正志だ。部屋の掃除をしていたら懐かしい物が出て来たから、こうやって額に納めてみたんだ。この頃は、楽しかったねえ・・・」

見た事のなかった写真に藤田も目をやり「これが高校の頃の親父か」と思い出に耽るように呟いた。

そして、美弥はこの写真をどこかで見た事があるような気がして、首を傾げていた。

「じゃ、俺これから狒犬の所に、注文の品を届けに行ってきます」

「あつ、俺もバイソンとスパイダーの所、行ってくる」

「兄さん、途中まで荷台に乗せてって」

藤田と大正は、オジサンにそう言い残すと、大正は軽トラに乗り込み、藤田は大きな荷物を背負って荷台に乗り込み、軽トラは走り出した。

カイボー専門店は忙しく動き回っていた二人がいなくなり、急に静かになった。

「二人は、まだ帰らなくていいのかい？」

学生服姿の二人に、オジサンは尋ねるが、二人とも「問題ないです」と答えた。

「どうせ、家に帰っても誰もいないし・・・」

意味深に美弥は、そう呟き、仕事に熱中してろくに家に帰ってこない父親に口を尖らせ、父親の顔を思い出し、写真に移る生徒の一人に父親の面影がある奴がいる事に気がついた。

「んんっ？」

「いやはや、男兄弟ばかりのこの家に、娘が二人も出来るとはね」  
オジサンが嬉しそうに空になった碗に新たにお茶を入れようと立

ち上がり、奥へと進もうとするが、そんなオジサンの足を美弥が掴んだ。

「オジサン！こいつ誰？」

自分の父親にそっくりな男をこいつ呼ばわりし、美弥は指をさした。

指の指された先を見てオジサンは、互いに肩を組み合う二人の脇に立つ男の名前を言った。

「ああ、田村 義彦だな」

「やっぱり・・・」

同じ名字と美弥の態度に、オジサンは「もしかして」と呟き「父です」と答えた。

「おお！そうか・・・あつ、そしたら眞美は？あいつは、元気にしてるか？」

オジサンは、写真に移る背が低く黒い髪を腰まで伸ばし、大人しそうな女性を指さして、美弥に尋ねるが、尋ねられた美弥の顔は、一気に曇った。

「母は・・・5年前に交通事故で死にました。」

「えっ・・・」

質問の答えをうまく理解できなかったオジサンは、その場に凍りつき、美弥はさらに言葉を付け加えた。

「金城正志が事故で死んだ日に母も死にました」

オジサンは、その言葉が相当ショックだったらしく、その場に腰を付いた。

「そんな・・・そりゃ、一体何の嫌がらせだ」

頭を抱え込むオジサンの目からは、涙が流れたし「やっぱり、私帰ります」と美弥は言い残すと、店から出て行き、津村はどうするべきか迷っている間に、正義が串焼きを銜えながら帰ってきた。

「あり？こりゃ、一体どういう状況？」

オジサンの頭に巻いた白いタオルが外れ、オジサンの頭は明らかに不自然な髪の毛の抜け落ち方に、津村は思わず言葉を失った。虫

食いのように所々、髪が抜け落ち、四十代後半のオジサンが一気に老けたように見える。

「親父、頭、頭。禿げてんぞ」

正義は、そう言いながら頭にタオルを被せ、津村に「ストレスのせいだ」と答えた。

「知ってんだろ？金城さんのメンテナンスをしたのは、うちの親父も・・・人殺しだのなんだのって結構、酷い事言われ続けたからな・・・俺等には大丈夫とか言ってたけど、体に症状が出ちゃって、この通りだよ」

正義は、父親の肩を担ぐと店の奥へと連れて行った。

「そうか・・・田村の母親が、俺の親父と同じ日にか、そりゃ辛いな」  
仕事を終えて帰ってきた藤田を待っていたのは、タオルの外れたオジサンと、そんなオジサンを布団で寝かせて看病する正義と津村だった。

日も完全に落ち、夜道は危険だと津村を送り届ける中、津村が、一体、何があったのかを藤田に伝えていた。

「ヤバいな・・・そんな事、俺知らないで、酷い事言っちゃったな・・・」

藤田は、東山の頂上に向かい最中で言ってしまった事を後悔するが、そんな藤田の態度に、津村は首を横に振った。

「大丈夫だよ。もし、気にしてたら、浩と普通に接したりしてないよ」

「そう・・・かな。そうだといけど・・・」

「まっ、明日が来れば、わかるよ」

弄月の小さな村には、季節外れの名残雪が降り、地面に落ちるとその雪は、水滴となって消えていった。

「そろそろ、春だな」

「そうだね」

星空へと高く伸びあがる建物が並ぶ一角に、これまた大きなマンションが一つ、静まり返った廊下を突き進み、部屋へと入る扉を開くと、明かりの落ちた部屋が、美弥の父、田村義彦を出迎えた。暗い部屋の廊下を突き進み、台所へ向かうと、冷蔵庫の中には娘が作っておいてくれた料理がラップされ、義彦は娘の料理を冷蔵庫から取り出し、テーブルの上に置いた。

料理を口に運ぼうとしていた時、部屋の電気が付けられ、義彦は扉の前に立つ娘に気がついた。

「なんだ。まだ、起きていたのか」

父親の問いかけに娘は、応じる事無く、一枚の写真を、父親の座るテーブルの前に叩きつけた。

「説明して。金城正志とお父さんは友人だったの？」

資料の中に隠してあったはずの写真を叩きつけられた父親は、思わず持っていた箸を落とし、娘は、その反応に父の頬を思いつき叩き、父親の書いた雑誌の記事を料理の上に置いた。

「・・・だったら、なんでこんな記事を書けたの！お母さんが死んだ腹いせ？この写真に写ってる人達は、お父さんにとって何なの？友人じゃなかったの？脇にいるお母さんは、お父さんの妻なんじゃないの？」

髪の毛を左右に分け、毎朝、髭を剃った凜々しい顔の横に娘に叩かれた跡をくつきりと作り、デザイン眼鏡の下から見える目には、生気を感じる事はなかった。

「お前には、関係のない事だ」

「関係無くない。金城正志と原田浩嗣の息子と今、一緒にいる」

「そうか・・・そういえば、同じ時期に子供が出来ていたな」

義彦は、自分の書いた金田正志を批判する記事をテーブルから除くと、記事の下に置かれた料理に手をつけようとするが、美弥がその料理を奪い取った。

「おい、頼むよ。明日も朝早くから取材なんだ」

「娘を放っておいて、仕事の方が面白い？」

「もう、寂しがるような、歳じゃないだろ。むしろ、反抗期である方が、自然だ」

「だったら、これが反抗期よ」

娘は手に持った料理を、父親の目の前で口に一気に流し込んだ。だが、腹いせのつもりで、かなり辛くしていた事を忘れていて、自分が仕掛けた罠に顔を赤くして噎せる。

「また唐辛子入り、ポテトサラダか・・・進歩が見えないな」

急ぎ台所の蛇口を捻り、冷たい水をコップに注ぎ、熱い舌を冷ましながら娘は、肩をすくめる父親に対し「今回はラー油だ」と訂正した。

舌の痛みが治まらない娘は、再びコップに水を注ぎ始め、夕飯を失った父親は、自室へと向かう途中、娘の耳元である事を呟いた。

「いい事を、教えてやろう。金城正志はな・・・」

水を口に大量に流し込んでいた娘に、父親はある事を呟き、その内容を耳にした娘は、思わず水を口から吹き出し、その光景を見た父親は、小さく、ほほ笑みながら台所から出て行った。

次の日、学校では高校新聞に、陸上部期待の新星が、短距離走から砲丸投げに転職した事が一面に取り上げられ、教室ではその原因は、明らかに数日前の体力測定にあると確信を掴み、その話題で一世だった。

教室に先にいた男子の凸凹コンビは、新聞を開き、読んでもいないのに「フムフム」「なるほど」などと口から出し、教室の出入り

口をチラチラと窺っていた。

「やった、久しぶりに私以外の記事が、一面を飾ってる！」

新聞を片手に持ち、自分の顔写真が映っていない事を喜びながら、教室に入ってきた、もう片方の凸凹コンビに気付き、二人で一つの新聞を読んでいた正義と藤田は、新聞を握りつぶし、自分の席から立ち上がる藤田と、藤田の机から飛び出す正義は、入り口から入ってくる美弥と津村に「おい」と声をかけた。

「何？」

美弥の問い掛けに、先に辿りついた正義は、何と切り出せばいいかわからず、迷った挙句、今日の高校新聞について口を開いた。

「き・・・今日の高校新聞、見たかよ」

「・・・今、読んでる所なんだけど」

「だあ、そうだけだよ・・・だから、俺が言いたいののはだな」

頭を掻きながら、言葉を探す正義に美弥は、頭を下げた。

「ごめんね。昨日は、急に帰ったりして・・・」

「いや、別にそれはいいんだけどよ・・・俺達はだな、どちらかと言うとお前の方が心配で」

「大丈夫、特に問題ありません」

頭を勢いよく上げた美弥の視線には、正義の後ろにやってきた藤田が入り、父親の呟いた言葉を思い出して、思わず硬直し、視線の合った瞬間、固まった美弥に対し、藤田は首を傾げた。

「おい、どうした？」

藤田の問い掛けに、美弥は思わず津村に、持っていた鞆を押し付け「ホホホホ、何でもありませんわ」

と言いながら、教室から出て行った。

「おい、翠・・・これが、あいつなりの普通の接し方なのか？」

「さあ・・・わからない」

教室から飛び出した美弥に、首を傾げる二人。そして、正義は「遂におかしくなった」と自分を納得させ、首を縦に振っていた。

その後も、授業が終わり、藤田が声を掛ける前に美弥は教室から飛び出し、昼休みに関しては、女子トイレから出てこなく、午後には落ち込む藤田が完成していた。

「俺・・・また何かしたのかな」

「俺が知るか！どうせ、仕事中になんか言っただろ」

「・・・カイボーが嫌いなのに、なんで店に来るんだって聞いた」

答えに、正義は頬杖を落ち込む藤田の頭の上に突き、乙女心を全く分かって無い！と言われてしまった。

「お前は、阿保か。いや、阿保だ。どうしようもないくらいの阿保だ」

「そこまで言うか、お前は・・・落ち込んでる俺にそこまで言うのか・・・」

「とにかく、こうなったら平謝りだ。とにかく、謝っとけ！」

とにかく、謝れば万事解決だと正義に言われ、それを信じ込んだ藤田は、わかったと小さく頷き、決行は放課後だと決め、静かに時を待った。6時限目の授業も、前の座席では爆睡する正義の背中を見つめ、極力、中央に座るw・村長を見ないようにして授業が終わり、担任のHRを終えた。

「ウツシ！」

気合を入れた藤田は、中央の座席に座るw・村長の大きい方が座る座席を見るが、そこにはすでに美弥の姿は無く、すでに出口近くにいた。

「逃がすかあ！」

黒ぶち眼鏡を外し、正義に手渡すと藤田は、眼鏡の下に隠れていた鋭い目つきで目標物を捉え、窓際から標的を追って駆け出し、その鋭い目つきを見た生徒は思わず道を開き、標的にされた美弥は、危険を感じて教室から飛び出し、藤田も後を追って教室から飛び出した。

「まずい、ヒロのストッパーが外れた！」

遊び半分で、藤田に平謝りだとか提言していた正義は、眼鏡を手

渡された事に驚き、伊達眼鏡を机に叩きつけて、藤田の後を追いかけた。

必死になって逃げると信じられない程の力を生み出すとは、良く言った物だ。短距離走の世界記録保持者から財布を盗んだ小さな少女が、その世界記録保持者から逃げ切った事実と、今の状況は、かなり重なり合っている。

気が付けば、誰もいない屋上に立ち、後ろには恐ろしい面妖で追っかけていた藤田の姿も無い。だが、唯一、気がかりなのが、今、美弥の片腕には、目をナルトのように泳がせた桜田が担がれている事だった。

長い廊下を必死になって走り、階段から降りて来た桜田に気付くが、ここでスピードを落としたり、面妖に捕まると思い、見事に桜田の腹にタックルを決め「ウゲッ」と声を洩らし、伸びた状態の桜田を肩に担ぎ、後ろから追ってくる妖怪から美弥は逃げ切り、今、屋上にいる。

「お前は、一体何なんだ！突然、タックルを決めて、俺をこんな所に運び込んで・・・一体、何をするつもりだ！」

意識を取り戻した桜田は、出口の前に立ちほだかる美弥に、思わず身構えるが、今、それどころではない美弥は、桜田の前で深いため息をついた。

「な、なんだよ・・・一体」

「別に・・・何でも無いです」

「何でも無いって言葉は、ため息を吐きながら使う言葉じゃねえ！」

「・・・お父さんが」

突然、話を切り出し、全く相談に乗る気でも無かった桜田だが、かなり気落ちした美弥を見て、話くらいならと耳を傾けた。



『金城正志はな・・・母さんの初恋の相手だ』

その後にも、父親は何かを言っていた気がしたが、最初の言葉しか耳に入って無かった美弥にとっては、かなりショッキングな出来事だった。夜もろくに寝付けず、次の日、ご本人の息子登場に、何故か胸がきつく締めつけられ、どんな顔をすればいいのか、わからないと、桜田に泣きつこうとするが、それを桜田は阻止した。

「止めろ、制服が汚れる」

「そんな・・・小麦ちゃん」

薄情な桜田にしがみ付こうとするが、両手で頭を抑えつけ突き離され、しがみ付く事すら出来なかった。

「それに、母親なんて、関係無いだろ」

「えっ？」

「そうだよ。関係無いじゃん。なんで破壊神が悩まなくちゃいけないんだよ。むしろ、なんで俺が、そんな事を諭さなきゃいけないんだよ・・・どうだっていい。どうだっていいじゃん」

桜田に諭され、今日一日、こんな事を悩まされていた事が馬鹿らしくなる中「ここかぁ！」と、藤田は扉を蹴り開けて登場した。

眼鏡の取れた藤田は「俺の謝罪を見ろ」と目を輝かせながら、言い放つ単語ではない物を口ずさみながら、近づいてくる。

今にでも襲いかかってきそうな藤田を見ても、桜田に諭された美弥にとっては、例えば変人になった藤田ですら、普通に見える。

桜田が、恐ろしい面妖の藤田を見て、大きな背中後ろに隠れる中、美弥が口を開き、藤田に話しかけた。

「ねえ・・・」

美弥の問い掛けに、一瞬にして変人からいつも通りになった藤田は「なんだ？」と聞き返し、聞き返された本人は、驚くべき言葉を言い放った。

「私、カイボーやりたい」

信じられない言葉に、瞬きを繰り返す藤田と桜田。そして、自分の心の中では、すでに決心が付き、晴れやかな気分になっている美

弥は「アーハハハッ」と男と女が入り混じったような笑い声を屋上から、大きな学校へと響かせていた。

く深紅のカイボ―、そして足輕参上

雪が残っていた弄月村にも、残す雪は、遠くに見える東山の山肌に残るだけとなり、村の木々は、青々とした緑の葉を蓄え始める時期になった。

五月の連休には、開花した桜並木に多くの村人達が集い、カラオケ大会やらで、盛り上がりを見せ、そんな桜並木の脇を真つ黒なサウナスーツを着込んだ原田兄弟が走り抜け、その後を追ってピンク色のジャージに身を包んだ桜田と、赤いジャージに身を包み、長い髪を後ろで結び、ヘア―バンドで髪が乱れないようにした美弥が走っていた。

軽いランニングを40分も続け、息を乱しながら金田専門店の前に到着すると、藤田と森谷が待っていた。

「皆さん、お疲れさま」。10分以内に、その汗臭い服から新しい服に着替えて下さうい」

女子高生が二人も増えた事により、無理に張り合おうと明るく振る舞う森谷だが、優しい声で、汗だくになった四人に、随分と鬼畜な事を言ってくる。

「お、鬼だ・・・」

ようやく、原田兄弟や桜田のペースについて行けるようになった美弥だが、最初のジョギングで、すでにヘトヘトになっていた。

「ほらっ、破壊神。さっさと着替えに行くぞ」

膝に手を置き、肩で呼吸をする美弥の手を引っ張り、桜田は女性専用の更衣室（原田家の風呂場の着替える所）に向かおうとする。

「あつ、待って・・・浩、私の着替えは・・・?」

「置いておいた」

店の中に連れてかれる中、紙に一人一人のランニングコースを走

りきつた時間を書き込む藤田に言われ、桜田に手を引かれて、店の奥へと入って行った。

『カイボーが・・・したいです』

ホワイトブツタ登場に、泣きながらカイボーがしたいですと、発言してから半月程経過していた。

まずは体力作りから始めようと、総指揮の藤田に言われ、体力には自信があると言っていたが、中学も部活に所属していなかった奴に体力がある訳がなかった。着たばかりのＴシャツは、水分を吸いこみ、重量感がある。

「うわっ、重っ・・・」

「おい、早くしろよ。さもないと、扉開くぞ」

「あっ、待って」

綺麗に畳まれた着替えから、新しい服を乱暴に取り、頭から通す美弥だが、白いＴシャツの胸にデザインされた阿修羅を見て、毎回のようにため息を漏らしていた。

練習着には、汚れてもいい服を持ってこいと言われ、そんな服は無いと言うが、新しく練習着を買うのも勿体無いと、お下がりで貰う事になったが、美弥の体格で原田兄弟や森谷が、大きな服を持っている訳が無く、藤田の中学生の頃のＴシャツを借りる事になったが、言うまでもないが、センスは酷い。

「今回は、阿修羅か・・・」

「別にいいじゃねえか。この前の、鯉の滝登りよりは、マシだと思っぞ。なんせ、破壊神に阿修羅はピッタリだ」

「だから、破壊神だなんて、そんなじゃないもん」

肩を降ろしながら更衣室から出て行く美弥だが、その背中には「粹がつてんじゃねえぞ!」と大きく刺繍されている事に桜田は、毎回のようには笑いを堪えていた。ちなみに、前回、鯉の滝登りは二匹の鯉に吹き出しが付けられ「頑張れ、もうすぐ頂上だ!」「諦めるな!」と書かれてあった。

「うん、やっぱりピッタリだ」

「えっ、何？」

「何でも無い」

金田専門店は、店と原田家がくっ付いていて、店の奥に行けば原田家の居間が待っているが、そのさらに奥に進むと、弄月高校カイボー部の倉庫ほどの大きさは無いが、倉庫が待っていた。倉庫には、原田兄弟のカイボーが並べられ、その他にもカイボーの手足が広い空間に置かれていた。

「はい、お二方。眼鏡かけてね」

倉庫にやってきた二人に、森谷は立体映像を映し出す眼鏡を手渡した。手渡された眼鏡に桜田は愚痴を洩らした。

「またマトリックスかよ・・・」

「そりゃ、そうでしょ。まだカイボーないんだし・・・それに、正義と大正は、もう始めてるよ」

美弥が眼鏡を掛けると、倉庫の中では正義と大正が白いカイボーに乗り、模擬戦闘を繰り返して、大正が白い棍棒で正義の持つサーベルを弾き飛ばし、そのサーベルは美弥の方へと飛んできた。

思わず声を上げて、その場にしゃがみ込み、サーベルは美弥をすり抜けて、居間の方へと飛んでいき、音を立てながら窓ガラスが数枚、割れた。

「ちよつと、危ないじゃない！」

美弥の声に二人は、戦闘を止め、美弥は思わず眼鏡を外すが、眼鏡を外すと目の前にいたカイボーの姿は消え、壊れたはずの窓は元通りになっていた。落ち着きを取り戻し、もう一度、眼鏡を掛けると、正義がやれやれと言った感じで、肩をすくめていた。

「お前さ、いい加減、マトリックスとリアルを見分けるよ。どちらかと言うと、突然目の前でログアウトされたら、言いたい事が言えないじゃないかよ」

「しょ・・・しょうがないじゃない！」

続きを言おうとする美弥だが、その前に藤田が美弥に話しかけて来た。

「その前に席につけて、今、リアルな方では、倉庫で誰もいない所に向かって叫んでるようにしか見えてないぞ」

「ああ、そっか」

目の前に原田兄弟や藤田がいるのだが、実際には部屋の隅で椅子に腰かけているのが、目を凝らすと、見えてくる。全員が座ったまま動かないが、森谷と藤田はリアルとマトリックスの世界を行き来し、二人の目の前に映し出される映像で、原田兄弟のカイボーを調整している。

空いた席に美弥も腰を降ろし、マトリックスの世界で中央に集まる、みんなの所に向かった。

「今回は、兄さんとマサ、そして和実さんとで、林道のシュミレーション。残りは、田村の戦闘プログラムの管理、および終了次第、そっちに合流するって事で」

藤田の言葉で、原田兄弟と森谷が倉庫から姿を消し、藤田の「始めるぞ」と言う言葉を合図に、桜田はピンク色のカイボーに乗り込み、美弥の体には白いカイボーが装備された。突然、足にローラーの付いたカイボーを装備され、美弥はバランスを崩して、その場に腰をついた。

「いてっ！」

「おいおい、破壊神。マトリックスの世界で転ぶなんて、そんな高等テク、俺でも出来ないぞ」

嫌味のようにニヤつきながら言う桜田だが、

「だ、だって、まだ慣れてないんだもん。小麦ちゃんだって、最初はそうだったって言ってたじゃない」

と言う、美弥の言葉に小麦色の顔を一気に赤く締めあげた。

「なっ・・・誰から聞いた！」

言うてはいけないと藤田から聞かされていた事を早速言ってしまう、青ざめる美弥の横で、藤田は、ため息を漏らし、藤田の反応を見た桜田は、完全に読み切ってしまった。

「浩っ！てめえ」

「いいじゃないですか。その怒りを田村にぶつけてやって下さい」  
「ああ、そうする！」

藤田が、画面を操作すると桜田のカイボ－の手には、サーベルが握られ、美弥に襲いかかってきた。

「うわっ、ちよつと、小麦ちゃん」

「小麦って言うなあ！」

「マ、マミ。防御プログラム！」

白いカイボ－は、襲いかかってくるピンク色のカイボ－に怯えていたが、青い目が光りだすと、同時に襲いかかってくる桜田のサーベルを手で捕まえて止めた。

「・・・おい、破壊神。いつになったら、転ぶのと防御プログラムを口に出さないで実行する事が出来るんだ？」

「攻撃プログラムは、一発で出来るようになったのにな・・・」

桜田の言葉に便乗するように藤田が呟き、毎度のように藤田の呟きに美弥の心を傷つけられる。

「性格が出てるんじゃない？なんせ、かの有名な破壊神だもん。攻撃あるのみとか思ってるんじゃない」

「そ、そんな事無いよ。小麦ちゃんだって、どちらかと言えば、攻撃性のある性格じゃない」

美弥の言葉に、ピンク色のカイボ－の赤い目が、赤黒く光り、上段蹴りを美弥の顎下に入れようとするが、防御プログラムの働いた白いカイボ－は、飛んでくる足を抑えた。

「ホラっ、口より先に足が出る！」

「うるさいっ」

「はい、二人ともそこまで。マミ、防御プログラム停止」

「確認しました。防御プログラム停止します」

「嘘っ、マミったら！」

青い眼の光が消え、その隙を見て赤い目が更に赤く輝き、振り上げたピンクの拳には、拳ほどの炎が灯っているように見えた。

「ハアア・・カアア・・イイイ・・シイーン！」

「うわっ、小麦ちゃんつてばあ！」

「小麦と、呼ぶなああ！」

振り降ろされた炎の拳に、目を閉じる美弥。そして、両手を前に出し、慌てふためく白いカイボーだが、光が消えていた青い目からは、青い光が輝きだし、振り降ろされた拳を腕で受け止めた。その光景に藤田と桜田は、防御プログラムが作動した事に驚き、その事に気付いていない美弥は、何度も謝っていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい！お願いだから、殴らないで」

「なんでえ、やれば出来るじゃないか」

「へっ？」

美弥が目を開くと、桜田の攻撃を防いでいる自分の腕に気が付き「あっ」と声を出し、更に攻撃を仕掛けてくる桜田の攻撃を、白いカイボーは受け流した。

「おお、ちゃんと作動してる」

桜田の攻撃を受け流す美弥を見て、藤田はそう呟いた。

「や、やった」

ようやく、防御プログラムを口に出さないで作動させる事が、出来たと美弥は胸を撫で下ろし、桜田は攻撃をするのを止めた。

「じゃあ、次は防御プログラムと攻撃プログラムを同時に作動させる練習だ。両方出せるようになったから、この練習は楽だと思う。まあ実戦さながらで行こう」

藤田は、パネルを操作しながら「特別講師の登場って事で」と呟き、ボタンをタッチすると、美弥の目の前に、柔道着姿の津村が登場した。

「えっ？翠、なんで？」

「やつほ、春合宿、楽しんでる？」

手を大きく振る津村を見て、状況を把握できない美弥は、混乱し始めた。

「えっ？だって、翠も今は、合宿中じゃ・・・」



「まあ、合宿って言っても子供たちの引率みたいな感じだからね。こっちに着いたら結構、暇なの」

柔道の少年団に所属していた津村は、合宿中の保護者として五月の連休を費やし『柔道で汗を流してきます』と美弥に言い残し、この村にはいないはずだった。

「今日の夜遅くには帰れるし、明日からは、ちゃんと私も、そっちに合流するから」

「えっ？合流ってどういう事？」

「何、聞いてないの？私、美弥のメンテナンスをする事になったんだよ」

首を傾げる美弥に、藤田はため息を付き、津村に話しかけた。

「どうして、お前等二人は、言うなって事を簡単に言ってしまうんだよ」

「あつ、内緒だったつけ？ごめんね、浩」

「駄目だ。他にも言いそうだから、これ以上、口を開くな」

「了解であります」

津村は、敬礼のような事をして見せるが、他にも言いたそうな津村の顔を見て、ため息をつき、倉庫にいたはずの四人は、いつのまにか、畳が一面に敷かれた部屋に来ていた。美弥の姿は知らぬ間に道着姿に変わっていた。

「な、なんじゃこりゃー！」

「おい、田村。その銃で撃たれた時に言う言葉を、そう何度も使うなって。マミのプログラムは、持続したままだから、翠と試合形式の乱捕りをやってみろ」

「乱捕り？」

「柔道やれって事」

「えっ、でもマミのプログラムが持続していると、翠が危ないんじゃない？」

「おいおい、翠をそう甘く見るなよ。ああ、見えても一応、全国クラスの柔道選手だぜ」

ああ見えて発言に「おい」と突っ込みを津村が入れるが、藤田は話を続け、津村は、ため息をついた。

「防御と攻撃の両方を作動させるのに、柔道が一番手っ取り早い。俺が相手してやっても良かったが、それじゃ、つまらないしな」

畳の中央に立った津村は、美弥を手招きし、心配しながら美弥は津村の前に立ち、礼をしてきたから、同じく礼で返した。すると、津村はいきなり美弥の胸辺りの襟と手首辺りの袖を掴んだ。

「ほらっ、美弥。しっかり受け身取ってよ」

「えっ？受け身？」

「トオリア！」

美弥の片足を払い、バランスを崩れた美弥を、津村は背中に担ぐと、見事な背負い投げをして見せ、あと1センチで180になる巨体を、宙に浮かせて地面に投げつけた。

「いてっ」

「いでえ！」

地面に投げられた美弥が痛がると同時に、藤田は頭を抑えながら痛いと言を上げた。

「何？どうかした？」

津村の問い掛けに「いや・リアルで田村に蹴られた」と答えた。

「破壊神、お前、寝相悪いだろ」

桜田の問い掛けに、投げられた美弥は、確かに寝た時、よく頭の方角が朝起きると逆になっている事を思い出すが「全然」と首を横に振った。

「美弥、これはマトリックスの中なんだよ。痛い訳ないでしょ」

「そうだけどさ」

「これからビシビシ行くからね。さあ立つて！」

マトリックスから戻ってくると、林道を森谷に無理難題を押し付けられヘトヘトになる原田兄弟と、背中から何度も津村に叩きつけ

られた美弥と桜田は背中を擦る四人は、疲れてはいるものの、目立った外傷もないが、何故か藤田だけが頭に大きな瘤を二つも作っていた。

「ヒロ？お前は、なんでヒグマみたいな耳を作ってるんだ？」

汗を流しヘトヘトの正義が力無く尋ねると「右が田村で、左が桜田だ」と桜田を遂に『さん』付けをしないようになった藤田が答えた。

「だから、さつきから謝ってるだろ。俺は、絶対に破壊神よりも寝相は悪くないが、ちよつと寝相が悪いんだ」

「絶対に、小麦ちゃんの方が、寝相は悪いって」

互いに寝相の悪さを譲り合う二人を指さし「さつきからこんな感じだ」と藤田は原田兄弟に呟き、原田兄弟は、藤田に手を合わせて「ご愁傷様です」と答えた。

「ほらっ、さつさとクールダウン行って来なさい」

手を合わせる原田兄弟と譲り合う二人に森谷は走って来いと伝え、四人は嫌々、倉庫から外に出て、走りだし、森谷とすれ違う時に「楽しみにしてなさい」と呟かれた美弥は、首を傾げながら、三人の後を追って行った。

「まったく、兄貴。最近、和実が鬼嫁になって来てんぞ！どうにかしろよ」

「無茶言っな。あれは、絶対に浩の影響だ。まずお前が、浩をどうにかしろ」

夕闇に染まる桜並木をゆっくりと走り続ける四人に、酒に酔った村人達が頑張れと声を掛ける中、原田兄弟は鬼コーチについて、どっちの相棒が原因かと責任をなすりつけ合い、その後ろを走る二人は、最終的に寝相の悪さについて自分の実体験を話し合っていた。

「私は、朝起きたらベットじゃなくて部屋の入り口で寝てた事あったわよ」

「だったら、俺だって何故か敷布団の下で寝てた事があった！」

「私の方が悪い！」

「俺の方だ！」

二人の論議は、どっち方の寝相が悪いかと言う議題に始まり、最終的に自分の寝相の悪さが一番だと言う論議に変わっている事には、前を走る二人しか気付いていなかった。決着がつかない話し合いに正義が「お前等、二人とも悪い」と結論付けるが、帰ってきた四人の前で藤田が「マサが一番、最悪だ」と答え、子供の頃、朝起きたら体中に痣が出来ていた事を話し、全員が納得した。

倉庫の中で、二人一組で柔軟体操を始め、桜田の背中を押す美弥が細い桜田の背中を見て、思わず攪りたくなり、桜田の両脇に手を入れた。

「アツハツハツハツハ・・・って、破壊神・・・ヤメ・・・ヤメロツて！ちよつとお！」

「いやゝ、小麦ちゃん。可愛いゝ」

可愛い物には目が無い美弥と、完全に美弥のオモチャ的な存在と化した桜田は、目に涙を浮かべながら笑い続け、そんな光景を見て厄介な新メンバーを二人も入れてしまったと後悔する原田兄弟と藤田は目を合わせ、正義は肩をすくませていた。

桜田に襲いかかる美弥の背中には『粋がつてんじゃねえぞ！』と言う言葉が見え、大正は「かわいかわいは憎いの裏つてな」と呟いた。

そして、倉庫に森谷の姿が無い事によりやく気が付いた美弥は「あれ？和実さんは？」と呟いた。

「ああ、それだったら」

大正が、答えようとすると同時に、森谷が倉庫の大きな扉を両側に開きながら、登場した。

「さあ皆さん。特に美弥ちゃん、お待たせしました！」

森谷は、そう言いながら軽トラの荷台に乗った大きな荷物を指さした。

「えっ、私？」

オジサンの運転で倉庫に入ってきた軽トラの荷台に森谷は飛び乗り「見て驚け！」と布を勢いよく剥ぎ取ると、布の下からは、新しいカイボークが姿を現した。

体全体を覆う赤いフレームが輝きを見せ、黒い関節部分が新品だと言う証拠にくつきりと浮かび上がる。

「うおおおお！」

全員が唸り声を上げる中、状況が理解できない美弥は、口を大きく開いたまま、声を発する事が出来なかった。

「フレームは赤使用。モデルはやっぱりJAP、腕や足には、風を切るかのように走り抜けるイメージで黄色い草が舞い散るような模様を付けてみました。私がデザインしたのよ」

「うおおお、すっげえ！和実、これ高くなかったか？」

新しいカイボークについて熱く語る森谷に値段について聞く正義。

それについては、俺が答えようと藤田が一步前に出た。

「この前のゴースト登場で、商売繁盛したし・・・それにこれから優勝し続けるんだろ？」

藤田の「これからの優勝賞金は、このカイボークのローンに注ぎ込まれる」発言に、原田兄弟の顔は青ざめ、大ブーイングを引き起こした。

「ヒ口っ、てめえ、これいくらした！」

「そんなに優勝できると思っているのか！」

原田兄弟のヤジに「死に物狂いで殺<sup>や</sup>れ」と言う藤田の笑顔と冷たい発言に二人は、黙り込み、頭を抱えた。

「えっ？これ・・・何？」

ようやく口を開いた美弥に「何ってお前のカイボークだよ」と藤田は答えた。

「いや、私、お金払って無いよ」

「まあ、プレゼントみたいなもんだ。気にするな」

藤田の答えに原田兄弟は、さらに落ち込み「優勝し続けなければ

死ぬな」と心の中で会話していた。

「本当に・・・これ、私の？」

「ああ、お前専用のカイボーだ。オペレーションには今まで通り、マミを入れてある」

「だって、私、下手くそで、みんなの足、引つ張り続けてて」

「それは、田村がカイボーを始めて間もないからだ。すぐに追いつけるさ」

美弥がぼんやりと見続ける赤いカイボーの、赤い目がキラリと光った気がした。

「ねえ、浩？今の喜びを表現するために、浩に抱きついていい？」

「断る」

拒否する藤田に「意気地なし」と正義が呟き、大正が頷いた。

「別にいいじゃねえか、減るもんじゃねえし。むしろヒロの場合、プラスに加算されるぞ」

「全くだ。我が弟は、久しぶりにいい事を言った気がする」

そんな大正の言葉に「だったら、今、大正に抱きついていいの」

という森谷の言葉に「やだ、恥かしい」と返す中、顔を輝かせた美弥が口を開いた。

「私、これからもっと頑張る！一生懸命に練習して、みんなに負けないようになって、それから・・・このカイボーとみんなで一緒に走って行けるようになります！」

美弥の宣言に、メンバーは全員目を合わせ、拍手を送った。

全員から拍手を送られ、美弥は赤いカイボーに目を奪われ、自分のカイボーに心を躍らせる中、藤田はカイボーの両足首をガコツと言う音を倉庫中に響かせながら外した。

「あああああつ！」

全員の叫び声に、足を外した藤田は「な、何？」と挙動不審になりながら尋ね、メンバー全員から罵声を浴びせられた。

「ヒロっ、てめえ最低だ！破壊神が感動してる中、早速チェックか

よ！もうちょっと後でも良かっただろ！一度、死ね。死んで詫びろ！」

「いや、ほら・・・早速、慣らしたいかと思つてさ、だから・・・」

正義の正論に全員が首を縦に振り、藤田は味方が一人もない状態で、手にカイボアの両足を持ったまま、美弥に「すみませんでした」と頭を下げた。

「いや、別にいいけど・・・外れる事は私だつて知ってるし」

「うん・・・いや、ごめん。とにかく、ごめん」

謝り続ける藤田に対し、美弥もただ「うん」としか、答える事が出来なかった。

「まあ、そんな訳なんで、これから田村の走りに付き合つてくれる人」

藤田の呼びかけにカイボアを持つていない森谷と桜田は「持つてない」と宣言し、原田兄弟は「お前が行け」と藤田に言い放った。

「いや、俺もそうしたいのは山々なんだが、これから老人ホームでカイボアの定期健診なんだよ」

「いいじゃねえか、仕事ついでにデートして来い」

「全くだ。俺もこれから店番しなきゃなんないし」

原田兄弟に強引に押し付けられ、藤田は渋々、承諾すると美弥の足に、カイボアを装着し始め、一本の黒い電話線のような物を美弥に見せながら言った。

「この電極が、お前とカイボアを繋ぐ、生命線だ。簡単には外れないようになつてるけど、外れたら、ジェルになつちまうから気をつけろ」

「わ、わかった」

藤田も金田店の制服に着替え、店から美弥を連れて出ると同時に美弥が最速タイムで転んだ。

「いてっ、本当に痛い」

「何やってんだよ。ここはマトリックスじゃないんだぞ」

藤田は、腰をついた美弥に手を差し伸べ、美弥はその手を掴み、

商店街の中を走りですが『粹がつてんじゃねえぞ!』の背中の文字を見た、桜田は「なんかあの背中、負け惜しみに見えるな」と残されたメンバーに言い、全員が「全くだ」と答えた。

手を藤田に引かれる美弥を見送りながら、店内に鳴り響く黒電話の音に、大正は店内に戻り、受話器を取った。

「はい、こちらカイボー専門店金田です。・・・はい、いつもお世話になっております」

営業文句のような事を言い、その後は受話器の向こう側と会話をし続け「はい」と言う単語を繰り返す大正の顔は次第に曇り始めた。「はい、どうも、ありがとうございました。では、失礼します」

受話器をゆつくりと下ろし、店の外で待つ三人に「緊急事態だ」と大正は呟いた。

「どうした、兄貴。白薔薇からか？」

「そうだ。本部からだ。・詳しい事は、浩達に戻って来てからするが、和実、その前にスパイダーとバイソン、信用できる奴と連絡を取ってくれ。正義、お前は狛犬の所に」

「狛犬を？喧嘩が起きるぞ」

「今回は、そうも言ってられない状況なんだね」

大正は、肩を降ろし、頭を掻きながら話を続け「足軽が動いた」と呟くと全員の全員の顔が曇った。

道路の両側には森林が立ち並び、その中を走り続けると、森の中に一軒の老人ホームが見えて来た。

「どうもー金田専門店です。定期健診に来ました」

入り口前のインターフォンで、藤田が答えるとクリーム色のエプロンをした従業員のおばさんが現れた。

「はい、ご苦勞様です」

家の中に誘われ、玄関で靴を脱ぐ際に美弥が早速転び、腰をついた。「いてっ」と声を洩らす美弥に藤田はため息を洩らし、おばさ



んは小さく笑った。

「お前、これで何回目だ」

「まだ二回です！七転び八起き！」

二人の会話に「元気な、ご兄弟ね」とおばさんが呟き、二人は顔を見合わせ「一人っ子です」「同じく」とおばさんに答えた。

藤田は、使用されているカイボアの点検に言つてくると言い残し、残された美弥は

「おじいさんや、おばあさんの相手をして下さい」

と、おばさんに言われ、広場にいるご老人の中に放り込まれた。

おばさんが軽く美弥についての紹介をしたが、誰一人として美弥と言つ名前ではなく、好き勝手に名前を言いだし、その度に名前を訂正していた。

「だから、私の名前は美弥だつてば」

「おお、そうかい智子ちゃんかい」

「違つて！」

爺ちゃん婆ちゃんに言いように振り回される美弥。そんな中、検査を終えた藤田が広場に来ると助け船がやってきたと美弥は顔を輝かせた。

（待つてたよ。浩）

「田村・・・お前、爺さん達に苛められてんな。みんな、ボケてるフリしてるだけだぞ」

「えっ？」

広場にいる爺さん婆さんは、戸惑う美弥に笑顔を振りまき、騙されていた美弥は思わず苦笑いをした。

「また、おいで美弥ちゃん」

ご老人達に見送られ、二人は老人ホームから出ると、外はもう暗くなっていた。街灯と藤田の持つペンライトのみが、進むべき道を示し季節ボケをして出て来た虫達の声が美弥にとっては、薄気味悪い物にしか聞こえてこなかった。

案の定、飛び出してきた狐に驚き、横転した田村の両足から電極

が外れ、ジェルが吹き出し人工筋肉が、お釈迦になり自力で動く事が出来なくなつた美弥の手を取り、藤田が引つ張って行く事になった。

「まあ、初めての奴は大概こうなるから、気にするな」

「うん、ごめん」

「謝るな。次、謝ったら、放置していくからな」

「わかつた。ごめん・・・」

謝ってしまった事に気付き「あつ」と声を洩らす、藤田は美弥の手を放し、離れて行つた。

「いやゝごめん、嘘だつて！ごめんつてばゝ」

謝り続ける美弥に、離れて行つた藤田は大爆笑しながら戻つてきた。

「冗談だつて、一度、やってみたかつたんだよ。俺も、親父にやられたからな」

目に涙を浮かべながら「サイテー」と呟く美弥に「ごめん、ごめん」と笑いながら手を差し出した。

差し出された手を捕まえようと美弥は手を伸ばすが、藤田の手は、異変を感じ取り、自分の体へと引き戻された。掴み損ねた美弥は、バランスを崩し、文句を言おうと顔を持ち上げるが、藤田の睨みつける顔に異変を感じ取り、睨みつける方向に目をやった。

誰も通らない道路を横一列に並んだ五体のカイボーが凜と立ち、一向に動く気配がない。

「何？あれ・・・」

カイボーのフレームには甲冑のような模様が刻まれ、頭には兜のような物を付けていた。

「足軽だ・・・田村、俺の後ろに」

藤田の指示に従い、美弥は藤田の背中に隠れ、藤田は前に立つ五体のカイボーに向けて口を開いた。

「足軽が、こんな小さな村に、何の用だ。営業か？」

藤田の問い掛けに、一体のカイボーが前に出た。

「足軽は、誰かに雇われなければ、活動を起こさない」

「この村に、お前達を雇おうとする不届き物はいない。なんかの間違った。荷物まとめて帰れ」

「ところが、そうでもない」

一体の足軽が、藤田に近づいて来て、握った拳を突き出してきた。  
「商談だ」

「・・・聞くだけなら」

突き出された拳に藤田は、握った拳をぶつけ、商談を開始した。

「爆弾ゲームを要求する」

「無理だ。人数が足りない」

「この村のチームをかき集めれば、何とかなるだろ」

「なら、俺の一存じゃ答えられない。わかってるだろ」

「ならば、二日待とう。正しい返答を期待する」

立ち去ろうと後ろを向く足軽に、藤田は「待て」と声を出し、彼の足を止めた。

「待てよ。なんで猶予を二日も与える。その間に何をする気だ」

藤田は、立ち止まる一体のカイボーにそう聞きながら、後ろに隠れる美弥に「離れてろ」と小さく呟いていた。美弥が、少し後ろに離れると同時に藤田に背を向けて立ち止まっていたカイボーは、腰に付けた刀に手を掛けると、後ろに振り向き、その勢いを使って刀を引き抜いた。

横に振り抜かれる刀を藤田は、その場でしゃがみ込み頭上を刀が通り抜けて行った。

「相変わらず、やり方が汚いな。二日間で何チームのカイボーを壊すつもりだったんだ？正面から堂々とやろうとはしないのか？」

藤田は一瞬にして、刀を振り抜いたカイボーの後ろに回り込み、首の辺りにある電極を引き抜いた。

「まあ、正面からやろうとしないのは、俺もそうだけど」

電極を抜かれたカイボーは、ジェルを体中から吹き出し、その場

に楕円形の球体となつて停止した。

「美弥、ちょうどいい。攻撃プログラムと防御プログラムを同時に使つと、こう言う事も出来るようになる。よく見てろ」

一瞬にして一体のカイボーを失つた足輕のメンバーは、少々臆するが、フル装備で無い藤田に負けるはずがないと「兜の緒を締めろ！」と一人の足輕が叫ぶと「勝つて兜の緒を締めよ」と低い掛け声と共に刀を抜き、藤田に襲いかかつて行つた。

く粋がつてんじゃねえぞ」

金田専門店の奥にある倉庫には、原田兄弟の呼びかけに人が集まり始めていた。

「よお、原田兄弟。今日は一体何の集会だい？」

無精髭を顎下に蓄え、白い無地のＴシャツに黒いジーパン、体格のがっしりとして暑苦しい人が三名やって来て、原田兄弟と熱く握手を交わした。

「どうも、バイソンさん」

大正が握手を交わすと森谷に席に案内され、指定された席に腰を降ろし、腹が大きくなった牝牛についてバイソン達は語り合っていた。

「原田総指揮殿！本日、会合があるとの連絡を受け、馳せ参じた次第でございます」

「おう、ご苦労さん・・・スパイダー」

迷彩服を身に纏い、正義の前で敬礼をするスパイダー達に、正義も敬礼で返し、指定された席にスパイダーも腰を降ろした。他にもチームが続々と集まり始め、雑談で盛り上がりを見せる中、大正が大きく、手を鳴らした。

「皆さん、お忙しい中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。早速ですが、話に入りたいと思います。白薔薇の本部から、今日の午後、連絡を受け、早急に手を打たねばと思い、今回の会合を計画しました」

「ほお、親から子への業務連絡か、どんな内容だったんだ？」

「冗談半分で尋ねるバイソンだが、足軽が、この村に入ったとの連絡を受けました」との大正の言葉に、雑談交じりで聞いていた全員の口が止まった。

「おいおい、なんで傭兵部隊が、この村に来るんだよ」

「わかりません。ですが、事実です。先ほど、ブレイキから、山道

で足軽と思われるカイボーと接触したと連絡を受けました。モデルはWARR武人。足軽が好んで使う機体、そして、商談を持ちかけられたと言っていました。商談内容は、爆弾ゲーム。賭け商品は、各チームのカイボー一体です」

大正の商談内容の説明に「恐れながら申し上げます」と手を上げてスパイダーの一人が立ち上がった。

「足軽は、請負の部隊です。誰かが雇わなければ活動を起こしたりしません」

「誰かが雇い、ブレーキに襲いかかったって話だろ。兵隊が傭兵を雇う事だつてあるんだろ？」

バイソンの一人が腕を組みながら、その発言者を挑発するような態度で言い放ち、その言葉にスパイダーは顔を濁らせた。

「恐れながら、家畜の牛は、人に飼われる身。どちらが雇っているのか、理解できません」

一触即発のムードに大正が「とにかく！」と声を張り上げた。

「ここにいるメンバーは、俺達が信頼できると思ったメンバーしか呼んではないない。弄月の均衡を崩し、この村に新たな芽が生えようとしている」

大正が、そのチームの名を言おうとしたその時、倉庫の扉が開き、春先の季節を感じさせない黒いランニングシャツ姿で、狛犬が登場した。

「おうおう、相変わらず、家畜と兵隊気取りは、喚いてばかりで進展が無いな」

倉庫の中に勝手に上がり込む狛犬を見て、バイソンは席から立ち上がり、原田兄弟を睨みつける。

「おい、原田兄弟。こいつは隣町の奴だろ！何故呼んだ」

声を荒げ、狛犬の来訪を歓迎しないバイソンだが、その横では迷彩服に身を包んだスパイダーの一人が、小さな声で感心して言った。「なるほど、足軽の内部に詳しい元足軽を会合に呼び出した訳ですか・・・」

スパイダーの言葉に、バイソンの一人が席にふんぞり返りながら鼻で笑った。

「フン、その元犬のお陰で、この村は足輕の拠点にされた事があるんだぞ」

バイソンの反感を狛犬は嘲笑った。

「だったら、その足輕と対抗する白薔薇の拠点を、この倉庫に使っていた原田兄弟だって同罪だろ。それに、俺は原田兄弟と同様、独立を目指し足場を形成するために足輕を利用したただだ。今は奴等と関係は築いていない」

「おい、狛犬。その独立を目指している最中に、原田兄弟の倉庫や俺達を襲い、東山を荒らした事を忘れたとは言わせねえぞ」

「牛がモウモウと喚くな。噛み殺すぞ」

狛犬の後ろに立つ双子が、バイソンの方を見て親指を下に降ろし、バイソンは鋭い目つきで狛犬を睨み返した。

険悪なムードを漂わせる中、一つの空いた席が、勢いよく蹴飛ばされ、全員がそっちに目をやった。

折り畳みの椅子を蹴飛ばしたのは正義で、一向に進まない話し合いに「いい加減にしろよ。お前等」と最年少の正義が、ここにいる人達を黙らせた。静かになった倉庫で正義は席に着き、大正が口を開いた。

「今回の会合は、俺達が開いた。これ以上、邪魔をする奴等は退室を願う……。結論から言うと、狛犬や俺達のように、足場を固めようと強引に俺達を黙らせようとしている奴がいる。そのチームを俺達が、どのように歓迎するかが、今回の話し合いだ。そして、そのチームは、弄月高校カイボー部だ」

新しいチームの名前に全員がざわつき出し、さつきから席に座ったまま大人しかった桜田に注目が集まり出し、大正の合図で森谷は照明を落とし、映像を映し出した。

三枚の写真が映し出され、席に座っていた桜田が立ち上がり、映

像の前に立った。

「まず、弄月高校カイボー部でこんな絵を描けるのは、この三人だ。二年の斑目晴信と斑目一角。別に兄弟って訳じゃないんだけど、声帯も似てる訳だし、冗談混じりでかいやま檜山コンビって私は言っている。

おそらく、足軽と連絡を取ったのは一年の池助平、通称、狐。原田兄弟と同様、中立の立場を利用して大量の情報網を持っている」

桜田の説明が終わり、席に大人しく腰を下ろしたバイソンが大正に話しかけた。

「大将。今回、白薔薇からの増援の数は？」

バイソンの言葉に、大正は肩をすくめ「言っておかないと駄目だな」と口を開いた。

「希望する人数以上に、俺達のチームに新しいメンバーが加わった時点で、俺達は白薔薇から抜けた。だから、増援は無い。俺達が白薔薇から抜けた事を知って、向こうも動いたのかもしれない」

その後、狛犬が足軽についての説明に全員が耳を傾け、話し合いは終盤に差し掛かり、爆弾ゲームに参加するメンバーは、原田兄弟、バイソン、スパイダー、狛犬を主力とし、控えに参加していた数チームが名乗りを上げた。

そんな中、再び倉庫の扉が開き、巨人が二名、倉庫の中に入ってきた。

「あれ？もう終わってる頃合いだと思ってたんだけどな」

体中に人工筋肉の返り血を浴びた藤田と、両足に自分の人工筋肉の残骸が、へばり付いた美弥が、やってきた。藤田の登場に狛犬が、喜びの声を上げた。

「よお、ブレイキ。おめえ、久しぶりに戦ったらしいじゃねえか。

その話、聞かせるよ」

「ああ、ごめん。その前にシャワー浴びてくる。体中にジェルが、へばり付いてて、気持ち悪いんだよ」

藤田は、全員が会合を開く倉庫を横切り、居間の前で靴を脱ぐと、



家の奥へと消えて、藤田の後を追ひ、靴を脱ごうとする美弥は、バ  
ランスを崩し、その場に腰をついた。

「いてっ……。ああ、これで三回目だ」

尻餅をつき痛がる美弥の周りには、目を光らせる見知らぬオジサ  
ンたちが群がり、我先にと口を開いた。

「おい、嬢ちゃん。ブレーキの戦いを見たんだろ。どんな感じだっ  
た」

「是非、お聞かせ願いたい。金城正志の息子の動きは、如何程のも  
のだったのか」

無精髭を生やしたオジサンと、迷彩服を着て自衛隊のような格好  
した人に質問攻めにされ、「えっ？えっ？」としか、答えられない  
美弥の間に桜田が割って入った。

「ほらっ、離れる！こいつは、まだ純心まことなんだ。お前らみたいな、  
万年発情期が寄つてたかるんじゃない」

半径3m以上離れると、オジサン共に言い放ち、救いだした桜田  
だが、助かったとため息を漏らす美弥の両肩を鷲掴みにし「どんな  
感じだったか言え」と怯える美弥に答えるよう命令した。

必死に藤田と足軽の戦いを思い出す美弥だが、暗闇の中、繰り広  
げられた戦いで、ろくに目を開いてなかった事で曖昧な記憶しか残  
っていないかった。

「えっと……。動きが早すぎて、わからなかった」

そんな美弥の説明に全員が納得して、顔を縦に振り、適当に答え  
た美弥は、こんなもんで良かったのか？と疑問に思っていた。

「へえ、浩が戦ったのか。珍しい事もあるもんだ」

藤田が足軽を相手に戦った事を珍しがる大正だが、そんな兄貴の  
反応に「いやいや」と弟が手を横に振った。

「馬鹿兄貴が、あいつだって男だぞ。女の前で逃げ腰になるかよ」  
弟の言葉に「いや、そうだけどよ……」と口籠る大正。そして、

美弥は周りの反応を不思議に思い、感心する桜田に話しかけた。

「ねえ、そんなに浩が戦う所って珍しいの？」

「珍しいって言うか、浩が戦っている所を誰も見た事が無いんだよ。唯一、見た事があるって言ったら、原田兄弟ぐらいだ」

桜田の答えに感心する美弥だが、狛犬の後ろに隠れる双子がずっと睨みつけている事に気付き、見つめ返すが、双子は見つめ返す美弥に、舌を出し、狛犬の後ろに隠れた。見ず知らずの双子に、舌を出され、嫌われた美弥の心は傷つき、自分の足についた人工筋肉を洗い流すと言い残し、居間の方へと向かった。

藤田の登場で、会合は終了し、倉庫では各チームが解散し始め、反対側の店の前では、抜け落ちた髪をタオルで隠す浩嗣が、店のシャッターを降ろそうとしていた。

そんな浩嗣の前に、思わぬ来訪者が現れ、後ろから話しかけた。「相変わらず、こんな店を続けているのか」

後ろから聞き覚えのある声に話しかけられ、浩嗣が後ろを振り返ると、紺のスーツに身を包み、整った髪を左右に分け、デザイン眼鏡を掛けた田村義彦が後ろに立っていた。

「義彦・・・か？」

しばらく顔を見ていなかった旧友に、本人確認をする浩嗣の問い掛けに、義彦は答える事はなかった。

「娘の帰りが遅くてね。まさかとは思うが、ここにいてことは無いだろうな？」

「おおお、やっぱり義彦か、しばらくだな」

近寄ろうとする浩嗣の前に手を出し、義彦は近づくなとサインを出した。

「ヒロ・・・お前は、何を考えている。自分の息子と、マサの息子にカイボーをやらせるだなんて・・・拳句に俺の娘までたぶらかせやがって」

義彦の態度に、浩嗣は顔を曇らせ言葉が詰まった。

「・・・懐かしいな。そんな呼び名で俺達を呼ぶなんて」

「答える！お前は、親友だけでなく、その息子と自分の息子まで失

うつもりか！」

店の外が騒がしい事に気が付き、風呂上がりの藤田が店の外に出た。店の外に出て来た藤田と義彦の目が合い、義彦は口を開いた。

「君が、マサの息子か、確かに体格といい面影はある・・・いや、その鋭い目つきは、母親の桃花に似ているな」

見ず知らずの人に、突然、自分の顔が親のどの部分に似ているかと、図々しく指摘され、ムツとする藤田は、横にいるオジサンに話しかけた。

「オジサン、この人は？」

「美弥ちゃんの父親だ」

「田村の？」

二人の会話を聞き、義彦はここに娘がいると確信し、口を開いた。「やはり、ここにいるんだな。連れて帰らせてもらうぞ」

美弥の父親が、店に向かい歩き出すのを見て、思わず藤田が前に立ちはだかった。

立ちはだかる藤田を見上げる父親を見て、藤田は何故、立ちはだかったのか首を傾げた。

「何のつもりだ？」

「いや・・・なんとなく・・・ただ、ここで止めないと駄目な気がして」

「父親を失ったお前が、何故、カイボーを続ける。そこで俺を止めようとせず、栄光に縋り続ける浩嗣に唆されたのか？」

「俺の親父もオジサンも、関係無い。俺達は、自分の思いでカイボーを続けている。それに田村だって同じだ。あんたが反対しようが、あいつは、きつと続けるぜ」

「だとしても、俺には娘を止める義務がある」

義彦は、見上げるほどの藤田に伝えると、浩嗣の方に目をやった。「ヒロ・・・お前は何故、息子達を止めない？いつまでも大人にならない餓鬼でもあるまい、いい加減、大人になれ」

ちやうど義彦が、その言葉を浩嗣に言い放った時、店の中から顔

を真っ赤にし、Ｔシャツの背中に書かれた『粹がつてんじゃねえぞ！』の刺繍を見せながら、美弥が店の前に立つ藤田に気が付き、やってきた。

「浩！何この背中マーク。これ、私知らないで老人ホームに・・・」  
美弥が登場するのと同時に、歯を強く噛みしめていた浩嗣が、口を開き、その言葉に、美弥の声はかき消された。

「大人になりきれしていないのは、どっちだ。眞美の死から立ち直れていないのはどっちだ・・・」

吐き捨てるかのように言い放った言葉は、義彦に突き刺さり、店前に立つ高校生二人にも重く押し掛かってくる。

「お前達二人は、いつもそうだ。餓鬼の頃から、余計なお節介を掛けまくって・・・その挙句、マサに関しちゃ、死ぬ間際に、眞美まで連れて行きやがった」

睨み合う二人と、心の傷付く言葉が飛び交う場所に、やって来てしまった美弥は「何？」としか言えず、怖さのあまり、佇む藤田の袖を掴む事しか出来なかった。

「お前が、最終メンテナンスを、しっかりとやって置けば、マサも眞美も死なずに済んだ！二人とも、ヒ口、お前が殺したようなものだ！」

「違う、俺はミスなんかしない・・・けど、正志が死んで、もしかしたら俺に非があったのかもしれない。だが、眞美に関しちゃ、俺は無関係だ。変な言いがかりはするな！」

「二人とも、その辺にしておきな」

いがみ合う二人の言い争いに割って入ってきたのは、騒ぎを聞きつけた狛犬だった。

「二人はそのまま、いがみ続けようが構わないが、あんた等の息子娘が、あまりにも悲惨だ」

ニヤつきながら、二人に近寄る狛犬の言葉に、二人は店前に立つ、自分達の子供達に目をやると、娘は今にも泣き崩れそうな表情を浮

かべ、必死に藤田の袖を掴み立っていた。そして、その藤田の目は、我に返る父親達を蔑むような目で睨みつけていた。

狎犬の仲裁によって口を開くタイミングを見出し、口を開いた。

「情けねえ、失った者同士、失った原因の責任転嫁かよ。……餓鬼の俺から見たら、二人とも、薄汚い大人だよ」

冷たく言い放つ藤田の言葉に、上昇していた体温が急激に下がり始める浩嗣と義彦。そして、藤田の言葉にニヤついていた顔が、笑い声を上げた。

「ハッハッハッハッ……。こりゃいい、息子と娘に諭される父親としての、案外、見物だ！」

静まり返る場所で、場違いにも大声で笑う狎犬は、笑うのを止め、藤田に近づき、藤田の肩を叩いた。

「狎犬、ありがとう。止めてくれなきゃ、マジで切れてた」

すでに怒りを爆発させている藤田だが、狎犬は、あえてそこには触れなかった。

「明日からの合同練習、楽しみにしてる」

狎犬は、藤田の耳元で呟くと、双子が後部座席に座る車に乗り込み、立ち去った。

珍客も立ち去り、取り残された四人だが、義彦は浩嗣に目を合わせる事無く、娘に「帰るぞ」と呟くが、父親の言葉に娘は首を横に振った。

「いや……。帰らない」

今にも崩れそうな顔で、首を横に振る娘に、父親は心を痛めながらも、息を深く吐き出し、その感情を押し殺した。

「何を言っている。そこで野宿でもするつもりか」

無理にでも連れて帰らせようと、父親は娘に近づこうとするが、その前に大きな壁が立ちはだかった。

「……また、なんとなくって理由なら、そこから退ける」

「いや、お互い、気持を整える時間が必要だろ。野宿は、させないから安心しな」

藤田の言葉に、義彦は思い悩み「明日には帰って来い」と娘に言い聞かせ、店の前からゆつくりと去って行った。立ち去る父親の寂しそうな背中に、娘は『粋がつてんじゃねえぞ!』Ｔシャツを投げつけ、店の奥へと入って行った。

赤と白のカイボーが並べられた倉庫の横に小さな階段があり、階段の先にはスーパースタイルハウスが一つ置かれ、美弥はそこに籠ったまま、一向に出てくる気配はなかった。

「あそこ、俺の部屋なんだけども・・・」

「まあ、いいじゃねえか。どうせ、ヒロが俺の部屋に来て、破壊神にあそこ使わせようって寸法だったんだろ？」

見上げる藤田と正義は、そんな会話をしながら、敵陣に乗り込もうとする桜田を見守っていた。

「桜田く。相手は、かの有名な破壊神だ。気をつけるよ」

冗談半分で手を振る正義に、桜田は胸に抱えていたピンクの豹の人形を投げつけ、見事に顔で受け止めた正義は、その場に倒れた。

「マサ・・・。相手は、かの有名な破壊神とピンクパンサーだぞ。気をつけなくちゃいけなかったのは、マサだったらしいな」

顔にくっつく人形をどかしながら、藤田の言葉に「二人共、ただの女の子さ」と付け加え、そんな二人を他所に、桜田は、部屋へと入っていた。

スーパースタイルハウスの中には、勉強机と、カイボーに関する本が並べられ、その横に、シングルベットと、美弥が寝転がっていた。

入ってきた桜田に気付き、美弥はベットから起き上がると中学の卒業アルバムを見せつけてきた。

「小麦ちゃん、見て、エロ本見つけた」

「いや、どう見ても違うだろ」

桜田の指摘に、美弥は「まあそうだけども」と力無く答え、突き

つけていたアルバムを降ろした。

「普通、男の子なら、一冊ぐらいあってもいいと思うんだけど・・・」  
「普通、男の部屋に入ってエロ本を探す女子は、まず絶対にいない」  
続かない会話が、何度か繰り返されていく間に、美弥が話を変えた。

「ごめんね。明日になったら、いつも通りに戻ってるから。みんな心配してた？大丈夫だよ。私、一日寝たら元気になるから」

頭を掻きながら言った言葉に、桜田は「粹がんなよ」と小さく答え、美弥は髪を掻き乱すのを止めた。

「辛かったら、吐き出せばいいじゃねえか。思い詰まったら、悩む前に誰かに、話せばいいじゃねえか・・・お、俺はてつきり、お前とは、そういう仲だと思ってただけだな」

後半部分を、かなり照れながら呟く桜田に、美弥の心が疼き「小麦ちゃん」と叫びながら、飛び付き、突然の行動に桜田は悲鳴を上げた。

倉庫でカイボのメンテナンスを続ける藤田は、自分の部屋が大きく揺れ動いた事に驚き、横にいる正義は「あいつ等、大丈夫か？」と読んでもいないファッション雑誌を持ちながら呟いた。

「私ね、知ってたんだ。お父さんが、書きたくもない記事を書かされてた事ぐらい・・・」

突然、襲われそうになり、部屋の隅で毛を逆立てる桜田に、美弥は膝を付き、顔を下に向けながら口を開いた。

「金城正志とそのチームを擁護するような記事を提出したら、そんな記事、今の読者は必要としないって突き返されたことぐらい・・・でも、批判するような記事を書いているのを見て、まるで、お母さんの仕返しをしているように見えたの。そしたら、オジサンの前で私が勘違いだっと思おうとしていた事を、お父さんが言ったの。そしたら、私」

長い髪で隠れた顔からは、涙が流れているように見えた。

「ああ、私、今まで何を勘違いしてたんだろうって、力が抜けちゃって・・・」

逆立っていた毛も、次第に落ち着きを取り戻し始め、そんな桜田の目の前で、美弥は握った拳で流れていた涙を拭い、深く息を吸って思いつきり吐いた。

「まあ、私も浩にお母さんの事で、酷い事言っただけだねっ」

勢いよく顔を持ち上げると、流れていた涙も止まり「スッキリした」と言い、美弥は部屋の隅にいる桜田に指さした。

「はい、次、小麦ちゃん番!」

「はあ?・・・俺?」

突然の指名に、自分を指さし美弥に尋ねるが「そうそう」と首を縦に振られて、何を話せばいいのか戸惑っていた。

「もう・・・きつと、みんな気付いてるよ。小麦ちゃん、最近元気が無いって、特に私と小麦ちゃんは、そういう関係なんだから」

指を小刻みに揺らし、目を光らせる美弥に、思わず身構え「そんな関係を築いた覚えはない!」と言いながらも、見抜かれていた事に肩を落しながら桜田は、口を開いた。

「俺は・・・お前のメンテナンスをやるって浩に言ってたんだ・・・でも、あの野郎、田村のカイボーを買うついでに、俺のカイボーも買おうか?って、聞いてきたんだ」

「えっ?だって、小麦ちゃんには、自分のカイボーが・・・」

「あのカイボーは、部活の金で買ったんだ。引退しまえば、あれは俺の相棒じゃなくなる。一年以上、あいつと一緒に走ってきた。新しい相棒なんか、作りたくもない。だから、お前のメンテナンスに志願したっていうのに、浩の奴、今度の商談で、パンサーを奪い返すって言い始めやがった」

「そうなの?」

美弥の言葉に「そうだよ」と答え、話を続けようとする桜田の手を取り、美弥が先に口を開いた。

「私、頑張る。小麦ちゃんのカイボー奪い取ろう。そしたら、私と



一緒に走れるでしょ。私、小麦ちゃんと一緒に走りたい」

目を輝かせる美弥の顔に思わず見惚れるが、すぐに手を放した。  
「ば、馬鹿じゃねえの。もし、負けたら逆にカイボーが取られちゃうんだぞ！走るところの話じゃなくなるんだぞ」

「大丈夫だよ。浩がいるし、それに正義や大正さんだっている」

断言する美弥は、桜田に親指を立てて突き出し「問題無<sup>モウマンタイ</sup>」と言っ

た。何を根拠に言っているのか、わからないが、そんな美弥の言葉に、思わず笑みをこぼし、その笑みを見た途端、美弥の目が光り、再び飛びかかった。

再びスーパーハウスが、大きく揺れ動き「俺の部屋、壊れないだろうな」と藤田が呟き、正義は、桜田の悲鳴を聞き合掌をしていた。

しばらく静かになったスーパーハウスに繋がる階段を、帰って来たばかりの津村が上ろうとしていた。

「頑張れ、津村。お前にしか頼めないんだ。どんな状況になっているか、確かめてくれ」

正義の言葉に、軽くため息を付きながら、津村は階段を上り、ゆっくりと扉を開き中の様子を窺うと、照明の落とされた部屋で美弥と桜田は藤田のベットの上でご就寝になっていた。

「ねえ、本当に私を呼んだ意味って何？」

予想通りの結果に、津村は少々ご立腹のようで、階段の下では部屋の中が予想通りの結果に胸を撫で下ろしていた。

「くそつ、心配掛けさせやがって。俺の就寝時間を返せ」

胸を撫で下ろしながらも、何故こんな夜遅くまで、起きていたのかわからなくなった正義が、腹を立てる中、藤田は、津村を送って行くと言うが、津村はそれを拒否した。

「いや、いいわ・私も浩の部屋で寝る。もう疲れたもん」

「おう、そうか・布団の場所、わかるだろ？」

「うん、大丈夫。じゃ、おやすみ」

津村は、階段下にいる正義と藤田に、伝えると部屋に入って行き、

下に残された二人は、正義の部屋へと向かった。

最初は、我慢しようと思っていた。いびきを掻こうが、歯ぎしりが聞こえようが、だが、殴るのは、止してくれ……。

ボロボロになった藤田は、いびきを掻く正義の部屋から布団を持ち出し、薄暗い中、急な階段を下り、居間にやって来ると、ちょうど倉庫から、布団を持ち、乱れた髪をそのまま放置した津村が居間へ上がって来ていた。互いに、目が合い「お互い苦労するな」と藤田が言くと、苦笑いしながら頷いた。

次の日、一人暮らしをする大正と森谷が、居間に寝る大きな男性と小さな女性を見て、悲鳴を上げる所から始まり、大家族となった原田家の朝食では、どっちが悲惨だったかを藤田と津村が激論し、いくつ痣が出来たかを公開して、痣を作った張本人達は、その光景を見て『嘲』笑っていた。

## 爆弾ゲーム 弄月チーム対足軽

白薔薇と足軽とは、北海道で活動する独立支援のカイボーチームの事である。会員数は、互いに一万を超え、カイボー人口の半分以上が、白薔薇もしくは足軽に所属しているとも言われている。そのため、抗争が絶えず行われ、商談の数だけ、金や商品、カイボーが行き来し、本部の懐が潤うとされている。

「なんで？」

白薔薇と足軽の歴史について教わりながらも、何故それで本部が潤うのか、理解できない美弥は、マトリックスの世界でマミに話しかけていた。

「藤田浩の見解では、足軽と白薔薇は同一の会社で成り立っていると思われています。そして、その会社は、ケアリングロボットの本社と繋がりがあり、おそらく大量に製造を依頼する事で、紹介料を頂いているのではないかと・・・」

未だに、攻撃プログラムと防御プログラムをうまく引き出せない美弥は、合同練習に参加する事は出来ず、リアルの方では、メンテナンスを行う津村が、桜田の指導を受け、現在、美弥はマトリックスの世界で、放置プレイを楽しんでいた。

「でも、証拠も無いんですよ？」

「はい、ですが、火のない所に煙は立たぬ。とも言います」

マトリックスの世界で、独り言を繰り返す美弥を横に、津村は覚えることの多さに、目を回し、桜田は、目を回す津村に渴を飛ばしていた。

「ねえ、爆弾ゲームってアメフトのルールと一緒になんだっけ？」

「はい、ですが、安全性の向上によりルールの緩和や、フィールド

の大きさなどが相違点として上げられます」

美弥の視点の一部には、グラウンドの広さや、ボールの大きさを比較するような物が、映し出されるが「ストップ、ストップ」と止めに入った。

「マミは、オペレーションシステムなんでしょ？」

「正確には、operating systemです」

「ああ、難しい単語は言わないで」

「operating systemとは、コンピューターで、利用者とハードウェアの間に合って、利用者がコンピューターシステムをできるだけ容易に・・・」

「いや、そうじゃなくて、全部のカイボーにマミはいるの？」

「いいえ、音声案内システムを開発したのは、金城正志と東堂眞美です」

美弥の視線映像の隅には、高校時代の写真が映し出され、父親が立つ場所と、肩を組む金城と浩嗣を挟んで横に立つ母親が現れた。目が潰れるほどの笑顔を見せる金城と母親の顔が、ズームアップされた。

「主な開発者である東堂眞美の名を取って、マミと命名されました」  
「じゃあ、マミは高校時代のお父さんやお母さんの事を知ってるんだ」

「映像記録が残されております。拝見されますか？」

「あつ、見たい」

写真の出ていた部分が、映像に切り替わり、カメラを設置する金城が映し出された。

『よし、オッケー！マミ、ずっとそれ持ってるよ』

固定されたカメラから金城は離れ、椅子に座り毛布を被り眠る眞美を叩き起こした。

『眞美、眞美、起きろ。完成してんぞ』

肩を揺らされ、意識がハッキリとしない眞美は、目を擦りながら金城に何時かと尋ね、知らんとキツパリと言われ、再び眠りに入る

うとしていた。

『眞美、起きろって、カイボアのオペレーティングシステムが完成してんだよ』

『えっ、嘘!』

意識を取り戻した眞美は椅子から飛び上がり、その拍子に金城の顎に頭をクリティカルヒットさせ、二人はその場に倒れた。

『いやゝ痛い! マサの馬鹿っ、もっと丁寧に起こしなさいよ!』

『そっちこそ、起きるならもっと丁寧に起きろ!』

眞美は、固定カメラに駆け寄り、状態を確かめようとマジマジと見つめ、金城は、他のメンバーを起こしに、倉庫の隅にある階段を上がり始める。

『うっそ、信じられない。本当に出来てるなんて』

『あっ、名前もう決まってるから、マミにしておいた』

『はあっ? えっ、なんで・・ちょ、変更できないじゃない!』

眞美は、カメラの横にあるキーボードを打ち始めるが、変更が出来ない事に金城に文句を言っていた。

『ハハッ、親の名前と一緒に、良い名前だろ』

勝手に名前を付けられた眞美は、カメラに力無く、近寄り『もっと良い名前、考えてたのに』と嘆くが、ようやく録画されている事に気が付いた。

『ちよっ、ろく・・・録画って、録画って何よ! どこから撮ってた!』

『お前のぼやきは、永久保存だ。・・・ヒロっ、ヒロっ起きろ! あっ、ついでに義彦も』

階段を上がり、扉を開くと同時に金城の顔に枕が飛んできた。

『うっせえ、ボケ! 夫婦喧嘩のせいで、こっちはもう起きてんだよ!』

『って言うか、ついでってどういう事だ!』

部屋の中からは、浩嗣と父親の若々しい声が聞こえ、二階で繰り広げられる枕投げを、日常茶飯事のように、画面の横のため息を洩

らしながら、眞美は見つめていた。

『おい、手分けして他のメンバーも呼ぶぞ！眞美、お前は桃花、連れて来いって、完成した記念にみんなで写真撮るべ』

最後に金城の言葉が聞こえ、眞美の手によって映像は切られた。

「桃花って誰？」

「藤田桃花。金城正志、原田浩嗣と同様、カイボー部創立メンバーの一人、後の金城正志の婚約者です」

母親の顔が大きく映ったまま、止まる映像から、先ほどの写真に切り替わり、母親の下に車椅子に座り、オカッパ頭と暗い目つきが印象的で、鋭い目つきでカメラを睨みつけていた。

（なんだか、言い方は悪いが、こんな人に、母親が負けたなんてちよつとショックだ）

「ねえ、その桃花さんは亡くなったんでしょ。なんで亡くなったの？」

「それは、俺のせいだ。俺を産んだ後に持病を併発して、ポツクリだそうだ」

マミの代わりに、突然、登場した藤田が美弥に言ってきた。

「ったく、マミが映像システムを起動させてるから、来てみれば、何やってんだ？」

「えつと、あの・・・これは」

思わぬ登場人物に、慌てふためく赤いカイボーは、必死に言い訳を考えるが、無駄な努力だった。

「いや、ごめん」

「別に謝れても困る。それから、ちよつとこつちと合流してほしい」

「えつ、でも私、爆弾ゲームのルールも全然知らないよ」

「大丈夫だ。ボールを蹴るだけだ」

藤田は、リアルの世界で桜田と津村に話しかけた。

「翠、ちよつと交代だ。I have control」

「りよ、了解。You have control」

美弥は、マミに主導権が藤田に移動されたと聞かされ、目の前に

あつた倉庫は消え去り、大きな芝のグラウンドが目の前に広がった。  
「おおおお」

「田村、お前、映像が切り替わるのに、いい加減慣れるよ」

唸り声を上げる美弥に、横に現れた藤田がため息交じりに言ってきた。

「いや、慣れるもなれないも、これは結構貴重な体験だと思うよ」

「はいはい、とりあえず、グラウンドに置かれてるボールを助走つけて蹴ってみてくれ」

芝のグラウンドには、アメリカンフットボールの競技で使われるような、楕円形のボールが置かれ、藤田に言われるがまま、美弥はグラウンドへと向かった。

「ねえ、これを蹴ればいいの？」

美弥の叫び声に、グラウンドの外にいる藤田は「そうだ」と美弥に聞こえるように叫び返した。

美弥は、設置されたボールから数歩離れ、助走を付けながらボールを蹴り飛ばした。

ボールは、音を立てながら飛び出し、大きな弧を描きながら、向こう側に見えるアメフトのゴールに使われるボールに当たった。

「ふーん、100ヤード以上は、飛んでるな」

藤田は、そんな事を呟き、グラウンドに放置されたままの美弥は、首を傾げていた。

「ねえ、終わり？」

「うん、今のところは・・・翠、You have control .  
じゃ、また後で」

手を上げる藤田の映像は消え去り、いつも通りの倉庫の風景が戻ってきた。

「contact・美弥、聞こえる？」

リアルとマトリックスをまだ行き来できない、津村は通信で美弥に話しかけて来た。

「うん、聞こえるよ」

「浩となに話してたの？」

「わかんない、ボールを蹴っただけ。ねえ、それより、私、リアルに戻ろうか？すぐ横にいるのに、通信を使わないと、会話できないなんて、なんか気持ち悪いよ」

「あつ待つて、今、電極を繋ぐ練習をしてる所だから」

「ええ、また放置プレイ？」

「そんな事、無いよ。今から桜田先輩がそっちに行くから」

津村の言うとおり、美弥の目の前にはピンク色のカイボアを装着した桜田が指を鳴らしながら登場した。

「さあて、攻撃と防御プログラムを同時に出す練習をしようか」

「えっ、嘘。小麦ちゃんど？」

小麦ちゃんと呼ばれ、頭に血が上った桜田は「小麦って言うなあ」と叫びながら、サーベルを片手に、赤いカイボアに襲いかかった。

美弥が先ほどまでいたグラウンドよりも、広い場所では、原田兄弟や狛犬など、各チームのカイボアが、練習に勤しんでいた。

バイソンは、目の前にいる敵のカイボアを見立てた人形とぶつかり合い、スパイダーは、正義の投げたボールを追って、グラウンドを走り、空中でボールを捕まえていた。

「みんな、キッカーが決まったぞ」

森谷と各チームのメンテナンスの人達にそう言いながら、藤田は近寄って行った。

「なあに、もしかして本当に美弥ちゃんを使うつもり？」

森谷の心配そうな声に、藤田は「そうだ」と頷き、藤田の答えに森谷は、ため息を漏らした。

「絶対に危ないって、デビュー戦が爆弾ゲームだなんて・・・」

「けど、いつかは経験する。遅いか早いかの問題だ」

グラウンドには、正義の掛け声と、バイソンの人形とぶつかり合う声が鳴り響き、大正が全体練習を始めようと提案した。



「浩も戻ってきた事だし、敵の動きは、浩にやってもらおう。本番、<sup>さながら</sup>宛らで行くぞ」

大正の言葉に、全員が低い声で返し、グラウンドに向かった。

「敵のカイボーもそのまま出すぞ。ラインは、おそらくモデル力士で固めてくると思う」

藤田は、画面を操作し、大きな巨体をしたカイボーを五体、大正達の前に出し、残りの六体は、甲冑の姿をしたカイボーを出した。

敵のチームの掛け声が鳴り響き、ボールを持った力士が大勢を低くした。そんな力士と、ボールを挟んで体制を低くしたバイソン達が睨み合い、力士がボールを後ろにいる武人に手渡した瞬間、バイソン達は、目の前にいる五体の力士とぶつかり合った。

カイボー同士がぶつかり合う音が鳴り響き、手渡されたボールを持った武人は、力士に守られている間、素早くボールを味方に投げ放った。宙を飛ぶボールをバイソン達は見上げ、放たれたボールをキャッチした武人に、大正が体当たりを食らわせた。

『first down 10』

会場には、敵のプレーが成功したと知らされる言葉が、鳴り響き、向こう側は成功した事を喜び、ハイタッチなどを決めていた。それを見せつけられた大正達はあまりいい思いはしない。

「おいおい、最初っからプレーキに翻弄されてどうするよ。本番じゃ、このプレーが命取りになるぞ」

ディフェンスリーダー狛犬の言葉に、全員が気持ちを引き締めた。狛犬が作戦内容を伝え「break!」と手を鳴らし叫ぶと、全員が手を鳴らしながら、各自各々のポジションに立った。

再び、足軽の攻撃が行われ、力士の後ろにいるカイボーが、コールを始め、ボールを持った力士が、コールに合わせてボールを後ろに手渡した。

再び、バイソンと力士たちがぶつかり合うが、その間を通過して狛犬がボールを持つカイボーに突っ込んでいった。ボールを投げる事

が出来ず、狛犬のタツクルをともに食らったカイボーは、後ろに飛ばされた。

『2 down long』

「シャア！ nice choice .」

15ヤードも後退させる事が出来た事に、正義と狛犬はハイタッチを決め、ちょうどその時、桜田から厳しい指導を受け終えた美弥達が登場した。

「おおお、なんか凄い事になってる」

美弥がそう呟く中、プレーは再開され、敵のカイボーが放ったボールを大正が追いかけて、空中で捕まえる事が出来た。

「intercept !!」

攻守交替だと、森谷は大正の活躍に声を張り上げ、喜び飛び跳ねていたが、敵のカイボーにすぐに抑えられ、敵を動かす藤田を森谷は睨みつけた。

「ちよつと、睨みつけないで下さいよ。俺がしているのは、作戦行動だけで、それ以外はコンピュータが操作してますから」

「後で、覚えてろよ」

森谷の言葉に、藤田はため息を洩らしながらも、攻守が交代したので新たな作戦を、グラウンドにいる人形達に伝えた。

「狛犬の双子で中央ブラスト」

オフENSリーダーの正義が、何も考えずにゴリ押しの中央プレーの指示を出し、誰もが頭を抱え込みながらも「break!!」と言う正義の掛け声に、オフENSの体系に広がり、正義の掛け声で、バイソンからボールを手渡された。正義は、後ろにいる双子の一人に、ボールを手渡し、手渡されなかったもう一人が先頭を走り、ボールを持つ者がその後を追って走り出した。

だが、プレーを読んでいた藤田によって、1ヤードも進めないまま、双子は力士達に押し潰されてしまった。

「あいつは、阿保か」

単純な性格のお陰で、捻った作戦が出来ない正義の頭を完全に読

み取った藤田は、ため息交じりに呟いた。

その後、残りのプレーも全てランプレーに頼り切り、全て読み取られた正義は、オフエンスリーダーから外され、大正がオフエンスリーダーになる事になった。

合同で行われていた練習が無事に終了した後、倉庫では「ヤダ」と頬を膨らませる美弥に対し、藤田と津村はため息を洩らし、頬を膨らます巨人に、正義は少々、キレていた。

「お前な！頬を膨らませて可愛いとか思ってたんなら、鏡の前でやって、シヨックのあまり亜空間にでも飛ばされてろ！」

「うるさいっ、自分でも、そんなの小学生までだって自覚してます！」

倉庫の外で軽トラに乗り込んだ大正が、一向に終わらない口論に、口を挟んできた。

「なあ、乗るなら早くしてくれよ。こっちはとっと帰って、眠りたいんだ」

「うつせえ、馬鹿兄貴。夜飯まで、ちゃっかり食っておきながら、帰るとか嫌らしいんだよ。一人暮らし止める！」

「うつせえ、こっちは、ちゃんと給料の中でやりくりしてんだよ。高校生のお前とは、違うんだよ、ボケが！」

睨み合う二人に対し、助手席に座る森谷が「お兄さんが居なくなつて寂しいんですよ」と諭すかのように言われ、正義は「やっぱり帰れ！」と怒鳴り散らし、軽トラは弟に黒い煙を吹きつけながら去って行った。

「おい、原田。凶星突かれたからって、破壊神の帰りの足はどうするんだよ」

息を荒げる正義に、桜田が追い打ちをかけ、暴れ始めようとする正義を藤田が抑えた。

「好都合じゃない。私、今日帰らなくて良くなったでしょ」

美弥の言葉に、津村が携帯を開き時間を確認して「20分後にあと一本だけ汽車がある」と訂正を入れた。頑としても動こうとしない美弥に、暴れ出そうとする正義を取り押さえながら、藤田が口を開いた。

「おい、田村。さすがに駄目だつて、きつと、親父さんも心配してんぞ」

「心配？何それ？一度もされた事ないわよ。家に帰って来たら、夜飯食べて、朝日が昇らない間に仕事に出かけるような父親よ」

「大体、どこに泊るつてんだよ。言っておくが、また風通しのいい居間に、俺は寝るつもりないからな」

美弥は津村に助けを求め、目をやるが大家族が蠢く部屋に寝る隙間が無いと断られ、桜田も同様に首を横に振り、口を開いた。

「大体、拗れた関係を引き伸ばしたら修正できなくなっちまうぞ」

周りに味方がいなく、美弥は渋々、駅に向かい歩き始め、その後を追い、津村と桜田も、倉庫から離れて行った。

「親の心子知らずつてな。ちょっとは、義彦の心配も気付いて欲しいけどな」

倉庫に入ってきた二人を居間で待つていた浩嗣が、美弥の父親を思いそう呟き、正義はそれに納得するかのようになり、肩をすくませるが、藤田は「それはどうかな？」と否定した。

「田村だつて。もう餓鬼じゃない、そんぐらい気付いてるさ」

藤田の言葉に、オジサンは巻いたタオルの上から、頭を掻きながら、複雑そうに口を開いた。

「そうかもな。けど、親思う心に勝る親心つて言うくらいだ。子と思う親の心は少ししか、子供に伝わらん」

「だとしても、その諺ことわざにあるように、親の心配性には勝らないかもしれないが、子は親を思ってるんだよ」

正義は、座布団運びの山田を探し「山田あ、座布団を持ってこい」と笑いながら藤田の腹にパンチを入れた。見事に腹に入った正義の

攻撃と自分で言い放った臭いセリフに齒痒い思いで苦しむ藤田を見て、浩嗣は大声で笑った。

「こりゃ、一本取られた」

「いやいや、親父。こんな臭いセリフは、めったに聞けたもんじゃねえって、明日は雨降るぞ」

事実、次の日は土砂降りの悪天候だった。

駅で津村と桜田に見送られ、頬を膨らませながら、最終だというのに、誰もいない一両編成の汽車に乗り込み、真つ暗な海面に移る月の光を眺めながら、ビルが立ち並ぶ街へと降り立った。

ビルの隙間から見える空は雲行きが怪しく、今にも降り出しそうな帰りたくない気持ちを表しているかのようだった。駅口から数分で我が家が入ったマンションが見え始め、エレベータが上に上がる中で、数え切れないほどのため息を漏らした。

扉を開くと薄暗い廊下が伸び、居間を通って自分の部屋に向かうとするが、ソファアの上でわざとらしく眠る父親に気付いた。仕事着のままソファアに眠る父親は、いかにも寝ていますと言わんばかりに、鼾いびきを掻き続け、部屋に行く気も失せた娘は、そんな父親の腹に蹴りを入れて起こした。

「そんな見え見えの狸寝入りで、心配してました。なんて言っても誰も信じてないわよ」

「・・・普通、そう見えてもソファアに眠る父親を蹴る娘がいるか？」

体をくの字に曲げ娘から受けた攻撃に苦しみながら、父親は声を出した。

ソファアの前に置かれたテーブルから眼鏡を手に取る父親を横目に「おやすみ」と吐き捨て、自室へと向かい明かりを付けると布団の上に『粹がつてんじゃねえぞ！』Ｔシャツが綺麗に畳まれて置いてあった。

「さすがは、あいつの息子だ。服のセンスが、まるでなつちやいない。・・・あの店に行って返してこい」

手に取った眼鏡を掛けながら父親は、吐き捨てるように娘に言う  
と自分の寝室へと向かう途中、娘に「行つていいの？」と尋ねられ、  
足を止めた。

「行つていいの?・・・お父さん、私を止めようとしてたんじゃないの?」

「一応、止めた。それでも、やると言うなら、それはお前の意思だ。  
娘の成長を応援しようじゃないか」

互いに背を向けながら行われた短い会話は、親と娘の深い溝に一本の橋を繋いだ。臭いセリフを吐いた父親は「明日、雨が降る」と言い残し、寝室へと向かい、娘は父親に今の表情を見せたくなく急ぎ扉を閉じた。

「まあ、鉄は早いうちに打てって言うしね。やっぱり帰って正解だったわ」

美弥は、連休明けの教室で椅子に踏ん反り返りながら座り、大声で笑いながら三人に報告をした。昨日の帰りたくない発言から一変しスツキリとした美弥の顔を見て、三人は何やらスツキリとはしない表情だった。

「ああ、忘れる所だった」

スツキリとしなかった三人の中で最初に口を開いたのは藤田だった。窓側にある自分の机から紙を取り出し、再び近づいて来て美弥に渡した。

「今度の試合で、お前、キッカーだから。ルールを頭の中に叩き込んでおけ」

藤田から手渡された<sup>おびただ</sup>夥しい量の紙とその中に書かれた文章を美弥は目にし、首を横に振った。

「無理だつて、こんなにたくさん！」

長い文章を見たら睡魔が襲い始める事を告げると、どこから取り出したか知らないがハリセンを正義を取り出した。

「大丈夫だ。俺がみつちり叩き込んでやる！」

「はぁ？正義が？」

その見た目といい、性格といい、決して頭が良さそうに見えない、むしろ自分と同レベルかそれ以下の人間が本当に、教える事が出来るのだろうかと思つた。

「・・・おい、なんか凄い見下されたような気分なんだけど、気のせいかな？」

「えっ？・・・いや、ホラ・・・普通、教育熱心そうなのって浩の方だと思つな〜って思つただけで」

遠まわしに馬鹿そうな正義よりは眼鏡キヤラ藤田の方がマシ発言に、全く気付かない正義は「安心しろ」と胸を張りながら言い、口下手な美弥の真意に気付いた津村と藤田は、話題転換を試みた。

「いや、本来は浩が教えるべきだと思うけど、これから仕事らしいんだよね」

「教えたいのは山々なんだが、2時限目が終わつたら出かけないといけないってな。今回の試合会場の申請やらで、色々動き回らなきゃいけないんだよ」

話題転換を試みた藤田だが、自分のこれから行くべき場所を一つ一つ言い始め、憂鬱になり始めていた。

「大体、試合申し込んできた足軽とか檜山コンビが申請手続きをしないんだよ。お陰で、こつちが忙しく動き回る羽目になつて・・・」

完全に鬱になつた藤田は、ぶつくさと文句を言い始め黒装束の死神だとか、同人誌野郎だとか訳のわからない事を言い始める中、マニアックな趣味を持つ夏樹が、一番声を掛けやすい藤田に近づいてきた。

「藤田く、狐が呼んでんぞ」

「はぁ？狐が？」

教室の扉に目をやると、坊ちゃんヘアの狐が藤田に手招きをしていた。

「どうも、w・村長さん。私、写真部の狭山夏樹と申します。．．．ああ、あと俺の姉貴等がさ」

w・村長と一括りにされショックを受ける二人に深々と、お辞儀をする夏樹は、藤田の耳元で話しかけようと背伸びをするが届かず、仕方なく藤田は夏樹の顔に耳を近付けた。

「足軽を動かす為にカイボー部の連中、なんか良くない取引してるらしいよ」

夏樹は、藤田に伝え終わると「今度、写真撮らせてね」とシヨツクのあまり硬直する二人に言い放ち、別の男子グループに加わった。

藤田は、狐の手招きにお答えし、廊下へと向かった。

「何の用だ．．．先に言っておくが負けてくれとか言うなよ」

何を言われるのかわかったような気がして、先に口を開いた藤田に、狐は本心を見破られ肩を落とした。

「いや、実はその通りなんだ」

「なら、話す事はない」

「お願いだから、話だけでも聞いてよ！」

教室に戻ろうとする藤田の背中を捕まえて狐は声を張り上げた。そんな狐の必死な表情に、飽き飽きとしながら藤田はため息をついた。

「お前さ、学習能力つてものを少しは持てよ。後先考えずに行動するから、痛い目に合うんだ」

「負けた時の事なんて、考えてなかったんだ」

「知らねえよ。足軽とどんな取引したかなんて、知りたくもない」

「カイボー部の倉庫にある物、全部無くなる」

「ふざけるなよ、てめえ」

教室の出入り口から藤田と狐の会話に割り込んできた正義が、狐に冷たく言い放った。



「いくら後継人が、好き勝手に出来る伝統だからって言ってもな。あの倉庫には、創業以来、受け継がれているもんがあんだよ」

「俺だってそのくらい、わかってるよ。だから、こうやって」

「俺達が負けて、足輕にカイボーを渡せって言うのか？お前等の身でもう売れや」

狐が全てを言い終える前に、正義が割り込み、言い終えると教室に消えて行った。ただ悔しさを噛み締めながら佇む狐の肩を叩きながら「俺達にはどうする事も出来ないね」と藤田も正義同様に伝えた。

「どうせ、檜山コンビには言っていないだろ」

藤田の問い掛けに狐は小さく頷いた。

「なら、そのまま伝えない方がいいだろ。戦いに支障が出る。負けした後、先輩方にボコられるんだな」

藤田は「馬鹿が」と掴んでいた肩を突き放し、俯く狐をそのまま放置し、教室に入って行った。

二時限目以降、本当に藤田は姿を消し、津村は職員室に用事があると、出て行った。休み時間、美弥は藤田の作ったルールブックと格闘し、何度も正義にハリセンで叩かれていた。

「違つべ、ボケ！攻撃権は四回で10ヤード進まなきゃ、交代するんだよ」

「いや、もう痛い！叩き込むってそっちの意味だったの？大体、10ヤードってどのくらいの距離よ」

「どのくらい？・・・10ヤードは10ヤードなんだよ、ボケ！」

再びハリセンが美弥に襲いかかり、正義は問題を出した。

「四回の攻撃内に10ヤード進めない場合、四回目はどうする？5秒以内で答える」

「ええ、ええつと・・・四回目の攻撃でパントつてものをして、自陣のゴールから遠ざけるためにボールを蹴る」

「正解。得点を稼ぐ方法は、二通りあります。その種類は！」

「ボールを持った人が、敵陣のエンドゾーンに入るか、キックでゴールポストにボールを入れる！」

「正解。タッチダウンとフィールドゴールは何点入りますか！」

「タッチダウンが6点。フィールドゴールが3点。ちなみに、タッチダウン後はトライフォー・ポイントで、もう一度、攻撃権が認められ、キックなら1点。タッチダウンなら2点獲得！」

正義は「正解！」と答えながら、ハリセンで美弥の頭を叩き、周りから見たら異様な光景が、教室の中央で繰り広げられ、ブレイキ役の津村と藤田がいないと、こつもあの二人はおかしくなるのかと、一歩距離を置き、全生徒が、早くどちらかが返って来る事を願っていた。

「痛い！なんで、正解したのに叩くのよ」

「ハイ、次の問題！お前の役割は！」

「えっ・・・ええつと、ええつと・・・」

「遅い！試合開始のキックオフと点数を取った後にボールを蹴るフリーキックじゃボケ！」

教室には、ハリセンの豪快な音が鳴り響き、教室に戻ってきた津村は、勉強をしすぎで知恵熱を発生させ、机に突っ伏す頭から湯気を出す美弥と、何やらスッキリした表情の正義を見て、藤田が早く帰って来る事を願い、ため息を漏らした。

「all man rush・ready go!!」

美弥の掛け声と、蹴り上げたボールを追って正義と大正を含めた10人の仲間が、走りだした。

藤田の操る敵の一人が落ちてくるボールを掴み「Go! Go! Go!」と掛け声を出し、ボールを持つ人を守りながら敵は、迫ってくる正義達に突っ込んでいった。敵陣の奥まで飛ばしたボールは、中央付近まで巻き返され、全員が肩を落としていた。

「ああ、うまくいかないな・・・おい、双子。お前等がレシーバーを捕らえる役目なんだから、しつかりしろよ」

バイソンの一人が、佇む双子に話しかけるが、両方ともそっぽを向き、無視された事に腹を立てるバイソンをスパイダー達が止めていた。

「ねえ、それよりさ・・・私達、女なんだけど、なんで all men rush なの？」

「知るか！その前に、お前は女という単語を辞書で引いてから俺達に聞け」

ちよつとした疑問に、正義がそう答え、カイボーを装着する双子と破壊神から攻撃を受け、数秒後マトリックス内でジェルになっていた。

「それにしても、田村のキックは良く飛ぶな」

ジェルになつた弟を横目に、大正が言い、それに対し全員が首を縦に頷き、そんな中、狛犬が、美弥に近づいてきた。

「ビギナーズラックか、素質があるんじゃないか？おい、破壊神、俺達のチームに入らないか？」

狛犬が勧誘をする後ろでは、双子が必死に首を横に振り「止めときます」と美弥が答えると双子は、親指を立てて突き出してきた。

「おい、狛犬。俺達の目の前で田村を勧誘するなよ」

フィールドの外にいる藤田が無線で声を掛け、狛犬が「冗談だ」と笑い飛ばした。

藤田は「つたく」と声を出し、油断も隙もあつたもんじやないと呟くを見て、森谷がやけにニヤついていた。

「ホオ、浩が感情的になるなんて、珍しいじゃない」

「何言つてんすか。田村は、まだカイボーを始めて日が浅いからですよ。でも」

「ほお！でも？」

「いや、ちよつと気になる事があつて・・・」

藤田の発言に、顔を輝かせる森谷は「なんだ。今日は赤飯を炊くか？」と問いかけるが、尋ねられた本人は、首を傾げた。

「いや、昔、どっかで会った気がするんですよ。それがどこだか、思い出せなくて」

本気で悩む藤田を見て、森谷は期待した自分が馬鹿だったと肩を落とした。

「ハア・・まあね。鈍男にんおに期待した私が、馬鹿だったよ」

「聞こえてますよ。誰が鈍男っすか」

「鈍男の正体に気付いていない時点で、あんたが鈍男だ」

フィールド内では、フリーキックの練習が再開され、メンテナン  
ス側の会話も強制終了し、二人は目の前の画面に集中した。そんな  
二人の後ろでは、赤いカイボアのメンテナンスをを行う津村と桜田が、  
森谷の発言に気を悪くしていた。

「あいつ、俺がカイボーするって言った時は、何も言わなかったぞ」

「私も、小学校の時に柔道をするって言っても、何も言わなかった」

同じ村に暮す先輩と幼馴染から、発せられた言葉と、痛い視線を  
感じ取り「勘弁してくれ」と呟き、困った表情を見せる藤田を見て

森谷は、更にニヤついていた。

「フフツ、人間って面白っ」

森谷の発言に「そんな死神染みた発言はしないで下さい」と藤田  
に指摘された。

マトリックスの世界での練習を終え、森谷が作った夕飯を食べな  
がら、大家族の居間では、メンテナンズ側で行われた会話が話題と  
なっていた。

「依怙えこひいき覇は肩かただ！」

桜田の発言に「そうだ、そうだ」と津村が便乗し、藤田が二人を  
指さしながら馴染みのある、お前等に気遣い訳がないだと発言す  
ると、それに対し、美弥が頬を膨らませた。

「なにさ〜それじゃ、私が浩に気を遣わせてるみたいじゃない。心外だわ」

三人の女性から、いやな目つきで、後ろ指を指される藤田は「どれもこれも和美さんのせいだ」と呟き、黙々と料理を口に運び続けていた。そんな話題で持ちきりになる中、テレビの横に置かれた、一世代昔の黒電話が音を立て始め、誰が出るかを決めるためテーブルを囲み、ジャンケンをした結果、この大人数の中、唯一グーを出した藤田が、珍しく舌打ちをしながら、受話器を取った。

「はい、こちら金田専門店」

藤田の声には、少々怒りが入って聞こえ、テーブルを囲んでいた原田兄弟と森谷は、久しぶりに不機嫌そうな藤田を見る事が出来、顔を見合わせてニタニタと笑って見せるが、受話器から聞こえる慌ただしい声と藤田の表情が曇ったのを見て、笑うのを止めた。

「ヒロ、誰からだ？」

正義の問い掛けに「スパイダーから」と伝えて、再び受話器に耳を傾けた。

『こちらスパイダー。足軽から奇襲を受け、二体のカイボ―を破損。一体は、レシーバーに起用予定だった物で、もう一体は、控えの機体です』

「カイボ―だけか？怪我人は出てないのか」

『奇襲を受けた際、倉庫には誰もおらず、怪我人はゼロです。我々が駆けつけた時には、去っていました。そちらも十分注意されたし』  
「わかった。他のメンバーには、連絡はしたか？」

『バイソンに連絡しましたが、奇襲を受けた後のようでした。ですが、損傷はゼロ。追い返した事を誇らしげに語っていました』

その後、メモ帳を片手に電話を続ける藤田の後ろでは、大正が倉庫から白いパワードスーツを取り出し、正義に投げ渡し、二人は二階へと駆け上がって行った。スパイダーとの会話を終え、受話器を降ろすと藤田はため息を洩らした。

「本格的に動き出しやがった」

いそいと食器を片づける森谷とオジサンを横に、美弥が久しぶりに手を上げて何があったのかと藤田に尋ねた。

「最初に合った時も、俺に攻撃してきただろ。あいつ等、事を運びやすくするために試合前から、カイボーを片っ端から潰しにかかるんだよ」

面倒そうに首を掻きながら答える藤田に美弥は、首を傾げた。

「でもさ、それって警察とかに連絡されたら終わるんじゃないの？」

「そもそも、日常用以外のカイボーを所持していること自体、違法すれすれなんだ。それが壊されたって警察に言おうが、逆に何で持つてるのって聞き返されて、相手にしてくれないんだ」

台所からは「そんなの当たり前でしょ」と森谷の声が飛んできて、当たり前前の事を、当たり前前のように言ってくる藤田に申し訳なさそうに肩を落とした。

「まあ、警察の目をごまかせるからって、好き放題やらせる訳にも、いかないんでね」

藤田は、再び受話器を取りダイヤルを回した。受話器からは呼び鈴が数回鳴り、しばらく経つと、受話器から「もしもし」と声が聞こえて来た。

「もしもし、ブレーキです」

要件を言おうとするが、その前に向こうから、その連絡を待っていたぞと切り返された。

「連絡が遅いんだよ。てつきりやられちゃったかと思っただぜ」

「って事は、狛犬の方も奇襲に？」

「いや、今受けている所だ。さっさと兵隊よこせ、さもないと、デイフェンスの要とハーフバックとフルバックのカイボーが、おじゃんになっちゃうぞ」

狛犬は場所を一方的に伝えたと、すぐに電話を切った。

「突然で悪いけど、ブリーフィングを始めます」

受話器を降ろした藤田は、居間で大人しく座る三人にそう伝えて、倉庫の方へと向かった。

説明会と入っても狛犬の所へ、急がねばいけないため、原田兄弟は藤田から場所を聞き、早速カイボーに乗り込み倉庫から飛び出して行った。

「はい、馬鹿兄弟。しばらくは私が二人のメンテナンスを行います。移動の際、何か不具合はございませんか？」

『おい、そりや毎日メンテナンスを行うヒロに対する暴言か？』

「冗談よ、冗談。正義君からの熱い信頼を受けちゃって浩、嬉しい？」

実戦になると、やたらにテンションが上がる森谷に尋ねられ「止めて下さい、悪寒が走ります」と仕事着に着替え、足にカイボーを装備しながら藤田が言い放った。藤田の言葉が無線を通して聞こえたのか、画面から正義の罵声が飛んでくるが、森谷はすぐに音声を切った。

「大正、そっちはどお？」

『隣で暴れる弟を省けば、特に問題はない』

準備運動を始める藤田の横では、津村と桜田は今、真つ暗な道路を走り抜ける原田兄弟の視点を、映像を映し出す眼鏡を通して見入っていた。

「おおお、今、FPSが人気あるつてももの納得いくかも」

「そうか、原田兄弟の動きはこんな感じなのか」

曲がりくねった道に入り、映像と一緒に体を横に揺らす二人の後ろからは、大きな体を大きな布で隠した美弥が登場した。

「ね、ねえ・・・なんで、私も着替えなくちゃいけないの？」

下に置かれたサンダルに素足を通し、恐る恐る藤田に近づきながら美弥が言ってきた。

「仕方ないだろ。兄さんもマサも狛犬の方に行っちゃったし、ここに足軽が来ないって表も無いからな」

足を伸ばしながら「自分の身と自分のカイボーは己で守れ」と藤

田に言われ、無理だと美弥は、首を横に振った。

「無理、無理！絶対に無理！私、マトリックスでしか、乗った事無いんだよ」

「大丈夫だ。攻撃と防御のプログラムも同時に出せるようになったんだろ？ゲーム感覚で、やればいいよ」

「うわっ、居間の発言はちよつと問題ありかも」

ゲームと現実を、ごちゃ混ぜにした問題発言に対し、指摘する美弥だが、その背中から津村と桜田が迫っている事に気が付かなかった。

「「そりゃあ！」」

「キヤアアアー！」

二人の掛け声と同時に、体を隠していた布が剥ぎ取られ、赤いパワードスーツを身に纏った美弥の姿が公の場に晒された。体の形を完全に表現するパワードスーツに美弥は思わず悲鳴を上げ、その場にしゃがみ込んだ。

「どうだ。破壊神！俺のパワードスーツをエロいとか言っておいて、いざ自分が着た時の感想は！」

「ああ、ごめんなさい、ごめんなさい！悪かったから、返して！」  
布を手を持った桜田を美弥は追いかけて、それに便乗した森谷が「へい、パス！」なんて叫び、倉庫中を飛び交う布を追いかける恥ずかしい人間は、自分が醜態をさらしている事に、気付かなかった。

「おい、田村。そろそろ、最終メンテナンスしたいから、カイボーに乗ってくんないかな？」

「えっ・・・うん」

何の反応も見せずに赤いカイボーの横に立つ藤田の言葉に、少々、心を傷つける美弥に、桜田がため息をついた。

「おい、浩。レディが、恥ずかしい恰好で現れたつてのに、その反応はどうよ」

「どうよって言われても、喜びはしゃげって言うんですか？そりゃ、ただの変態ですよ」



藤田の喜びはしゃぐ光景が、目に浮かばない桜田は「まあ、たしかに」と納得しながらも、ちょっとは反応しろと指示し、どんな反応を示そうか、かなり悩んでいた。そういえば、体力テストの際に、夏樹が目を輝かせながら、スク水が似合うと言っていた事を思い出した。

「スクール水着よりは、似合ってると思うぞ」

真剣な表情で言い放った言葉に、美弥はグーパンチで答え「変態！」と仰向けに倒れる藤田にそう言い放った。

結局、変態になってしまった藤田は、顔を真つ赤に染め上げ、腕で無い胸を隠す美弥に「さっさと乗れ」と指示し、カイボアの腹部を開いた。

「・・・よく、変身のアニメでさ変身するシーンを何度も使い回して、尺を埋めようとするのってあるよね」

「そりゃ、視聴者様への配慮だろ。突然、変身して敵と戦いだしたら、いつ変身したんだ！って、突っ込まれるんじゃないの？」

カイボアに乗り込む美弥を見ながら、津村と桜田がそんな会話を続け、それを耳にした藤田が「じゃあ変身シーンのように田村を変身させるか？」と聞いてきた。

手、足そして胴体と順番に、カイボアが美弥に装着され、最後に凛々しく構える顔の上から赤いカイボアの顔が装備されると、津村の前に現れた画面にオールグリーンという文字が浮かび上がりマミが「各伝達システム、オールグリーン」と答え、装備の終え、空手のマネ事をし、握った拳を前に突き出し、ガッツポーズを決める赤いカイボアの背景には、大きな炎が灯った。

「どお？」

藤田の問い掛けに二人は「微妙」と答えた。

「contact・美弥、聞こえる？」

初めて乗ったカイボアに戸惑いを見せる美弥の耳元から、津村の声が聞こえ戸惑いながらも大丈夫ですと答えた。

「田村、不具合はないか？」

カイボーを装着すると、見上げるほどだった藤田と同じ目線になり、視野の目の前に現れた藤田に驚き、後ろにのけ反りながら尻餅をついた。

「いてっ！」

毎度おなじみの光景に、全員がため息を漏らす中、倉庫の扉を叩く音が聞こえた。

「お晩です！」

熱のこもった声と同時に勢いよく叩かれ、倉庫の扉が揺れ動いた。誰もが、息を潜めるが「明かりが付いてんだからバレバレだろ」と扉を挟んで言われ、藤田が、扉を開いた。

「悪いけど、訪問販売はお断りなんで」

「誰が新聞配達員じゃ」

揉み上げや、後ろ髪をバリカンで刈上げ、オカッパ頭で丸い眼鏡を掛けた男が、現れた藤田を見上げながら、睨みつけてきた。

「残念だけど、ここにはもうカイボーは無いぞ、斑目晴信」

「阿保か、後ろにある赤いカイボーをカイボーと呼ばなけりや、何と呼ぶ！それに、壊そうとして、ここに殴り込むのに単身で来る馬鹿が、どこにいますってんだ」

声を荒げる晴信に対し、少々嫌気がさし始める藤田の横から、桜田が現れた。

「晴信、こんな事して、あんた等、もう終わりだよ」

「足軽が勝手にやった事だと言えば、どうとでも出来る。俺達は勝てればいいんだ。先輩のように、走るだけにしか興味を示さない奴とは、俺達は違うんだ」

「だったら、何をここにこへ来た」

「決まっている。商談だ」

桜田の問い掛けに、晴信は藤田の前に拳を突き出し、藤田はその拳に自分の拳をぶつけた。

「今起きている暴動を止めたいだろ。だったら、今度の戦いで、負けた場合、カイボーを一体、手渡すと言う要件を、二体に変更だ」

「ズルイ野郎だ。兄さんやマサが、いない時を狙って乗り込んできたな」

そう言いながらも藤田は、何も躊躇することなく良いだろうと言  
い、晴信の突き出した拳に再び、拳をぶつけた。

「但し、そっちが条件を変えて来たんだ。俺達が勝ったら、パンサ  
ーだけじゃなく、倉庫にある物、全部だ」

「なっ・・・出来る訳ないだろ！」

突き出された藤田の拳に、晴信は思わず後ろに下がった。

「おいおい、俺には個人でチームの商談条件を変えさせておきなが  
ら、お前は出来ないのか？そりゃ、一体何の冗談だ。それに、安い  
もんだろ。俺達のチームは寄せ集めだ。負けたら最低でも8体の力  
イボーが手に入る。なのに、こっちは勝っても、パンサー一体。と  
ても天秤で量るようなものじゃない」

悩む晴信に対し「勝てればいいんだろ？」と語りかけた。

「くそっ、どうにでもなれ！」

晴信は、ヤケクソになりながら、藤田の拳に自分の拳を思いっき  
りぶつけた。

『レディイイス、エエンド、ジエントルメエン。年初めの大会か  
ら一カ月、血を漲らせる爆弾ゲームが、これから始まるうとしてい  
ます。これからどんな、ビックプレーで俺達を楽しませてくれるの  
か！あつ、でも、高血圧の方は、なるべく興奮しないように見まし  
よう』

東山の中にこんな会場があり、そして、こんなにも客席が埋まっ  
ている光景が見られるとは、思ってもいなかった。芝のグラウンド  
を立派なライトがしっかりと照らし、朝と変わらない明るさを保つ

ていた。

「うわゝ、凄い。小さな村で、こんな施設があるなんて」

「田村・・・この村って意外と、学生やスポーツ選手が合宿所として使用するから結構有名なんだぜ」

カイボーに乗り込んだ美弥の調整を行う藤田は、目の前の光景に感心する美弥にため息交じりに指摘していた。

『今回の警察予報は黄信号。まあ、いつも通って事で、よろしく』

「ねえ、カイボーって結構、取締多いでしょ。なんでこんな公の場を使って、やってるのに村の人達は、迷惑がらないの？」

「そうは言っても、ここから、かなり収益を得ているからな。黙認するしかないんだよ。この村の宿屋は、この時期、満室になるし、相乗効果で、商店街も繁盛してる。ここで屋台を出している人達も、全員、村人だ」

「・・・知らなかった」

ローラーが付いた靴から、スポーツ靴に交換され、その場で足踏みして見せ、問題がない事を証明して見せた。

「大丈夫ツス！」

握った拳から親指を立てて見せる、お調子者。そんな美野に対し「そりゃよかったな」と口ずさむ巨人を見て、叫び声を上げながら男が登場した。

「ああああ！遅かったかあ！」

手には、一眼レフのカメラを持ち、腕に写真部と書かれたワッペンを付けた夏樹が、すでにカイボーに乗り込んでいる美弥を見て、残念そうに項垂れていた。

「・・・ええっと、夏樹君」

美弥は、一度、自己紹介をしていたはずだと、記憶の中から掘り起こし、名前を言い当てた。

「正解、狭山夏樹です。写真部兼、狛犬のメンテナンスをやってます。まあ、藤田みたく、総合指揮とかは、出来ないから、合同練習には参加してなかったけど。まあ姉貴達が、お世話になってます」

夏樹の姉貴をお世話した覚えがない美弥は、首を傾げ、藤田が「あの双子だ」と伝えると、美弥と津村の叫び声が、轟いた。

「嘘だっ！だって、似てないもん！似てないと言っより、全然キャラが違う」

美弥の言葉に、頷いて見せる津村。そんな凸凹コンビに、夏樹はカメラを向け「シャッターチャンス！」とフラッシュを焚きまくる。そんな夏樹にカメラ慣れしていない二人が悲鳴を上げ、カメラを構える夏樹を吹き飛ばした。

「まあね、今は狛犬の所に入ってるけど、昔は狭山コンビって言われてたらしいぜ」

無口キャラを気取っているが、実は家でベラベラと話しまくっているだの、意外と姉の方がシャイで、妹は人見知りが激しいだの、ぶつちやけトークを夏樹が繰り返す中、左右対称なポーズを決めながら狭山コンビが、夏樹の後ろに現れ、首を鷲掴みにして夏樹を連れて行った。

「contact・聞こえますか？」

「ばっちり」

美弥と津村が、最終確認をする中、試合の登録メンバーの中に、パンサーが入っている事に、全員が驚いていた。

「あのヤロ・・桜田の機体、使いやがって」

グラウンドを挟んで、敵のカイボーが一行に並ぶ中に、ピンク色のカイボーが一体、混ざっているのを見て、正義は登録用紙を握りつぶしながら、怒りを露わにする中、セレモニーが開始され、中央に白と黒のシマシマな服を着た三人の審判に促され、藤田と大正、狛犬がこちらからは、中央に向かって歩き出した。向かって向こうからは、斑目一角と足軽の一人が、歩き出し、審判を挟んで睨み合った。

審判からの諸注意が、行われた。  
「オフエンスリーダーの大将です」

「ディフェンスリーダーの狎犬」

「総指揮のブレイキです。よろしく」

「オフエンスリーダーの斑目一角」

「ディフェンスリーダーの足軽・・・」

それぞれが、軽い自己紹介を終わらせると、審判の一人がコインを指で弾き、宙を舞った。

『さあ、選択権を得た檜山コンビの一角は、レシーブを宣言。チーム弄月のキックラッシュからスタートという事になりました』

互いに笑顔を見せずに、握手を交わし、大正や狎犬が背を向けてグラウンドの外へ歩き出す中、一角が、藤田を呼び止めた。

「おい、ブレイキ」

呼び止められた藤田は、何も返事を返さないまま一角の方へ振り返った。気合を入れた剃った頭が眩しく光り輝き、つり上がった目つきが印象的な一角は、口を開いた。

「この前、言ってたよな。お前等じゃ、役者不足だって・・・役者を揃えてみたんだが、今の感想はどうよ」

「実力の伴わない力は破滅する。それを証明してやるよ」

藤田の挑発に何か言い返そうとするが、その前に藤田が背を向けて歩き出したので、不完全燃焼のまま、一角は、グラウンドの外へ向かって歩き出した。

「よし、それじゃ、今回は総指揮を藤田に任せてるからな。意気込みをどうぞ」

いつもなら大正が、何か演説をするはずなのだが、今回は他の奴等が混ざった合同チームで、そんな訳にもいかない。演説をしたい！そんな気持ちを押し殺し、大正が藤田を指名し、指名された本人は、多少驚いたが、咳払いを一つして、口を開いた。

「知ってるか、桜田って笑ったら結構可愛いんだぞ。そのめんこさは、破壊神のお墨付きだ。桜田が笑ったり泣いたりする度に、何かと理由を付けて田村の奴、襲いかかってるんだ」

藤田の意味がわからん演説に、男共が唸りだし、桜田と美弥は「おい！」と指摘を入れる。

「だからな、勝ったらパンサーが俺達に戻って来る。そしたら桜田が俺達に笑ってくれるはずだ。確かに勝ってもカイボー一体だ。負けたらそれこそ大打撃だ。けど、その天秤に桜田の笑顔を加えてみる。一気に傾くだろ」

藤田は「勝つぞ！」と珍しく声を荒げ、握った拳から人差し指を立て、上にあげた。それに合わせて全員が人差し指を上になげた。

「It is worth fighting!! one two three!!」

「four!!」

美弥のキックラッシュから始まり、男交じりの声を出しながら、ボールを高々と蹴り上げ試合が開始された。

く破壊神・美弥 粹なデビューく

「さあ、破壊神・美弥のキックラッシュから始まった。爆弾ゲームも第一クォーター、第二クォーターも終了し、現在14対13で弄月がキック差で優勢、だが、狭山コンビの姉がジェルとなってしまう大打撃。一方、足軽はレシーバーに斑目一角の乗るパンサーを起用し、かなり主力となつて来ている。現在、20分間のインターバルを使用し、ブリーフィング中。互いにどお出るか、楽しみでござんす。」

歯取の実況が、聞こえてくる中、40分以上、動き続けていた全員に疲れが見え始めていた。

「くそつ、フルバックがいなくなった。どおする」

バイソンの一人が、声を出し、藤田はふと、美弥の方を見て、視線に気が付いた美弥と目が合った。

「田村、フルバックやってみるか？」

「・・・・・・へっ？」

「マトリックスで確か、フォーメーションやった事あるよな？」

「えっ?・・・えっ!いや、まあやった事はあるけど、無理だつて」

必死な抵抗も空しく、気が付けばオフエンスで正義の後ろで構える美弥の姿があった。

「セット ハット!」

正義の掛け声と同時に、バイソンからボールが正義に手渡され、ボールを持った狭山妹を守るため前を走り、側面から敵の足軽に思いつきりタックルされる美弥の姿があった。

「翠」、なまら怖いんですけど・・・」

後半に入つて、敵がタイムアウトを取り、その間に美弥が津村に助けを求め無線で嘆いていた。



「ま、まあ・・・今の所、しっかり機能してるし、大丈夫だよ」

試合の流れをこつちが掴み始め、21対13と7点差に広げる事に成功したため、どうやらそのまま続行するような話が完全に出てあがっていた。けど、破壊神をフルバックに起用し、何かあると臭わせておきながら、結局パスで何度もファーストダウンを奪い、タッチダウンを決めたため、ただの囷だと呼ばれてしまい、流れは再びどっちつかずの状況が、続いていた。

そんな中、美弥が遂にボコを出してしまった。正義から受け取るはずだったボールを落としてしまったのだ。

「ファンブル！」

敵のチームからは、そんな声が聞こえ、楕円形のボールは予測不可能な動きをしながら、跳ね、全員がそのボールを追いかけた。攻撃権を向こうに奪われ、その後、ラインの力士達が、ランのゴリ押し、ブラストを何度も使い、ファーストダウンを何度も取得し、タッチダウンとトライ・フォー・ポイントでタッチダウンを決められ、21対22と逆転を許してしまった。

「ごめん」

「気にするな、集中して行こう。取り返すんだ」

大正が頂垂れる美弥の背中を強く叩き、励ますが、その後ろから狭山妹が落ち込む美弥の尻を蹴り上げ、無言のままキックリタンのポジションに付き、無言のプレッシャーは美弥の落ち込みを更に悪化させた。

敵のキッカーは、穴だと呼ばれてしまった美弥にボールを蹴り飛ばしてきた。

それをカバーに入った狭山妹がボールを受け取り、全員が狭山妹を取り囲むように走りだした。完全に足を引っ張ってしまっている美弥は、孤独感を味わうようになっていた。

「・・・むら・・・おい・・・田村美弥！」

意識が飛んでいた美弥の耳元で、藤田の声が聞こえ、思わず「ハ

イ！」と背筋を伸ばした。

「おい、大丈夫か？」

「えっ、大丈夫だよ。ちゃんと、足引つ張らないように頑張るから」  
大丈夫だと美弥が言つと、何故か藤田がため息をついてきた。

「お前さ・・・何、気を張り詰めてんだ？」

「だって・・・負けたら、カイボー無くなっちゃうんでしょ？」

藤田は、タイムアウトを取り、森谷にある事を伝え、森谷はその伝えられた事を大正に伝える中、美弥を呼び出した。

「ど阿保」

呼び出されたかと思えば、開口一番にそう言われ、更に落ち込む美弥。

「なんか考える前に行動起こすような奴が、負けた時の事なんか考えてんじゃねえよ」

確かにその通りだが「でも」と反論しようとするが「でも、じゃない」と釘を打たれた。

「なあ、弄月の意味って知ってるか？」

「はあ？何、突然」

「月を眺めて楽しむって意味だ。それ以外に何も要らない。俺は、そういう風に思っている。カイボーだってそうだ。走れりやそれでいい。楽しめればそれでいい」

お前は、楽しくないのか？と尋ねられ、何と答えればいいのか迷っている間に、藤田に肩を思いつき掴まれた。

「いいか、今からお前に、最高の華を持たせてやる。楽しんで来い」  
背中を押され、美弥は再びグラウンドの中に入って行った。

大正からポジションの変更を伝えられ、美弥はレシーバーとして、横サイドに立っていた。

「contact・田村、聞こえるか。今から俺が、お前のメンテナンスをする」

「えっ・・・嘘でしょ。正義は？」

「夏樹に任せた。いいか、今から送るルートをちゃんと走れ、無駄な事は考えるな」

美弥の視界には、これから走るルートが送られ、右下に表示され、セツトバックから、正義はコールを掛け、その後ろでは大正と狭山妹が構えていた。

「私なんかが、このルートを走ったって、誰も相手にしないよ」

「だからやるんだ。俺はお前を信じてる。お前はどうか？俺を信じるとは言わない。けどな、俺達を信じろ」

藤田の言葉が終ると同時に、バイソンから正義にボールが手渡され、正義は大きく横に移動し、後ろに立つ大正にボールを投げ渡した。ボールを取った大正に、襲いかかろうと敵が向かってくる中、大正がボールを前へと放り投げた。

大きく弧を描きながら飛んで行ったボールは、ボールが正義に手渡されてからずっと真っ直ぐ走っていた美弥の方へと飛んで行き「止める！」という一角の叫び声が、グラウンド中に轟いた。

完全にフリーになっていた美弥は、走りながら後ろを振り向くと、ボールが音を立てながら飛んでくるのが見えた。両手を伸ばしボールを受け取ると、一気に加速し、独走状態で美弥はエンドゾーンに到達した。

『……ブ、ブラボオオウ！なんてこった、破壊神・美弥がビツクプレーを叩きだした。自陣20ヤードから、一気に巻き返しそのままタッチダウン！』

客席からは歓声が響き渡り、プレーを成功させた味方は、雄叫びを上げて喜び、美弥の元へと駆け寄ってきた。「良くやった」そんな言葉と手が美弥に叩きつけられ、未だに自分が何をやらかしたのか理解できていない美弥は、放心状態だった。

放心状態の美弥の尻を蹴り上げた狭山妹は、無言のまま親指を立てて見せた。

ビックプレーの流れは、後半になっても止まる事はなく、相手のミスを誘いだすことにも成功し、何と自殺点を相手が出した。その後、トライ・フォー・ポイントで、キックを決めて一点を追加、その後、向こうのキックラッシュが始まるが、残り時間も少なく、おそらくこれが最後のプレーとなるだろう。向こうでは気合を入れてか円陣を組んで、意気込んでいるがかなりの点差を開いていた。こちにとっては、全くの無意味に近かった。

「田村、最後の印籠、お前が渡してやれ」

おそらく、美弥に蹴って来るだろうと予想した大正が、そんな事を伝えてくる。

「・・・浩」

自分のポジションに立った時に、何故だろうか、突然、変な事を言い出してしまった。

「ん？なんだ」

「私、浩の事、信じるよ」

「・・・おう、そうか」

「だから、最後まで見てて・・・」

「当たり前だ。・・・お前のデビュー戦、粹な感じで終わらせようや」「うん」

高々と蹴られたボールは、予想通り美弥の所へ向かって飛んできた。

「ツインタワーの、お披露目と行こう」

「了解」

藤田の言葉に、そう答え飛んできたボールをしっかりと取り込んだ。「Go!! Go!! Go!!」美弥の言葉を合図に、全員が襲いかかって来る敵のカイボーとぶつかり合い、それでも取りこぼした敵のカイボーが、美弥に襲いかかってきた。

「田村、二時方向、足軽。左旋回」

「確認」

右から襲いかかって来るカイボーを左に身体を回転させながら、

交わし、襲いかかって来ようとするカイボーに正義が、タツクルを決め、美弥はその上を飛び越えた。

目の前が一気に開き、向こう先には、敵のエンドゾーンが見えた。だが、その前にはボールを蹴ったピンク色のカイボーが立っていた。「これ以上先に、行かせるかよ！」

一角が、走って来る美弥に向かって走り出した。

「それは、小麦ちゃんのカイボーだ！返せええ！」

美弥は襲いかかって来るカイボーに向かって大きくジャンプし、拳を振り上げた。真つ赤なカイボーは、ライトを背に向けて拳を振り降ろした。眩しさに一瞬、目を取られたカイボーの顔に、見事にヒットし、芝のグラウンドは大きく凹み、蜘蛛の巣状に破壊された。ピンクのカイボーは一瞬にして、ジェルと化し、全員が息をのむ中、悠々とエンドゾーンを突っ切り、リターンタッチダウンを決めた。

『破壊神・美弥。まさか最後に自分の噂を再現し、リターンタッチダウンを決めたあ！そして、試合終了のホイッスルが吹かれたあ！試合終了！圧勝、弄月寄せ集めチームが、足軽を主力メンバーにした檜山コンビに点差をつけて圧勝！これは、もう歌うしかない！』

会場には、テンションの上がりそうな歌を囃取が歌い続け、チーム弄月は勝利の味をしっかりと味わっていた。そんな中、二度のタッチダウンを決めた美弥は、再び放心状態へ成り果てていた。藤田の手を借りながら、やっとの思いでカイボーから出てくると、藤田が「楽しかったか？」と尋ねてきた。

（まあ、確かに楽しかった）

「楽しかったよ・・・でも」

藤田に肩を担がれた美弥の目頭から、何故か涙が溢れ出てきた。「なまら、怖かったああ！」

今思えば、何故そのまま抱きついてしまったのか・後悔先に立たずと言うのがその通りだった。そんな写真を夏樹に取られ、次の日の高校新聞には『ツインタワー、片方に寄りかかる』と一面に取り上げられた。

「俺はどちらかと言えば、破壊神伝説再びの方が、良かったと思うけどな」

一面に飾られた写真を見て、顔一面を真っ赤にする美弥に対し、正義は二面にある芝のグラウンドの一部が上手に凹み、その中央で完全に伸びる一角の姿が映し出された物を眺めながら言ってきた。

高校新聞の一面だけじゃなく、全てが美弥に関する物で覆い尽くされ、その快拳を成し遂げた本人は、もはや時の人ではなく仙人になっっていた。

「おーい、夏樹。この写真、コピーよろしくな」

正義は、この写真を撮った事を自慢する夏樹に、そんな事を言い放ち、美弥は、友達にすらなって無かったはずなのだが「絶交だ！」と夏樹に言い放っていた。

そんな二人を見て、凸凹コンビの片割れの二人は、暴れる二人を見てため息を漏らしていた。

試合が終了した後、部屋の掃除をしていたオジサンが、食器棚の上から缶ケースを発見し、その中に一枚、興味深い写真が入っていた。

「おい、浩……ちよつと来てみる」

「何？……俺、和美さんと、これから弄月高行かなきゃいけないんだけど……」

勝負に負けた足軽と弄月高カイボー部との商談は、藤田の要求によつて不成立となり、だが、桜田のカイボー以外、必要無いと檜山コンビと狐に言い放ち、今日、カイボーを取りに行く予定だった。

「まあまあ、大正にでも行かせておけ」

「・・・？」

妙に笑う浩嗣の提案で、大正と森谷が軽トラで出発した。

「で？一体、何見つけたんすか」

藤田の言葉に、浩嗣は一枚の写真を手渡した。

写真を面倒そうに見る藤田だが、その表情は、一変した。

「田村！」

倉庫で桜田を追いかけて回す美野に大声で話しかけ、ようやく捕まえた桜田に噛みつきこうとしていた美野は、噛みつくのをやめた。

「浩く助かつよ」

涙ぐむ桜田は、美野の包囲網から抜けだし、藤田にくっ付くが「いや、別に助けようとした訳じゃないんで」ときっぱりと否定した。

「おい、田村。やっぱ一度会ったんだよ、俺等」

「はあ？」

首をかしげる美野に、藤田は一枚の写真を突き付けた。

藤田の持つ写真に、倉庫にいる全員が覗きこんだ。写真には、金城正志と美野の母親と一緒に写っていて、二人の間に無愛想な目つきでカメラを睨みつける男の子と、その男の子の上によじ登り、ピスサインをする女の子がいた。

「あつ・・・これ私だ」

美野は写真に写る自分を指差しながら、下にいる男の子と写真を持つ藤田を見比べた。

「え・・・えええええ！あれ、浩だったの？あの、すごい感じの悪い子」

「感じが悪いって言うか、お前がハツチャケ過ぎだったんだよ・・・まあ今もだけど」

「いやいや、さすがにこの頃の私よりは、今はハツチャケてないわ

よ」

軽く否定してみるが、そんな美野に対し全員が「えっ？」と声を洩らしながら首をかしげていた事を言うまでもない。

「はい、ご対面」

森谷の合図で布が剥ぎ取られ、ピンク色のカイボーが倉庫の中によつてきた。

「おおおお！」

全員が唸り声を上げる中、早速解体したい衝動に駆られる藤田は、その気持ちを抑え込み、足踏みをし続ける。

「桜田、てめえ笑えや！俺達が何のために戦ってきたと思ってる」

「誰が笑えって言われて笑うか！」

結局、あの戦いの後も桜田は満面の笑みを見せる事無く、責任を取れと藤田に追求し、代わりとして、藤田が全員の前で笑みを見せる事となり、藤田の笑みを見た人達は、しばらく夢で魘されたと言われている。

「さて・・・これで、全部が揃った訳で、白薔薇から抜けた事だし、そろそろチーム名を考えようと思うんだが」

騒ぎ続ける正義と桜田。そして、衝動を抑え込む藤田を放置し、大正が提案してきた。

「正義のヒーローって付けたい！」

と提案する正義に、桜田は即座に却下した。

「馬鹿か、それじゃ、まるであんた等、二人が主要キャラみたいじゃないか！むしろお前等は、アクセルとブレーキだる正義？英雄？あんた等二人からは、かけ離れた存在だ」

桜田に一刀両断され、何故か藤田が落ち込んだ。

「だったら、桜田！お前にピンクなんか似合わねえんだよ。どす黒い色にすれ！」

正義の反論に、提案を出す美弥や津村の声は届かず、収集がつかなくなつた状況に大正は呆れ、森谷は「馬鹿でいいんじゃない」と



提案した。

「はあ？和実、馬鹿じゃねえの。馬鹿って名前をチーム名にする馬鹿が、どこにいるんだよ、馬鹿」

正義はここで一体何回、馬鹿と言ったでしょう？

「フリーリッシュ。かつこいい名前じゃない？」

確かに正義のヒーローよりはマシだと、女性陣は賛成し、多数決ですら男性陣は負けてしまい。チーム名が決定した。

『ボスフリーリッシュ（馬鹿者共）』

く破壊神・美野 粋なデビューく（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

いかがでしたでしょうか？

ここで第二章が終了するのですが『ボスフリーッシュ』はここで一度、終了させていただきます。

いや、申し訳ないです。

続きも書くこうと思います。・・・というか、多分、書きます。

自分でも未だに結末が見えないため、こんな曖昧な終了してたまるか！

・・・という気持ちに駆り立てられているので、またしばらくしたら『ボスフリーッシュ2』が日の目を拝めるかと思っています。

それはいつの日になるか、正直わかりませんが、気に入ってくれた方は気長にお待ちください。

御意見やご感想、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5675j/>

---

ボスフーリッシュ

2010年10月8日15時24分発行